

## リンネの人間論

ーホモ・サピエンスと穴居人（ホモ・トログロデュッテス）ー

岡崎勝世

### 目次

はじめに

第1章、『自然の体系』初版（1735）における人間の位置

1. 人間の位置
2. リンネと「啓蒙主義」

第2章、『自然の体系』第10版（1958-59）における人間の位置

1. 「哺乳綱」・「霊長目」・「ホモ・サピエンス」
2. ホモ・サピエンスとその亜種
3. 穴居人（ホモ・トログロデュッテス）

第3章、『自然の体系』第12版における人間の位置

1. ホッピウス『ヒト形類』（1760）
2. 『自然の体系』第12版（1766-68）

第4章、ブルーメンバッハとグメリンによるリンネの人間論の修正

1. ブルーメンバッハ『人間の自然的亜種について』（1775、1781、1795）
2. リンネ著、グメリン編『自然の体系』第13版（1788-93）

おわりに；穴居人（ホモ・トログロデュッテス）の後裔たち

はじめに

人類が分類学上では哺乳綱（Mammalia）、霊長目（Primates）の一員であって、ホモ・サピエンス（*Homo sapiens*）という学名を与えられていること、およびこの学名がスウェーデンの博物学者、カール・フォン・リンネ（Carl von Linné、1707-1778）に由来するものであることは、今日、あまねく知られていることである。

リンネが人間にホモ・サピエンスという規定を与えたのは、『自然の体系』第10版（1758）においてであった。この第10版では、しかし、このヒト属には、今日のようにホモ・サピエンスだけが所属していたわけではなかった。もう一つの種として穴居人（ホモ・トログロデュッテス、*Homo troglodytes*）が記載されていたからである。またホモ・サピエンスという種についても、その亜種（変異）として、アメリカ人、アジア人、ヨーロッパ人、アフリカ人という「人種」のほかに、これらとまったく同格の位置を有する亜種として、「野生人（*Homo sapiens ferus*）」と「奇形人（*Homo sapiens monstrosus*）」が記載されていたのである。

今日では、もちろん、これらの野生人と奇形人が亜種として記載されることはない。「人種」も、1950年のユネスコの宣言で「生物学的現象というよりはむしろ社会的神話である」とされ、その後のヒトゲノム解読の進展によって、「人種」概念に生物学的根拠がないことが裏付けられてきた<sup>(1)</sup>。現在地球上に存在する人間は、生物学的にはホモ・サピエンス一属一種のみであり、亜種も存在しないのである<sup>(2)</sup>。また他方では化石人類が次々と発見されて、ヒト属には新たに「原人 (*Homo erectus*)」や「ネアンデルタール人 (*Homo neanderthalensis*) はじめ、新しい種が続々と記載されるようになった。そして、最後に、「穴居人」の種小名のほうは別の「属」に移り、チンパンジーの学名 (*Pan troglodytes*) のなかで生き残っている。

このようにしてみると、今日のホモ・サピエンスは、名称そのものは変化していないとはいえそれをとりまく諸存在との関係では、属においても種においても、リンネのそれからはるかに隔たった存在となっているといわねばならないであろう。

ひるがえって、リンネの「ホモ・サピエンス」について、我々の間ではいかなる認識が共有されているといえるであろうか。この点に関しては、科学史研究の進展や人種概念の再検討のなかで、日本でもその内容は少しずつ明らかになりつつあるとはいえよう。しかし、なおリンネの人間論の全体像に関する議論が見あたらないというのが現状である<sup>(3)</sup>。本稿の目的は、こうした状況から、まずはリンネの人間論を18世紀の人でありスウェーデン人であったリンネに即して明らかにすること<sup>(4)</sup>、そしてそれがブルーメンバッハ (*Johann Friedrich Blumenbach, 1752-1840*) とグメリン (*Johann Friedrich Gmelin, 1748-1804*) による修正によって整えられ、19世紀にゆだねられるまでを追跡することである<sup>(5)</sup>。

## 第1章、『自然の体系』初版(1735)における人間の位置

本書は28歳のリンネが留学中のオランダで出版したもので、大フォリオ版とはいえわずか11頁の規模の著作である。本書はその副題にあるように、全体としては「綱・目・属および種により体系的に配置された自然の三界」を提示しようとしたものである。自然を鉱物界・植物界・動物界の三界に区分すること自体は博物学の伝統にそったものだが、各界を綱 (*classis*, 英語は *class*) - 目 (*ordo, order*) - 属 (*genus, genus*) - 種 (*species, species*) へと階層的に分類するという、この階層分類の思想こそ、後にのべる二語式命名法とともに、今日まで継承されているものである<sup>(1)</sup>。リンネによれば、博物学とは、この三界の「自然の物体の分類と名称付与」(19)を行う学問に他ならなかった。この場合、あらゆる「種」について、その「始源的単位をある全知全能の存在すなわち神、およびその御業つまり創造に帰すべき」(18、ゴチックは原著) だとする立場が前提となっている。

この三界のうち、植物界に対する彼の記述が、リンネを一躍ヨーロッパの寵児に押し上げることになった。本書がセンセーションを起こした原因は、彼が提案した「性体系」による植物の分類法にあった。雄しべの数と雌しべの数のみによってあらゆる植物を分類・配置するというその単純明快な方法は、「大航海時代」と結びついて当時ヨーロッパで勃興しつつあった博物学趣味の時流にマッチし、さらにそれを一挙に加速する役割をはたした。ただしこの人為的

な分類法は、その明快さで急速な支持者の拡がりを獲得する原因となったが、しかしその故に、その後自然の複雑さの前でかえって限界があらわとなり、没落の原因ともなった。今日、リンネの命名による膨大な数の植物の学名が生き残っているものの、リンネの体系のほうは、ジュシューの『植物の属』（1789）に始まる自然分類に取って代わられている。

## 1. 人間の位置

植物界の場合とは異なって、リンネの動物界の記述は、基本的には今日まで命脈を保っている。もちろんリンネ自身の記述も初版のままではなく、変化を遂げている。ここではまず、彼の出発点となった初版での記述を確認しておこう。彼は動物界（Regnum Animale , Animal Kingdom）を四足綱（Quadrupedia）、鳥綱、両生綱、魚綱、昆虫綱、蠕虫綱の6綱に区分した。そしてその四足綱をさらに5目に区分して、その筆頭に「ヒト形目（Anthropomorpha）」を設定した。分類は全体が表形式で示されており、その「ヒト形目」に関わる部分を訳出したのが表-1である<sup>(2)</sup>。

『自然の体系』初版における動物分類の特徴の第一は、このように人類が明確に動物界の一員として、具体的にはサル、ナマケモノとともに「ヒト形目」の構成員として位置づけられていることである。ブローベリによれば、この「ヒト形目」という名称を、リンネはイギリスの博物学者ジョン・レイ（John Rey, 1628-1705）から受け継いだ。だが、レイは彼の「ヒト形類（anthropoid）」にエイプ（無尾猿）は位置づけたものの、ここに人間を組み込んだわけではなかった。レイは、人間には分類上の位置づけは与えていないのである<sup>(3)</sup>。これに対しリンネは、「ヒト形目」のなかに人間を組み込んでいる。これは本書の最も重要な特徴点でもあり、本章の第二節で考察することとしたい。そこに進む前に、リンネの動物分類とそこでの人間の位置づけの特徴を全体的に整理しておこう。

彼の動物分類の特徴は、第二に、植物の場合と異なって、自然分類が目指されていることである。例えば鳥綱についても「羽毛で包まれた身体、二つの翼、二足、堅い嘴、雌は卵生」とあり、このように身体的諸形質のほか卵生・胎生などの生殖上の諸特徴も含めて分類され、さらに「綱」より下の段階では指や歯の数なども分類の指標とされている。そしてこのように自然分類が目指されていることこそ、様々な修正を受けつつも基本的には彼の動物分類が今日にも受け継がれてきていることの原因であろう。

第三に、ヒトの定義として、ソクラテスが座右の銘としたことで有名な格言、「汝自身を知れ（自分自身を知るもの）」が登場していることである。ここで記されているヒトの定義は、今後も一貫して記されていくことになる。ただし、まだホモ・サピエンスという名称は、ここでは登場していない。

第四に、ヒト属が四つの「種」に区分されていることである。各「種」は、見られるように、三語で表現されている。しかも「白色ヨーロッパ人」、「赤色アメリカ人」、「暗色アジア人」、「黒色アフリカ人」は、それぞれが独立した「種」としてここでは位置づけられているのである。本書では分類は「表」としてしか提示されておらず、例えばサル属の「種」の欄を見ると、エイプ、ヒヒ、オナガザルなどがならんでいる。この四種の人間は、少なくとも表の上では、

ヒヒとオナガザルなどが別の種であると同じように、別種と表現されていることになる。しかし残念ながら表で示されているだけで、その背後でリンネが何を考えていたかは、確定的なことはいえない。ここではただ次の点を指摘するにとどめたい。すなわち、彼の出発点においては、人間を動物界の一員とする位置づけは確定されたものの、その人間論の詳細は、まだ今後にもたなければならぬ状況であったということである。

## 2. リンネと「啓蒙主義」

さて、リンネが人間を動物界の一員として明確に位置づけたことの意義を、ここで考察しておきたい。それは、リンネが生きた 18 世紀は「啓蒙主義の世紀」であり、従来リンネに関してこの啓蒙主義との関係で相反する位置づけがなされてきたが、その位置づけに、この問題が深く関わっているからである。

当然ながらこの場合、「啓蒙主義」にいかなる規定を与えるかが、その前に問われなければならないであろう。「啓蒙主義」の果たした役割を整理したポーターにならって、その中心的役割を、「聖書において啓示され、教会によって保証され、神学において合理化され、説教壇から説かれてきた、人間と社会と自然とを理解するための聖書にもとづく来世志向の枠組みときっぱり手を切ること」<sup>(4)</sup>に置いて、考察してみよう。

まず、サルあるいはエイブと人間が近縁の動物であるという認識自体は、古くはアリストテレスから、また「霊長類学の父」タイソンが今日のチンパンジーを解剖した 1699 年以来、リンネの時代までには、既に共通のものとなっていた<sup>(5)</sup>。しかし他方で、このサルあるいはエイブと人間との関係をめぐって、二つの対立的見解があった。一つは、両者の断絶を強調する見解である。上のタイソン自身、「より高貴な能力 — 魂、理性、悟性 — は、組織された物質によって生み出されることができないのであって、それはより高度な原理を有している」と述べていた<sup>(6)</sup>。脳の形態が類似しているとしても、その機能や目的、話すことや精神活動まで、解剖学は説明できないと考えていたのである。リンネが「ヒト形目」という用語を借用したジョン・レイも、まったく同じ理由から、人間を他の動物から切り離して論じていた。すなわち科学が人間の究極的な種的特性を扱うことはできないと考えていたのである。こうした見解の背後には、伝統的な神学的人間観が控えていた。周知のように、創世記によれば、人間は天地創造の第 6 日に神の似姿を与えられて創造され、「中間の環」の位地を、つまり一方では天使に次ぐ位置、同時に他方では、自らより下位にある被造物に対しては支配者の地位を与えられた。知恵の木から実を食べたのは人間のみであった。ここでは、こうした意味で特権的存在であった人間を動物と同じ次元に置いて分類対象とすること自体が、原理的に否定されることになる。

これに対し、当時は「存在の連鎖」の観念が広く認められていた時代であり、こうした立場から、人間を分類の対象から切り離すことに対する批判が行われていた。例えばジョン・ロックは、『人間知性論』のなかで、「可視的形態世界の全体にわたってなんの切れ目ないし間隙も見ない」<sup>(7)</sup>と主張した。しかも彼は、この引用と同じ場所で、存在の連鎖における人間の位置について「私たちの上にある被造物の種は下にあるよりはるかに多い」<sup>(7)</sup>と論じている。

この立場は無神論でもなく、また人間を「中間の環」とするものではあるが、しかしラヴジョイによれば、その「中間の環」についての考え方は、伝統的な意味でのそれとは異なっていた。すなわちここでは、「人間は系列の中間ではなく下端にずっと近かった。人間は、単に感覚を持ったものから知的な存在形態への転換点を占めているという意味で『中間の環』であった」にすぎないものとされているのである<sup>(8)</sup>。ここでは人間は、知的存在ではあっても、もはや伝統的な特権的地位を失った、単なる動物の一員というということにされたのである。

先にリンネに関して二つの相反する位置づけがなされてきたと述べたが、それはより具体的に言えば、このような断絶したものとするか連続したものと見るかという二つの対立的な立場とリンネとの関係をめぐる、評価の違いといえるであろう。

リンネは後にも見るように「存在の連鎖」の信奉者であり、『自然の体系』初版で人間を動物の一員として位置づけた。また、この位置づけは生涯変わることはなかった。この意味では、「唯名論者」であったロックと同一の立場に立ち、伝統的・神学的な人間の位置づけに対立しつつ、革新的な主張を行ったということになる。そしてこの場合、リンネは典型的な啓蒙主義者という位置づけを与えられることになる。西村三郎氏の「リンネもビュフォンも、…性格や信仰は対蹠的といってよいほど違っていたにもかかわらず、ともにこの啓蒙思想の精神を体現し、それぞれのやり方でその実現のために努力を傾けた人物だった」<sup>(9)</sup>という評価は、このように理解されたリンネを表現している。

しかし、リンネに即して考えた場合、果たして聖書と「きっぱり手を切ること」が行われたのであろうか。筆者には、これは一種の外形的一致または結果論であって、リンネ自身に即してみれば、彼の人間の位置づけには、別の特殊な要素が絡んでいるように思われる。

その要素とは、彼の『神罰』にあらわれる神である。本書は、息子のみにも与える一種の心覚えとして書きためられたといわれる。だが公開することが前提されていないだけに、それだけ、彼と神との関わりを鮮明に示してくれているとも言える。

まず公式的には、彼の神は何よりも創造者としての神であったし、また彼の博物学研究は、神の御業と叡智とを賛美する、敬虔な行為でもあった。初版から第12版まで、『自然の体系』全ての巻頭には、聖書の詩編104 - 24節以下の引用がおかれている。

主よ、あなたのみわざはいかに多いことであろう。

あなたはこれらをみな知恵をもって造られた。

地はあなたの造られたもので満ちている。

これはこれでリンネの偽らざる信条を示すものであるし、またそれは、彼に大きな影響を与えたジョン・レイはじめ、当時の多くの自然研究者たちと共通の精神でもあった。

しかし、リンネの神は、このような自然神学で語られる神と異なる相貌も備えていた。リンネの宗教的世界観を分析したリンロートは、「リンネの神は創造の神であると同時に、ねたむ神であった。聖書の粗野な解釈方法を伴う律法主義的正統主義が不滅の力強さをもってリンネの中に生きていた」<sup>(10)</sup>と述べている。リンネの『神罰』に現れる神は、まさにこの「ねたむ

神」である。

ここでの神は、まず、人間が犯す悪事を決して見逃さないばかりでなく、モーセの十戒にあるように、同害報復の法で応える。

スリヘルト。親衛兵。フォン・ビュセン未亡人に恋をして賦役領地を贈る。義理の息子がそのことに憤慨し、夜遅く窓越しに三発の銃弾を撃ち込む。三発の銃弾はスリヘルトの胃を貫通し、スリヘルトは死亡。

数年の後、義理の息子が胃癌におかされ、胃に三個の穴があく。そのため身の毛がよだつような死に方をする（264頁）。

また、神はどんな女性の些細な軽口も見逃さず、それを夫の死を以て罰することすらある。

神学博士ニルス・ヴァレリウス教授。一七六四年に急死。婦人のボイエは、ドレスや夜会服にかけては見えっぱりであった。

…倫理学教授ダールマンの夫人が…（急死のことを聞いて）言った。「ヴァレリウス夫人は今日どんな夜会服をお召しになるのかしら。明日はどんな服かしら。それが知りたいものですわ」。

ダールマン教授はそのとき田舎の領地にいたが、まさにその時刻に病気になり、一週間もしないうちに世を去る。

神はすべてを見聞きしておられる。復讐の神ネメシスの耳に入らぬよう気をつけるがよい（184頁）。

罪が犯されても、まだ神罰が下されていない例も採録されている。その一例は、指輪やイヤリングなどとともに豪華な錫の棺に葬られた国王参事官夫妻の墓をユクスクルという名の貴族が暴いたという、おぞましい事件である。

ユクスクル男爵。騎兵大尉。…棺を引き上げて、指で土をふるいにかけてながら指輪と黄金を探す。また錫を錫職人に売却したばかりか、金がもらえれば、二人が埋葬された土さえ売った。墓のなかで同僚たちにラインワインをふるまったあげく、その墓を売り払った。

後生の者たちは、事の結果を見ることにな るだろう……。  
結末はいかに（286頁）。

神の目は、勿論リンネ自身にも注がれている。

わたしが復讐を考えたときは、何もかもうまくいかなかった。しかし、心を改め、すべてを神のみ手にゆだねてからというもの、すべてがうまくいった。一七三四年（128頁）。

つまりリンネが、1734年、ウプサラ大学での就職を巡る紛争でローセンに破れたのは、リンネの復讐心に対する神罰だったのである。そしてオランダ留学から帰国後の1742年にウプサラ大学薬学教授の地位を獲得したことや、さらにその翌年このローセンと担当を交換して念願の植物学教授の地位につくことができたのも、「神のみ手」によるものだったのである。

『神罰』には、このように、リンネやその家族、使用人から大学の同僚たち、農民、さらに貴族から国王に至る、当時のスウェーデンのあらゆる階層の人々の犯した数々の罪と、それに対する神罰が記録されている。まだ神罰が下っていない場合については、「結末」が注視され続けている。それだけではなく、リンネの親友が死んだとき、遠くに離れたところにいたリンネの家に訪れてきたという、いわゆる「死者の訪問」についても語っている(112頁)。リンネの記録を編集したマルメストレムによると、「おそらく一七五〇年の数年前」<sup>(11)</sup>から死の床につくまで、195に及ぶこのような事例を、彼は次々と書き加え続けていたのである。

リンネは、スウェーデン南部の山村ステンプロフトで、ルター派の教区牧師の家に生まれた。グスタフソンはリンネが生まれた当時のスウェーデンについて、「リンネの時代、若きインテリたちは、ほとんどびくともしない迷信的な農民文化に片足を置き、他方の足を自然科学の領域に置いていた」<sup>(12)</sup>と述べている。実際、『神罰』では、この指摘にあるように神の復讐に関する同害報復の法、復讐の女神ネメシスによせる古代の信仰に、「死者の訪問」も含むスウェーデンの迷信や民間の神罰思想がないあわさされている。しかもそこで描かれている18世紀のスウェーデン世界は、まことに陰惨である。筆者は、『神罰』が示していること、それはリンネがこのような特殊スウェーデン的な宗教世界に生きていたということだと考える。

先にも引用したリンロートは、「ねたむ神」の支配するリンネの『神罰』の世界について「単純な迷信と子供じみた幻想の低次な混合物」とし、「それが全くの時代錯誤であることには、何の疑いもない」(53)と述べている。だが、ここで指摘されている「時代錯誤」については、上のグスタフソンの議論を結びつけるなら、リンネの個人的特殊性というよりは、むしろリンネもその一員として生きていた18世紀スウェーデンのキリスト教的世界観の特殊性と理解してよいであろう。そしてそれが「時代錯誤」であったのは、それとイギリスやフランスの思想的状況との間に、大きなずれが見られるからである。というのは、このように小は日々の生活から大は「終末」まで「奇跡」をもって人間世界に関与してくる神は、「千年王国」の実現という観念が大きな役割を果たした、ピューリタン革命までの西欧における神であったとも言えるからである<sup>(13)</sup>。そして名誉革命以後のイギリスでは、ジェイコブの言うように、ロックや「ニュートン主義者」たちによって「千年王国」的観念が追放され、さらにイギリスやフランスにおいて、神の自然や社会への直接関与＝奇跡を否定する理神論が多くの啓蒙主義者によって支持されるに至っていたからである<sup>(14)</sup>。

さてリンネの神がこのように18世紀スウェーデンに特有な宗教的背景に基づく「時代錯誤」的な「ねたむ神」でもあったとして、その神とリンネの『自然の体系』初版における人間の位置づけとは、どのような関係にあるだろうか。

リンネの人間論を考察したブローベリは、リンネを『自然の体系』の記述に駆り立てた問題の一つが「人間の歴史的墮落」という問題であったと指摘し、『自然の体系』は、「リンネの

自然に対する展望と文化に対する見解の両者を共に示すもの」であったと結論づけている。そして、リンネが自然界の統治者という伝統的な位置から人間を動物界に「降格」させたのは、この「文明批判者」としてのリンネが、「歴史的墮落」の極にある当時の人間に与えた位置だと論じている（193 以下）。ただし彼は、この「文明批判者」リンネと「人間の歴史的墮落」という観点がなぜ結びつくのか、説明していない。

筆者は、『神罰』に見られる 18 世紀スウェーデンの人間社会、そのキリスト教の特殊性、そして「ねたむ神」こそが、この「人間の歴史的墮落」というリンネの観点の源になったと考える。つまりリンネにあっては、人間を動物界の一員に位置づけることは、墮落した人間に対する、従来の位置づけからの「降格」として意識されていた。それは人間に対する革新的・積極的位置づけというよりは、「文明批判」と結びついた人間の「降格」に他ならなかった。そして彼の発想は、ロック的あるいは啓蒙主義的というよりは、イギリスやフランスから見れば「時代錯誤」的でもある一つの特殊なキリスト教的精神から生まれ出たものであったと考えられる。

このように発想、信条に即して見た場合、リンネの考え方は、伝統的なキリスト教的思考の枠組みと「きっぱり手を切ること」からはほど遠いと言わなければならない。むしろそれはかえって「時代錯誤」なほどの結びつきを示している。リンネと啓蒙主義の関係について、「リンネは啓蒙主義者ではなかった」とするフレンジスミュール<sup>(15)</sup>や、リンネの「時代錯誤」を指摘し、さらにリンネに「スコラの植物学の終焉」(37)を見るリンロートなどの議論は、いずれも、こうしたリンネの個人的信条と啓蒙主義とのズレを重視することに基づいている。

こうして、リンネは個人的特質から見れば啓蒙主義者ではなかった。しかし他方、その果たした役割から見れば、啓蒙主義者であったとすることができよう。リンネ以後、ヨーロッパでは人間を動物界の一員として扱うことはもはや動かない思考的枠組みとなったからである。この意味では、伝統的な聖書的枠組みとは「きっぱりと手を切った」ことになったからである。そしてこのようなことが起こったのは、リンネの特殊な個人的信条から来る人間の位置づけと、ロックらの啓蒙主義の出発点となった人間の位置づけとが、外形上は一致していたことが基礎にあったからだ、と、筆者は考えている。

## 第 2 章、『自然の体系』第 10 版（1958-59）における人間の位置

人間を「四足動物」という綱に属させ、さらにヒト形目にサルどころかナマケモノまでと一緒に所属させるリンネの分類は、当時の人びとを驚かし、また様々な批判を引き起こした。『自然の体系』第 10 版は、初版の 11 頁から 1384 頁へ、記載された動物の種も、初版の約 590 種から 4400 種へと大幅に増大した。それだけでなく、寄せられた批判をふまえ、またリンネ自身の研究の進展をふまえて、多くの新機軸が盛り込まれた。表 2 は、「霊長目」について、「ヒト属」の主要部分を中心に訳したものである。

第 10 版で登場した親機軸のうち最も大きな意義を持ったのは、属名と種小名の二語によって学名を表すという、リンネの発明になる「二語式命名法（二名式命名法）」が、動物界へも適用されたことである。リンネは植物界に対しては既に『植物の種』（1753）からこれを採用



してきたが、第 10 版で、その原則を動物界にも適用したのである。これまで統一的な命名法のなかったヨーロッパではこれは画期的な意味を持ち、リンネの不朽の功績の一つとなった。その結果これら両著は、それぞれ今日の植物学と動物学において学名命名法の出発点とされている。また、後に検討する人間の学名「ホモ・サピエンス」も、これにともなって登場した。

第 10 版に盛り込まれた新機軸について、全てを検討することはできない。以下ではリンネの人間論にかかわる三点を、すなわち、1. 「哺乳綱」、「霊長目」、「ホモ・サピエンス」に至る一連の新たな名称について、2. 「ホモ・サピエンス」の具体的内容、そして3. ホモ・サピエンスとならぶ「ヒト」の一種として新たに登場してきた「穴居人（ホモ・トログロデュッテス）」をめぐる問題を検討していきたい。

### 1. 「哺乳綱」・「霊長目」・「ホモ・サピエンス」

『自然の体系』初版でリンネが人間を四足綱の中に位置づけたことに対し、当然、聖書に基づく「被造物の支配者」とする観点からの批判が起こった。しかしそれとは別に、人間は生理学的にも解剖学的にも四足動物には入らないとするものから、サルは四足ではなく四手類とすべきものとか、あるいは「毛深い」という定義については人間だけでなくアルマジロやサイ、カバなどには毛がないなど様々な批判が行われた。また「ヒト形目」という名称についても、それは人間以外の動物に関する名称ではあり得ても、そこに人間を含めるのは間違いとする批判や、人間とサル、ナマケモノを十把一絡げにすることを暴挙だとする批判などがあった<sup>(1)</sup>。

こうした批判に対して、リンネは第 10 版で、いわば「名称変更」によって対応をはかった。そしてその結果、リンネが定めた新たな名称は、今日まで受け継がれるものとなった。

**哺乳綱 (Mammalia)** リンネは、鳥類以下の他の五種の「綱」については、初版同様にアリストテレス以来の名称を踏襲した。そのなかで、今回、初版での用語「四足綱」についてのみ、名称を変更した。新たな「哺乳綱」という名称はリンネによる造語で、ラテン語の「乳房」を指す *Mammae* (単数形は *Mamma*) から創り出された。改訂の理由をリンネが公的に記すことはなかったようだが、ウプサラ大学での講義では、人間を「四足綱」に含めたことに対する大きな抵抗がその主因だと示しているという<sup>(1)</sup>。ただし大切なことは、彼は綱の名称は変更しても、そこにおける人間の位置そのものは一切変更していないことである。つまりただ抵抗感をより少なくするためのものであったが、この変更は成功であった。「ママリアという用語は、たちまち世間に受け入れられた」<sup>(2)</sup> からである。

**霊長目 (Primates)** この名称も、「ヒト形目」への批判に対応したものであるといえる。それは、「ヒト形目」が明らかにサル、ナマケモノ、つまり人間以外の動物に重点がある命名であったのに対し、「霊長目」は、伝統的人間観に寄り添った命名となっているからである。従来も人間は自然界では最高位 (*primus*) の地位を与えられていたし、同根の諸語、*primas* (首座大司教) や *primatus* (教皇の首位権) すら連想させるような言葉だったからである。とはいえ、これも「ヒト」の位置までを変更するものではなかった。第 10 版では「霊長目」からナマケ

モノが「鈍重目」に移されたものの、新たに「キツネザル属」と「コウモリ属」が設定されている。コウモリがここで「霊長目」に入れられた理由は、「乳首が胸に二」という規定からであった。

もちろんこの新たな分類にも、反発が生じた。ペナントの言葉（1771年）は、当時の感情的反発を代表するものといえるだろう。「リンネが霊長類と呼んでいる最初の区分、または人間を被造物の筆頭にあげている部分を拒否する。というのは、私の虚栄心が、人類をエイブ、モンキー、マカク、コウモリと一緒にしてランク付けようと私を悩ませることなどしないからである」<sup>(3)</sup>。しかしリンネは自らの分類基準を固守し、こうした不満は無視したのである。

**ホモ・サピエンス（知恵あるヒト、*Homo sapiens*）** この名称は、今回「二語式命名法」を動物界にも適用するにあたって新たに「種小名」が必要となったことから、これもリンネが案出した名称である。この「ホモ・サピエンス」には、別に、「昼行性人（*Homo diurnus*）」という名称も与えられている。これは後に述べる「穴居人（ホモ・トログロデュッテス）」を「夜行性人」としたことに対応して与えられた名称である。当時のリンネの草稿では「ホモ・サピエンス」を消したり、「昼行性人」を消したり（同様に「ホモ・トログロデュッテス」を消したり「夜行性人」を消したり）しているという。このようにリンネはどちらを公式名称とするか、迷い続けていた<sup>(4)</sup>。しかし結果的にこの命名は、彼が博物学の任務とした「名称付与」にあたって発揮した絶妙な平衡感覚のよい例となっている。一方では「ホモ・サピエンス」は、初版以来の定義「汝自身を知れ」と響きあって、人間の特質を「理性」に求めるアリストテレス、プラトン以来の伝統や、スコラ哲学における「理性的動物（*animal rationale*）」という人間規定を思い起こさせ、この点では、人間を他の動物と本質的に異なった存在であると暗示しているかのようなのである。しかし他方、分類規則に従えば、「サピエンス」は種小名にすぎない。つまり単なる名称であって、本来上は、本質規定などとはなんの関係もない記号にすぎない。しかもリンネはこの場合、「*rationale*」という伝統的な言葉を意図的に排除しているのである。さらに、大学の講義（1753年）でモンキーに対して「*Simia sapiens*」という名称を与えたこともあったと伝えられるし<sup>(4)</sup>、上でも述べたように、「昼行性人」という命名との間で迷っていった。この意味では、リンネは「サピエンス」にはそれほど重要な意味を与えておらず、極論すれば、それは何らの意味を含まない、単なる記号にすぎなかったとも言えるのである。結局、彼はこの二つの意味のバランスを測りながら、名称の選択を行ったと考えられる。つまり、リンネは、ヒトを動物界の一員としたうえで「二語式命名法」にのっとり命名を行い、この点では彼の原則を曲げることなく、しかし他方ではこのようなヒトの位置づけに対する当時の抵抗感を考慮し、それを少しでも薄めるために、伝統的な観念にも通ずる名称を採用したのだと考えられる。それは、グールドがいうように、「極めてセンスにあふれた解決」であった<sup>(5)</sup>。

しかしさらにこの「解決」は、単なる戦術以上の意味を有していると、筆者には思われる。グールドはここで「リンネにとってホモ・サピエンスは特殊なものであって同時に特殊なものでなかった」<sup>(5)</sup>と分析しているが、このような両義的な位置づけこそは、初版で人間を伝統的な「中間の環」から動物界に「降格」させたリンネが、その動物界における人間に最終的に

与えた地位であったと思われるからである。

## 2. ホモ・サピエンスとその亜種

リンネは、ホモ・サピエンスのなかに六種類の亜種（変異）を記載している。ここにはアメリカ人、ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人とならんで、「野生人（*Homo sapiens ferus*）」と「奇形人（*Homo sapiens monstrosus*）」が、まったく同格の亜種として登場している。この二者は一体いかなる存在であろうか。

**野生人** 表-2を見ると、「アメリカ人」から「奇形人」までには記号（ $\alpha \sim \varepsilon$ ）が付されているが、「野生人」にはない。記載例も何れもヨーロッパ人の少年少女である。この点からは、「野生人」が亜種と位置づけられていたかどうか、疑えないではない。しかし他方、ヨーロッパ人に含まれるなら特別の名称を付して筆頭に置くこともないであろうから、やはり「亜種」とされているとしてよいと考えられる。だが、なぜリンネはこのような紛らわしい記載を行ったのであろうか。

これには、山中浩司氏も指摘しておられるように<sup>(6)</sup>、18世紀後半に至るまでの自然人をめぐる一連の議論が関係していた。実際、ルソーとビュフォンは、これらの野生人を「自然状態」の人間を示すものとして注目していた<sup>(7)</sup>。例えばルソーは、『人間不平等起源論』（1755）のなかで、ヘッセンの子供、リトアニアの子供、「ハノーバーの未開人の少年」<sup>(8)</sup>、さらにはピレネーの子供たちを挙げ、これらを口がきけない「四足の人間」<sup>(8)</sup>としている。ルソーが挙げた実例は、いずれもリンネが記載した「野生人」でも登場する。彼らはまた、四足ということだけでなく、「自然状態」における言語の問題とも絡んで関心を集めていた。ルソーの『人間不平等起源論』は『自然の体系』第10版の3年前に出版されており、ルソーの情報源はリンネではなく、プーフェンドルフ、ラ・メトリ、コンディヤックなどであったとされる。当時はロックのいわゆる「タブラ・ラサ（*tabula rasa*）」の問題とも絡んで知識や言語の生得性と後天性に関する論争が巻き起こっていた。そのなかで、これらの「野生人」がいずれも発見当時に口がきけなかったことが人々の大きな関心を集め、既にルソー以前から議論されてもいたのである。とりわけこうした渦中の1725年にハノーバーで発見された12、3歳の少年は、イギリスにつれてこられて「野生児ピーター」と呼ばれ、この問題に関する様々な実験の対象とされている。もっとも、彼は舌が変形していて喋ることができなかった。そのためこうした実験には不適だということが判明し、その後あるイギリスの農夫に預けられてリンネより長生きし、1785年に生涯を閉じている。

このような「自然人」への関心だけでは、しかし、これらの少年少女を「ヨーロッパ人」とも同格の亜種として記載する理由としては、不十分なように思われる。彼らは、いずれも明らかに、その土地に住むヨーロッパ人の子供たちだったからである。これについては、そこには「亜種」自体に関して、現代とは異なる考え方があったと考えられる。いま、その典型的な一例として、ドイツの啓蒙主義の歴史家シュレーツァーの人間論を見てみよう。彼は、『世界史』（1785）で、人間を規定して次のようにいう。「人間は生ずるものではなくて成るものであり、

人間の人間化の原因は彼の外部に存する。本性からいえば人間は無であり、諸関係を通じて、彼は全てのものに成ることができるのである」<sup>(9)</sup>。そしてこれに続けて、「荒野にあって羊の間で育てば、彼は羊となって草を食べ、メエメエと鳴くであろうし、その創造者の似姿になる、すなわちその理性を成長させる環境にあれば、それまで獣に近かった状態を脱し、上昇して高貴なものとなるか、あるいはもっと下降してもっと劣悪化するかのいずれかであろう」<sup>(9)</sup>と述べている。ここで彼が例示している羊の間で育った子供とは、リンネの挙げた「ヒベルニア（アイルランドの古名）のヒツジ少年」に他ならない。シュレーツァーによれば、ヨーロッパ人は、生まれながらにしてヨーロッパ人なのではない。「成るもの」としての人間のうち、環境の違いによって一方はヨーロッパ人に成り、他方はそれとは別の「ヒツジ少年」と成ったのである。彼はまた、「ネグロの膚の色も気候の後天的作用によるものである」(57)とも述べている。つまりもともとは同じ人間が環境によって異なった形質を獲得し、その結果、亜種が発生するのである。しかもこうして亜種が生ずるにあたっては、何世代にもわたる時間など不必要なのである。従って、それらの亜種はまた、他と同格の位置を有する亜種なのである。

シュレーツァーは、知識や言語の獲得に関する「後天説」の、一つの極点に位置すると言えるであろう。が、しかし彼だけが特殊というわけではないであろう。少なくとも、進化論や遺伝学成立以前の時代である18世紀には、現代とは違って、「亜種」についての考え方が極めて緩やかであったといえると思われる。後に述べるブルーメンバッハはリンネ分類学の修正者でありシュレーツァーに対する批判者であるが、その彼も、皮膚の色の相違の原因を気候に求め、しかも、「もしエチオピア人の子供が気候の寒い所に連れてこられたなら、彼らの黒さが見た目にも明らかに失われ、彼らの皮膚がどんどん茶色に変化することは確かである」(110)と述べている。リンネが「野生人」を一つの「亜種」として記載するにあたっては、「自然人」に関する議論だけではなく、それに加えてこうした「亜種」に関する当時の緩やかな考え方もまた、作用していたと考えられる。

**奇形人** リンネは、アメリカ人、アジア人、ヨーロッパ人、アフリカ人の次に第六の亜種、「奇形人」の範疇をたてている。奇形人の形成には土地（気候）と人為的作用（志向）が与っているとされ、その実例から見ると、アメリカ人からもアジア人、ヨーロッパ人、アフリカ人の何れからも形成されると考えられている。

リンネの用語“*monstrosus*”から最初に思い浮かぶのは、人身牛頭のミノタウロスをはじめとする、ギリシア人やローマ人の伝える様々なモンスターたちである。しかし、リンネは一方ではこうした伝説的なモンスターの存在を否定する合理主義者として現れ、この点では、「徹頭徹尾古い愚行と戦う啓蒙の人であった」<sup>(10)</sup>とも評価されている。実際、『自然の体系』の初版では分類表のなかに「疑問群（モンスター）」という欄を設け、一連のモンスターについて検討している。例えばハンブルクでウナギに似た身体と七つの首を持ち、翼のないヒドラとして展示されたモンスターは、実はイタチを加工した人工物であるとか、サチュルスと伝えられるものは一種のエイプである、ドラゴンはカナヘビの一種（*Lacerta alata*）またはエイを加工して作られた怪物、デス・ウオッチは実は木に掘った穴に住む虫（死番虫）であるなどとい

った議論を行っている。当時展示されて人々を集めていた怪物たちや伝説的な化け物的存在、正体不明で恐れられていた存在などを、そのもとになった動物を暴露しつつ人工の偽物としたり、またその正体を示すなどして、モンスターの存在を否定しているのである。

このように一方でモンスターの存在を否定した彼が、第 10 版では、同じく“モンスター”の語を含んだ名称で、一つの亜種を設定している。それはいかなる理由によるのであろうか。

「疑問群」での議論においてこれに関し重要と思われるのは、モンスターを否定する場合の彼の発想の原則を示している、二箇所の記事である。一つは、ヒドラについて「常にそれ自身真実である自然」(29)を理由に、七つの首を持つ動物はあり得ないとしている記事。他は、「自然はある属から他の綱への転換を決して認めない」(同)という理由から、カエルが転換して生まれるとされていた「カエル魚」を否定した場所である。つまり、その正体を暴露できたものは別として、彼は「自然・不自然」という判断を根本とし、具体的には種や属、綱で隔てられた動物同士を混合したモンスターについて、その存在を否定したといえるであろう。

これに対し「奇形人」は「ホモ・サピエンス」という一つの種に所属しており、その種のうち存在する諸亜種の一つとして位置づけられている。彼の原則からいえば、種や属などを越える特質を混在させたモンスターは直ちに否定できるとしても、種の内部においては、自然なものか不自然なものかという規準しかない。逆に言えば、同一種内の亜種については、「自然なもの」としての説明があった場合には、その存在が受け入れられることになるであろうということである。リンネが記載した諸例について言えることは、「奇形」の原因が場所(=気候)によるものと、人為によるものについて、リンネがその理由をこのような意味で、「自然的なもの」として納得したものということになる。

ここで扱われている「奇形人」の場合は、先の「野生人」の場合と違って、単発的に出現するものではない。遺伝的にも安定した形で出現してくる例として挙げられていると考えられる。この点では当時まだ遺伝学が成立しておらず、今日とは遺伝についての考え方が異なっていたことに、野生人の場合同様に、ここでは注意しておかなければならないであろう。古代では、後に紹介するようにヒポクラテスが、長頭人(Macrocephali)に関する記事で人為的変形が何代にもわたる時間の経過のなかでいわば第二の自然となり、生まれてくる子供の頭蓋骨の形が変わってくると説いていた。後に述べるブルーメンバッハも、このヒポクラテスやビュフォンも援用しながら、そしてリンネの挙げたアメリカ人の頭蓋冠の人為的圧迫その他の例も列挙しながら、子供の頭蓋骨に加えられる人為的な「暴力的で長期にわたる圧力」(239)を、頭蓋骨の人為的亜種形成の一因に挙げているのである。こうした人為的な奇形が遺伝するとリンネが考えていたかどうかは、はっきりしない。しかし、少なくとも、「奇形人」という一つの亜種のなかにも人為的変形を組み込むことを彼がためらわなかったことには、こうした当時の状況が関係していたと考えられる。

**アメリカ人、ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人** リンネのこれらの四亜種に対する具体的規定を見ると、まず最初に指標として挙げられているのが皮膚の色である。これは初版における四「人種」を皮膚の色のみで区別した視点が、ここでも保持されていることを意味しよう。

しかしここでは指標がさらに追加され、皮膚の色を中心に筋肉や髪、鼻などの容貌といった形質的特徴、四体液質による区分とそれに基づく気質の相違、服装や行動原理といった文化的特徴などが選ばれている。この四亜種はやがて 19 世紀における「人種」論の出発点にもなるといえるものだが、「人種」論の展開についてはここでは立ち入らなで、二点についてのみ検討したい。まず第一点は、リンネによって重視されている、皮膚の色による区別の意味についてである。具体的にはヨーロッパにおける伝統的な人間観とそこでの肌の色に関する考え方、次にその「大航海時代」における新たな展開を追いつつ、それらとリンネとの関係を検討したい。第二点は、これら四亜種と他の亜種との、さらにはヒト属第二の種である穴居人やサル属との関係である。

まず第一点について。肌の色によって人間を区別すること自体は、すでに古代から行われていた。最も古い実例として常にあげられてきたのは古代エジプト人の例で、第 19 王朝第 4 代のメルエンプタハ王（1213-1203BC.）の王墓の壁画である。この王はエジプト侵入をはかったリビア人とその同盟者の「海の民」を撃退し、また、イスラエルの民に関する最古の碑文を残したことで有名である。このように様々な民族がエジプト人と接触した時代を反映して、この王の墓には人物の皮膚が赤、黄、黒、白に色分けして描かれており、それぞれ赤がエジプト人、黄が東方のアジア人、黒が南方のアフリカ人、白がヨーロッパ系の人とされるのである<sup>(11)</sup>。とはいえ、この区別が直ちに「人種」という認識や何らかの差別に繋がっていたかどうかは、明らかではない。

古代ギリシア人に関してよく知られているのは、彼らが自らを「ヘレネス」と呼び、他を「バルバロイ」と呼んで区別したことである。この区別は、何らかの「人種」あるいは「種族」といった、自然発生的人間集団ないし血縁的集団への帰属意識に基づくものではなかった。それは、むしろ精神＝文化を共有しているという意識に基づいていた。このことは、個別的事例においても確認できると思われる。ここでは、このギリシア人の人間観について、ヒポクラテスとアリストテレスの場合を見ておこう。ヒポクラテスは本稿のなかでしばしば登場するからであり、またアリストテレスについては、「アリストテレスの異人種観は、古代ヨーロッパの一般的傾向である」<sup>(12)</sup>といわれているからである。それだけでなく、中世を通じリンネの時代に至るまで、なおその影響力が持続していたからである。

最初の医学者とも言われるコス島のヒポクラテスは、前 5 世紀、ソクラテスと同時代の人とされている。彼の名で伝えられる著作のなかに「人間の自然性について」<sup>(13)</sup>という論文があり、そこでは、「人間の身体はその中に血液、粘液、黄および黒の胆汁をもっている。これらが人間の身体の自然性であり、これらによって病気を苦しみもし健康を得もする」(102)と述べられている。いわゆる四体液説であるが、これがヒポクラテスないしその流派の基本的な考え方であった。この場合、人間が何であるかについては「つねに同一である」(103)とっており、外形的形質や場所に関係なく、人間であればすべて四種の体液を持ち、また四体液のあり方によって、健康であったり病気になったりするるのである。従って彼においては、まず自然的存在としての人間は、アジア人やヨーロッパ人の別なく、同一の存在と考えられていた。それではアジア人、ヨーロッパ人といった違いは何から生ずるのであろうか。この問題について

は、「空気・水・場所について」のなかで、風土とそこに住む人々の気質との関係に注目した議論が行われている。ヨーロッパに比べ、「アジアではあらゆるものははるかに美しく大きく生育し、土地もより温和で、人間の気質もより柔和でおだやかなのである」(23) といひ、その原因を、「気候が温和なこと」(23) に求めている。そして、「アジア人のほうがヨーロッパ人よりも戦闘的でなくて気質が温和であることの主要原因は、その諸季節が暑熱、寒冷のどちらも激しい変化を示さず、平均していることである」(27) としている。

しかし気候、あるいは自然がすべて人々の気質を決定してしまうのではない。「制度によって気質が変化する」(27) とも言っている。すなわち「アジアは、その大部分が王の統治下にある。人間が自分自身を統治せず、独立でなくて専制君主の下にあるところでは、人々は武勇を練ることよりも、かえって戦闘力をもたないように装おうとつとめる」(27)。これに対し「アジアにいるギリシア人にせよ異邦人にせよ、専制君主の下になくて独立し、自分たちの利益のために苦勞する人々は、あらゆる人々のうちでもっとも尚武である。彼らは自分たち自身のために危険をおかすのであり、その武勇に対する褒美も自分たちが得、その卑怯な振る舞いの罰も自分たちが受けるからである」(27)。このように、アジア人でも専制君主下にいない人々は、ヨーロッパ人同様の気概を持っているのである。アジア人とヨーロッパ人の区別は決して単純な自然決定論ではなく、相違の原因は、文化的相違も含んだ意味での環境の相違に求められているといえよう。

この論文では、例えば山岳地方の住民は、その厳しい気候に対応するため身長も高く頑丈になるなどと言ひ、身体的諸形質に対しても自然環境が大きな影響力を持っていることを指摘している。しかし他方、人為が身体的形質を定めた例も挙げている。この論文ではヨーロッパとアジアを分かちのは黒海北部のマイオティス湖であるが、そのマイオティス湖の近くに住む「長頭族」がそれである。彼らは子供が生まれるとすぐ包帯などで頭を巻いて長頭にする習慣を持っていた。彼らの長頭は「最初習慣がこのように作用し、その結果として強制的にそのような本性になった。時が経つにつれて生まれつきそのようになり、習慣による強制はなくなったのである」(25) と述べている。

最後に、皮膚の色についてはどのように考えられているだろうか。これについては、現存するこの作品からはリビア人とエチオピア人に関する論考部分が欠落しており、そこでは考察されていたかもしれない肌の黒さについての議論は、見ることができない。ただ、一個所、黒海に注ぐパーシス川付近の住民について、その肌が黄色であるということが指摘されている。そして、それは、そこが「沼沢地であって熱く、湿気が多く、植物が繁茂」(26) していることが原因だとしている。皮膚の色は自然環境によって決まると考えていたということになる。このように皮膚の色の相違は当然知っていたが、しかし、それによって「人種」を区別すると言った意識まではなかったと考えられる。

アリストテレスのヒトに関する議論では、まず、人間の肌の色に関する特別な議論は行われていない。かろうじて『動物発生論』<sup>(14)</sup> に動物の色を論じた場所があるが、そこでの記述に、彼が人間の肌の色を議論しない理由が求められるであろう。彼は、動物の本性として備わっている色を決めるのは一般的には皮膚であり、それが毛の色も支配して、白、黒、まだら模様

などの色を呈するとするのだが、ヒトだけは異なっていると言う。「色の原因は他の動物では皮膚である。…しかし人類では、皮膚が原因ではない。白い皮膚の人々にも真っ黒な毛が生えているからである。この理由は、ヒトが体の大きさのわりにあらゆる動物の中で最も薄い皮膚を持っているからで、それゆえ、毛の変化を支配することができず、かえって皮膚は弱さのためにそれ自身が色を変え、日や風に当たると黒くなるが、毛はそれとともに変化することはないのである」(303)。つまり、ヒトのみは色の変化する肌を持ち、したがって他の動物のようにその動物の色を決定するような固定した肌の色は有していない。そして人間のみは、肌の色を決めるのは、「日や風」という自然環境なのである。このような考え方では、皮膚の色に関する特別な議論を行ったり、まして、その色によってヒトを分類するといった発想は生まれないであろう。アリストテレスは、『動物部分論』<sup>(15)</sup>で、こうして動物としてのヒトについては、肌の色にかかわらず、次のような一般的特徴付けを与えることになる。「頸と頭の次は、ヒト以外の動物では、前肢と胴である。ところが、ヒトでは前脚および前足の代わりに腕およびいわゆる『手』になっている。これは、動物中でヒトだけが、その本性と本質の神的なるゆえに、直立しているからである」(388)。他の場所でも、「自然的な部分がそのまま自然的な位置をとっているのは人類だけであって、ヒトの上半身は宇宙の上部を向いているのである。すなわち、動物の中でヒトだけが直立しているのである」(309)と述べている。

アリストテレスにおいては、この結果、人間の区別は、動物という次元ではなく、文化的・社会的レベルで行われることになる。『政治学』における人間規定がそれである<sup>(16)</sup>。「人間は自然に<sup>ポリス</sup>国的動物であり、また偶然によってではなく、自然によって国をなさぬものは、劣悪な人間であるか、あるいは人間より優れた者であるかのいずれかである」(7)。さらに、国をなす人間にも区別が行われる。ギリシア人と異なる王政が行われているアジアについて、「アジア人はヨーロッパ人に比べその性格が本性上一層奴隷的であるために、主人的支配を少しも不満に思わないで堪え忍んでいる」(131)としているからである。アリストテレスの「先天的奴隷論」は、このような政治形態と結びついた、文化的区別を前提にしていると考えられる。またギリシア人の奴隷差別は彼らの生活を支えていたものであって、肌の色ではなく、この社会的差別が現実には最も大きな意味を有していたことは、いうまでもない。

また各地の人々の気質の相違については、同じ『政治学』で、彼は次のように述べている。「寒い地方にいる民族、特にヨーロッパの民族は気概に富んでいるが、思慮と技術とにやや欠けるところがある、それゆえ比較的に自由を保ちつづけているが、国的組織をもたず、隣人たちを支配することができない。しかるにアジアの民族はその靈魂が思慮的でまた技術的であるが、気概がない、それゆえ絶えず支配され、隷属している。しかしギリシア人の民族はその住む場所が中間を占めているように、その両方に与っている、というのは実際気概があり思慮があるからである。それゆえ自由を保ちつづけて、非常に優れた国的組織を持ち続けている。そうしてこの種族はもし一つの国制を定め〔て統一を成し遂げ〕たなら、他のすべての民族を支配することができるだろう」(291)。ヒポクラテス同様に、自然がすべてを決定するのではなく、文化的相違を含んだ意味での環境によって、相違を説明する考え方といえるであろう。

ローマ人にとっても、この現実生活における差別、つまりローマ市民、属州民、奴隷という



社会的差別が最も重要な役割を演じていた。またギリシア人同様、この社会的差別は「種族」あるいは「人種」という枠によって規定されているものではなかったし、さらにローマ人は、属州の異種族に対しても広くローマ市民権を付与した。奴隷も解放された時点では「不完全市民権」しか与えなかったが、その孫からは「完全市民権」を与えた。このように古代ギリシア人・ローマ人の場合、肌の色の違いはもちろん意識されていたにしても、より重視されたのは、文化的・社会的区別のほうであった。

なお最後に、古代では「人種」などという概念を越えたところでもう一つの人間的存在が信じられており、肌の色による区別など問題にならない、はるかに重い位置が与えられていた。「<sup>モンスター</sup>怪物的人間」である。そして、こうした怪物的人間の発生に関する説明もまた、アリストテレス『動物発生論』に見られる。彼によれば、一般的に胎生動物では雄＝精子が形相因、始動因、目的因を統合しており、これが雌＝質料因と結合することによって「発生」が完遂される。人間は、したがって、男親から与えられた「運動」が女親からの質料を支配しながら次第に「分解」＝分化を遂げて「ヒト」としての形態を実現し、生まれてくる。この際、質料への支配が十分に行き渡っていると男が生まれ、「熱」の不足によって支配が不十分であると女になり、さらにその支配力が低下すると、様々な障害を持つ人間に生まれるという。それでは何故「怪物」が生まれるのか。それは、「〔男親からの〕運動が分解して〔女親からの〕質料が支配されないと、最も一般的なものが残るからであって、これがすなわち動物なのである」(259)。つまり、「質料が支配されない」事態にまで立ち至ると「ヒト」という種の枠内での発生を逸脱して「動物」というレベルで発生過程が進むことになり、この結果、他の種の形質が混入してくるということが起こる。この結果、ヒトの子がウシの頭を持っていたり、ヒツジがヒトの頭を持って生まれたり等の事態が発生するというのである。半獣半人のミノタウロスやサチュルスの誕生である。

ギリシア人たちは、古来、驚異の国インドやエチオピアをはじめとする地域に様々な怪物がいると伝えていた。紀元1世紀に生きたプリニウスは、『博物誌』<sup>(17)</sup>で、一本足のスキアポデス、無頭で胸に目や口があるブレミアエ、あるいは穴居人<sup>トログロデュッテス</sup>その他の怪物たちを網羅的に記述したのち、次のように述べている。「これらの、そしてまたこれに類似の人類のさまざまは、自然がその妙工により、自分自身の慰みに、またわれわれをびっくりさせるためにつくったものだ。自然が毎日、否毎時毎時に行っている多種多様の業を誰が詳細に語り得ようか。自然の力が発現して、人類の全民族を自然の驚異の中に包んだのだということで満足しよう」(I-302)。アリストテレスによって哲学的説明を与えられた怪物たちは、こうしてローマ時代に至ると、彼らの「世界」の現実の構成員となり、自然的秩序の一員として記述されているのである。

中世のヨーロッパ人の思考を支配していた聖書には、現在的人类はすべてアダムの子孫であり、具体的にはノアの息子たち、セム・ハム・ヤペテいずれかの子孫であると説明されている。そして中世を通じてセムはアジア人、ハムはアフリカ人、ヤペテはヨーロッパ人の祖と信じられてきた。この区別は、しかし、人類がアダム、あるいは第二の祖としてのノアの子孫であるという説明のほうに重点が存するのであって、「人種」的区別に重点があるとまでは言えないであろう。なぜなら、キリスト教は本来人種的な差別を超越した普遍的宗教として自らを位置

づけてきたからであり、一人の共通の祖先の子孫ということには、人種や種族を越えたその同胞愛の根拠としての意味があったからである。このことについては、既にアウグスティヌスが『神の国』で、明確に論じていた<sup>(18)</sup>。「どこの場所であれ、人間として、すなわち理性的で死すべき生き物として生まれた者はだれでも、その者が身体の形態や肌の色、動きや声、何らかの力や部分や属性の性質においてわたしたちの感覚に異常なものとしてあらわれるとしても、あの一人の最初の人間に起源をもつものであるということを信仰ある人は疑ってはならない」(148)。したがって中世においては、人間の区別で重要な基準となっていたのはこのような人種、種族ではなくて、宗教であった。キリスト教徒と異教徒 — その最大の異教徒がイスラム教徒 — という区分がそれである。

人間の肌の色に関する意識はどうだったろうか。宗教絵画の主題となった「マギの旅」、「マギの礼拝」などにあらわれる「三博士」の一人は、伝統的に黒い皮膚を持つ人として描かれた。ここには皮膚の色の違いへの意識が示されているといえよう。しかし三名は同時に青年、中年、老年として表現されるのが常であった。そして画像全体は、キリストが全ての異教徒に対しても顕現したことを示すものだったのである。また、最後に、このような中世のキリスト教徒—異教徒からなる人間世界には、古代同様、「怪物的人間」もまた配置されていたことを忘れてはならないであろう。アウグスティヌスは、「もしそれらの種族が、理性的で死すべき動物という(人間についての)定義によって包含されるのなら、それらはすべての者の最初の父祖であるあの同一の人間に起源を得ているのだと認めなければならない。…人間であるとすれば、かれらはアダムから出たのである」(150以下)と述べていた。こうして古代人の信じた怪物たちは、アウグスティヌスを通じて中世にまで伝えられたのであった。

以上簡単に見たように、古代以来皮膚の色で人間を区分する意識が存在したことは確かとしても、その区別は常にせいぜいで二義的なものであった。それによって地上の人間全てを区分する基準とはなり得なかった。人間の区別においては、文化的・社会的区別または宗教的相違のほうが主要な役割を果たしていた。さらに常にそこでは、人間たちの世界の周囲には化け物人間たちが寄り添っていたのである。

ヨーロッパでは、このような古代以来の観念が「大航海時代」に新たな展開を見せる。その一つの側面は、伝統的な「化け物世界誌」が次第に否定されていくことである。ただし、ヨーロッパで最終的に化け物人間＝怪物的人間をその図鑑から追放したのは、ビュフォンだと言われる<sup>(19)</sup>。リンネはビュフォンと同年生まれであるが、「奇形人」の項でも見たように、ビュフォンほどには明瞭に化け物世界誌とは絶縁していない。だが、この点については、後にもう一度考察することにしよう。ここでは、大航海時代における新たな展開の第二の側面として、地球大の世界のなかでの「人種」の区別という新たなヨーロッパ人的観念の発生、及びそれとリンネとの関係について見ておきたい。

大航海時代のヨーロッパ人は、地球規模の拡がりのなかで、ヨーロッパ人とは異なる様々な人々や異文化と出会った。この結果生まれてきたのが、人間世界の新たな区分の試みであった。そうした最初の例が、17世紀のフランス人医師のフランソワ・ベルニエ(1620-1688)であるとされる<sup>(20)</sup>。彼は、「住民の種ないし人種の相違による、地球の新しい分割」(1684)で、イ

ンドをはじめとする自らの旅行経験に基づいて新たな世界像を提出した。これまでの国や地域による世界の区分にかえて、表題通りに住民の「種ないし人種 (espèces ou races)」によって地球を区分することを提案したのである。彼の「種ないし人種」の設定では顔立ちや体型なども指標となっているが、皮膚の色も大きな位置を占めていた。そして第一にヨーロッパ人、次いでアフリカ人、アジア人、第四にラップ人を設定したのである（第五にアメリカのインディオについて検討したが、結局、独立させるほどヨーロッパ人との相違はないとした）。論文はフランスの雑誌に匿名で発表されたごく短いものであるが、しかしともかくも、地球全体を視野に収めたうえで初めて「人種 (race)」を記述した点で、それはヨーロッパ人の人類学的議論の新しい第一歩を画すものであった。ヨーロッパではこれ以後、ライプニッツやビュフォンをはじめとして<sup>(21)</sup>、「人種」による人間世界の新たな区分が試みられ始める。

リンネがベルニエに直接ふれる機会があったかどうかは不明である。しかし彼の四種類の亜種への区分は、この、ベルニエに始まる新たな段階に属する区分であることは明らかである。リンネにおいて肌の色が伝統と異なってその区分で大きな位置を与えられていることが、彼がこうした流れのうえで分類に取り組んだことをよく示しているからである。しかしそれだけでなく、リンネの区分はベルニエの認識をおおきく進め、より明確化したものともなっている。それは、この四亜種があくまで「ホモ・サピエンス」という種内の「亜種」だとする位置づけが明示されているからである。リンネは、『自然の体系』初版では、既に見たようにこれらはいずれもヒト属のなかの「種」として設定していた。リンネは、初版以後ここまで、種を神の創造以来変化することなく今日に至っているものと考えてきた。四亜種を「亜種」ではなく「種」とするならば、それぞれ創造時から異なっていたとすることになる。これは、ボルテール同様の人間の「人類多元説」の立場ということになる。今回の第10版で「亜種」としたことは、多元説の否定と、「人類一元説」の立場を明確にしたことを意味する。そしてこれによって彼は、ビュフォンとともに、今日の一属一種である「ホモ・サピエンス」という位置づけの出発点となったのであった。

しかし、どの時代に生きた人間も、常にヤヌスの顔を持っている。上で述べた今日の時代に向けた顔だけでなく、リンネには過去に向けた顔も存在した。リンネの四亜種への区分は、古代以来の、ヨーロッパの伝統に根ざすものでもあった。彼の四亜種は、地球大の規模に配置し直した点では新しいにしても、胆汁質、多血質、黒胆汁説、粘液質によって人間の気質や体質が決定されるとする、ヒポクラテス以来の四体液説に基づいている。しかもこの四という数字は、前近代的用法では四元素（火、空気、水、土）やそれと関連した四隅（東西南北）とも関連しあい、物質や人間、全体としての世界を基本的に規定する数であった。リンネは実際四元素説を信じていたし、当然こうした意味を持つ「四」という数字を意識しつつ、四亜種を当時知られていた四つの大陸に配置したのである<sup>(22)</sup>。上でも見たように、リンネはモンスターを否定したものの、この語を使用した「奇形人」を記載した。また何よりも、人類を「ホモ・サピエンス」一種とした背景には、人類の祖がアダムであるという、聖書の記述があった。このような諸要素から見れば、リンネの発想の源は、決して新しいものではなかったともいえる。むしろ伝統的な観念を基礎に、それを新たに出現した地球大の世界に拡大して適用したという

側面も有するのである。そしてこのような表情を持つ二つの顔を有することが、18世紀におけるヤヌスとしてのリンネの特徴といえるであろう。

さて、ホモ・サピエンス種内のこの四亜種はアメリカ人、ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人の順に並べられ、その前後には二つの亜種である野生人と奇形人が置かれ、そして、全体としてヒト属第二の種である穴居人へと続いていく。この位置関係は、何を意味しているのだろうか。

まず気づくのは、四亜種の中では、ヨーロッパ人とアフリカ人の記述が際だって対照的なことである。ヨーロッパ人については、すべて肯定的な特徴づけが行われている。「典礼によって支配される」という言葉は一見否定的内容を含むかにも見えるが、他の三亜種の行動原理とは違ってヨーロッパ人にのみ宗教が挙げられている点に注意すれば、これは逆に、ホモ・サピエンスのなかで、神や神的存在につながるものとして、最も高い地位を与える記述だと考えてよいであろう。逆に、最も動物に近い特徴づけを与えられているのが、アフリカ人である。鼻の特徴の「低い (simus)」は、サル (simia) の低い鼻を連想させる。アフリカ人女性一般が、「エプロン」<sup>(23)</sup>を持っているとされている。当時「ホッテントのエプロン」が大きな話題となり、彼らが動物に近い存在である特徴として博物学者たちの注目を集めていた。リンネはこれをアフリカ人女性一般の特徴に拡大しているのである。「乳房からは豊富な乳がでる」ということも、アフリカ人の動物的特徴を強調している。さらに行動の原理として「移り気 (arbitrium、気まま)」があげられていることもまた、かれらが理性によってではなく、動物のように、その時々感性が命ずるところによって行動することを示している。こうして、アフリカ人は神と結びついているヨーロッパ人からは最も遠い、動物に近い存在として位置づけられているのである。それだけではない。穴居人につけた註、「トログロデュッテスとヒト属との関係」においては、「サル属にはないホッテントのエプロンがこれにあることも、これをサル属に引き戻すことを許さない」とあり、穴居人 (トログロデュッテス) にも同様の「エプロン」が存在するとされている。そしてそのことが、穴居人のヒト属への所属の根拠とされているのである。つまり、アフリカ人は四亜種のなかでは最も動物に近いと同時に、ヒト属のもう一つの種である穴居人とは「エプロン」の存在という結節点をもって連鎖していることになる。

このように、四亜種は同等の位置を与えられているわけではない。そこであらためてホモ・サピエンスを構成する六亜種全体を見渡してみると、最後の奇形人を除く五種の亜種は、ヨーロッパ人を中央に一本の連鎖のように配置されていることがわかる。というのは、六つの亜種の先頭に置かれた野生人については、すでにみたように、自然人に関する当時の議論との関係を指摘することができた。従って、この自然人である野生人とヨーロッパ人の間に置かれ、「慣習によって支配」されているアメリカ人は、最も自然人に近い亜種としておかれていることになる。既にモンテーニュが彼らを「子供」と表現していたように<sup>(24)</sup>、当時、大人＝文明人であるヨーロッパ人に対しアメリカ人を子供＝自然人とする議論が行われていたことも想起される。アジア人については「意見によって支配される」とある。他人の「意見」によるものであれ、「意見」そのものは理性の働きによって形成されるものであるから、彼らは一応「文明

人」の位置づけを与えられていることにはなろう。しかし、その位置は、ヨーロッパ人よりは明らかに低い。彼らは、ヨーロッパ人よりも墮落の度を深めた文明人ということになる。そして人類中最も動物的な存在として位置づけられているのがアフリカ人である（奇形人が最後に置かれているのはこれが四つの亜種すべてから派生したものであり、いわば側鎖として、この連鎖の脇につながっていると思われる）。ただし、最後に、これらの六亜種全体はあくまでホモ・サピエンスという一つの種であり、この意味では一つの単位＝環である。そしてホモ・サピエンスは、「エプロン」をもつアフリカ人によって、ヒト属の第二の種である穴居人という環に連結していくことになる。

あとで見るように、リンネのホモ・サピエンスからは、野生人と奇形人が病理学的事例として分類対象から排除されていく。この結果から見ると、この四亜種は、今日の「ホモ・サピエンス」の出発点となったという意味を有している。しかし、それだけではない。他方では、リンネに即してみると、ホモ・サピエンスを構成する諸亜種のなかでヨーロッパ人に際だった地位が与えられていた。彼らは、墮落したとはいえ、なおアダムの真正な後継者であり、神的存在に最も近く、そして最も高度な文明を有するものとされている。この位置づけ自体は、18世紀ヨーロッパにおける一般的思潮の反映ともいえる。だがここでは、人間世界におけるヨーロッパ人の優位が、分類学という学問的形態をとって主張されているのである。彼に見られる四亜種に関する差別的記述は、19世紀においてヨーロッパで展開された「科学的人種論」の出発点となる内容をも有していたのである。

### 3. 穴居人（ホモ・トログロデュッテス）

リンネがヒト属の第二の種として挙げた驚異的存在、「穴居人（*Homo troglodytes*）」は、一体どのような理由から設定されたのであろうか。リンネは、「ヒト属」のなかに亜種として「野生人」や「奇形人」を置いていた。何故そこに編入しないで、新種の設定に向かったのであろうか。この問題に対して、ここまで多くを依拠してきたブローベリは次のように答えている。「多くの答えがあり得ようが、一つは異常な事物の持つ永遠の魅力、さらに、これらの生き物が存在の連鎖という彼の観念に適合していること、最後に、彼の科学が彼をどこに連れて行こうと、その科学の原理に従うことを強制されていると彼が感じていたということである」（190）。このブローベリが挙げた三点の解答は、間違っているとは考えないが、しかし十分な説明になっているとも思われない。第一点については、否定はしないが一般的に過ぎる。当時は確かに大航海時代と結びついた情報の氾濫のなかで「新奇なもの」へのヨーロッパ人の興味が増大し、多くの見せ物興行や様々な個人コレクションが人気を呼び、さらに博物館の建設へと進みつつあった時代である。リンネもまたこうした時代のなかにあったことは確かであるが、リンネ個人の「異常なものへの好奇心」が穴居人という特殊な存在を「種」として設定していくという場合の、具体的な思考過程の説明にはならないと思われる。第二点はリンネに特殊というよりは彼を含む当時の時代的特質でもあると考えられ、もし時代的特質との関係でリンネを考察するのなら、検討すべき事柄でこれ以外にも重要な問題がこの答えには欠落していると思われる。最後に第三点は、リンネ個人の立脚点として重要な指摘である。リンネは既に『自

然の体系』初版において、「階層分類」という思想に基づき、自然の三界全体の体系的分類に着手していた。そして二語式命名法を動物界にも適用した第 10 版で、「体系家」としてのリンネが、穴居人の設定をしたのである。まさにブローベリのいうように、自ら確立した「科学の原理」がこの間の研究の結果彼に「強制」したものに違いないと、筆者も考える。

ただ、問題は、リンネのこのような個人的立脚点やそれにもとづく覚悟が、なぜ「穴居人」という具体的な種に結実するのかという点である。この点を解明するためには、あらためてブローベリの挙げた第二点とリンネとの関わりを詳しく掘り下げる必要があると考える。そこで以下では、リンネとの関係において、当時の類人猿 (ape) をめぐる情報の状況、その情報の受け手の側が有していた 18 世紀ヨーロッパに特有な問題意識や思考の枠組み、具体的には「プレアダム人」との関係、「自然人」との関係、「表」的思考空間と「存在の連鎖」の観念、以上四つの側面から考察していくこととしたい。

**類人猿 (ape) をめぐる情報** ラヴジョイは、18 世紀における博物学では、当時未発見の「欠けている環」の探求が「存在の梯子の両端において特別熱心に行われた」(247) と指摘している。すなわち「その底に近い部分と、人間と高級な猿との間の部分」(同) における環がそれである。「その底に近い部分」に関しては、1739 年のトラムブレーの再発見した淡水ポリプの「ヒドラ」が、植物と動物を結ぶものとして大きな議論を呼んだ。リンネが取り組んだのは、そのもう一方の課題、「人間と高級な猿との間の部分」の解明という、まさに当時最もホットな課題のほうであった。「穴居人 (ホモ・トログロデュッテス)」は、そうした課題に対する、リンネの一つの解答であった。

だが、「ホモ・サピエンス」と並ぶヒト属の第二の種「穴居人 (ホモ・トログロデュッテス)」を設定するにあたり、リンネが手にすることのできた情報は極めて錯綜した状況にあった。それを、リンネ自身が『自然の体系』第 10 版で挙げた根拠に従って検討しておこう。

リンネが情報源の一人として挙げているのはプリニウスである。しかし彼の情報は古代ギリシア人以来伝えられてきたものでもあった。例えばヘロドトスは、アフリカ内陸部に住むガラマンテス族の記述で、「ガラマンテス族は四頭立馬車で穴居エチオピア人狩りをする。この穴居エチオピア人というのは、われわれが話しにきくかぎりのあらゆる人間の中で、最も足の速い人種だからである。この穴居人は蛇、とかげ、その他の爬虫類を常食としている。その用いる言語は他のいかなる言語にも似ず、さながら蝙蝠のような声を出す」<sup>(25)</sup> と述べている。前四世紀のギリシア人歴史家クテシアスも、プリニウスが引用しているように、インドでは、一本足のモノコリ (スキアポデス) から遠くない所に穴居人が住んでいるとしていた。プリニウスはこうしたギリシア人をはじめとする古代人の伝承を集め、「穴居人」について記述したのである。まず居住地について、プリニウスはドナウ川北部 (I-194 頁)、クテシアスに依ってインド (I-300) にも穴居人がいるとしている。しかしその記述の中心はアフリカである。アフリカでは、「メロエを過ぎると全地域は穴居族と紅海によって限られている」(I-286) とあり、エチオピアの南の内陸部、紅海沿岸からサハラ砂漠の南の広範な地域に居住しているとされている。習俗については、「穴居人は洞窟を掘って住居としている。彼らはヘビの肉を食べ

て生きており、声をもたずただキイキイという音を発するだけで (stridorque)、言語による交渉というものは一切ない」(I-217)<sup>(26)</sup>という。皮膚の色や身長などの身体的な特徴については、記述されていない。馬よりも速く走り (I-301)、象狩りでは臀部に飛び乗り、尻尾を左手で掴み、右手に持った斧で後ろ足の腱を切断して倒すなど、極めて敏捷で優れた狩猟者であるとも書かれている (I-349)。さらに、彼らは交易にも従事している。エチオピアを通じて彼らから紅玉がもたらされるし (I-215)、彼らは隣人たちから集めたシナモンを櫂も帆もなんの仕掛けもない船に積んで冬の海を運び、通商していると述べられている (II-553)。

こうした穴居人は、「化け物世界誌」の一環として、中世にも伝えられた。1300年頃に描かれた世界図、『ヘレフォード図』には獣の背に乗った人間の姿が描かれ、「穴居人ははなはだ劣等で、穴居し、蛇を食し、野獣の背に飛び乗って、これを捕らえる」と説明されている。リンネの「ホモ・トログロデュッテス」は、片足をこうした古代・中世以来の伝承に置いて記述されていることになる。

リンネがもう一方の足を置いているのは、「大航海時代」以後の新情報である。旅行者たちのもたらした情報、彼らがもたらした標本や解剖などに基づいて発信された、新しいサル一般 (ape および monkey) についての情報がそれである。ただし、それは極めて混沌とした状態にあった。

まず、ヨーロッパにはサルのたぐいは棲息していないし、ましてや類人猿については、当時一切知られていなかった。そうしたなかでヨーロッパからアジアやアフリカに出かけていった旅行者たちは、多分に自らの想像も交えながら様々な報告を行った。彼らが報告した名称も、ギリシア神話や古代の伝承に基づいて彼らが名付けたものから現地人の呼称などを交えて、魑魅魍魎の世界に似た様相を呈していた。その状況は、先にも見た、「霊長類学の父」タイソンの例でも明らかである。彼は実際は今日のチンパンジーを解剖したのだが、その結果を公表した著書は、『オランウータンあるいはホモ・シルウェストリス — サル、類人猿、人間と比較せるピグミーの体構造』(ロンドン、1699年)というものであった。ただしリンネは、このタイソンは利用していない。リンネが穴居人に関して『自然の体系』第10版で利用したことを明記しているのは、以下の三名の記述である。まずリンネがタイプ標本としての地位を与えた記述を残している、ヤコブ・ボントである。彼はオランダの医師でジャカルタで働いたことがあり、『東インドの自然と医学の歴史』(1658)を著し、そのなかで「私は数匹の雌雄両方のサチュルスを見たことがあるが、その雌を図示しておいた。…現地人が彼らに与えた名称はオランウータンであるが、これは森のヒトという意味である」<sup>(27)</sup>と述べている (図-1)。しかしボントが示したイラストは、オランウータンとは全然似ていない。ビュフォンが毛深い女性にすぎないと喝破したものだが、現代のオランウータン研究家レーラー＝エルトルは、それは類人猿のオランウータンではなくて実際に「森に住むヒト」で多毛症の女性であったとし、その多毛性の故に、ボントがサチュルスを連想したのだと主張している<sup>(28)</sup>。あとの二名は、「カクルラッコ」の呼称で情報を伝えたスエーデンの旅行家のヒューピングおよびスエーデンの著述家のダーリンである。穴居人に関するリンネの説明文は、プリニウスとこれら三名の記述を取り混ぜて行われているのである<sup>(29)</sup>。

さらに今後問題となるサル属のうちの一つ、リンネの「サチュルス (*Simia satyrus*)」についても見ておこう。リンネはサル属を三つの亜属に区分したうえで、シミア属—シミア亜属の最初に、サチュルスを位置づけている。この第 10 版でリンネがタイプ標本の地位を与えたのは、アムステルダムのある解剖学者・医師、トゥルプの記述である。トゥルプはアンゴラからもたらされオランダ侯が所有していた、今日からすればチンパンジーの標本を解剖した。その結果、「これに類似するものとしては、古代人のサチュルス、つまりプリニウスが記述したサチュルスをおいて他に存在しない」<sup>(80)</sup>として、「インド・サチュルス (*Satyrus indicus*)」と命名した。しかし他方で、アンゴラが原産地だがマレーのオランウータンとも同一のものだとして、そのイラストでは、「森のヒト、オランウータン」と呼んでいる (図-2)。

このようにリンネの穴居人は、自ら手にした現実の標本によるものというよりはプリニウスその他の人々の記述によって、それも今日から見れば極めて混沌とした情報のなかで設定されたのであった。チンパンジーとオランウータンと古代ギリシア以来の伝説が、場合によってはそれに空想までが解きがたく絡み合った間接的情報のなかから、リンネは一方ではサルに属する「サチュルス」、他方ではヒト属の「穴居人」という種を設定し、記載したのである。

さらにここでつけ加えておかねばならないことは、彼には穴居人以外にもヒト属の新種をさらに設定する用意があったということである。それは、穴居人に関する「註」の最後に挙げられている、「毛深有尾人 (*Homo caudatus hirstus*)」である。彼は、この「種」の設定に際して依拠した人々として、モーペルチュイ、ヒューピング、ボント、アルドロヴァンディの四名を挙げている。その気になれば、これにプリニウスやマルコ・ポーロなども挙げることができただろう。ヨーロッパでは、古代以来そうした存在が信じられ、記述されてきたからである。ただ、リンネは、ヒト属の種として記載するにはなお材料が不十分と判断して、最終的には「註」に挙げるにとどめている。しかし、「ヒト属、あるいはサル属のいずれに帰属させるかを決定しない」という表現は、帰属を問題にしているだけで、存在を否定しているものではない。情報が整えば、本文のヒト属に移されることもあり得た存在であった。さらにリンネには、1771 年になってだが、第四の種としてヒト属への記載を検討した種があった。「ホモ・ラル (*Homo lar*)」である。これは結局記載を取りやめているが、その実体は、今日のシロテナガザル (*Hylobates lar*) であった。リンネは、このように、ヒト属についていくつもの種を設定することに、決してやぶさかではなかったのである。

**「プレアダム人」との関係** 次に、リンネは、穴居人への「註」で、「ホモ・サピエンスは創造者の最後の被造物ではあるが、私は、プレアダム人をプリニウスの穴居人であるとは言わなかった」と述べている。この言葉を何故、どのような意味で彼は記したのだろうか。

プレアダム人の問題を提起したのは、フランス人ユグノーのペレールが著した『プレアダム人』(1655) であった<sup>(81)</sup>。従ってリンネまでには提起されてから既に百年ほど経過していたが、なおそれは、18 世紀一杯までヨーロッパでは盛んに論じられた問題であった。ペレールの議論は、直接的には創世記における天地創造の記述をめぐるものである。創世記ではまず第一章で創造第六日目に人間が創造されたと記述され、第二章に入って、改めてアダムの創造が



語られている。聖書の二度にわたる人間創造の記述は、伝統的には同一の事件を角度を変えて記述したものと説明されてきた。この個所を、ペレールは記述通りに人間の創造が二度あったと解釈し、アダムより前に創造された「プレアダム人」の存在を主張したのである。彼の主張は直ちに大きな反響を呼んだが、教会からは弾圧された。彼は異端の嫌疑で審問を受け、ローマ教皇アレクサンデル7世の前で、自説の誤りを宣言すること、そしてカトリックへの改宗を強制されている。カトリックだけではなくプロテスタント正統派からも彼の説は批判され、ホッブズ、スピノザと並んで、彼は「悪魔の三大頭目」の一人として忌避の対象とされ続けていた。

ことがこれほど大きくなったのは、この聖書解釈の問題自体も大きかったが、それだけでなく、その背後でこれと結びついていた大きな時代的問題があったからである。この問題が発生したのは、16・17世紀、とりわけ「大航海時代」を通じてヨーロッパ人の前に地球大の世界が出現したからであった。というのは、この新しい世界を伝統的世界観・歴史観では説明できないという事態が生じたからである。もちろん伝統的世界観は聖書に基づいたものであったから、これを聖書と新しい世界との衝突と言い換えてもよい。当時ヨーロッパで最も広く受け入れられていた聖書年代学はアッシャーとボッシュエのものであったが、両者によれば天地創造はキリスト前4004年、ノアの大洪水は天地創造後1656年、バベルの塔の事件、つまりノアの三名の息子セム、ハム、ヤペテの子孫たちが世界に広がり始めるのが、アッシャーの場合は創造後1762年、ボッシュエでは1757とされていた。このような年代的拮がりしか持たなかった伝統的・キリスト教の人類史(=普遍史)では、次々に提起されてくる問題に対処できなかったのである。16世紀には、とりわけインディオが誰の子孫かが問題となった。ヨーロッパからもアジアからも膨大な距離をへだてた場所にあるアメリカ大陸に、一体何時どのようにして、またノアの子孫のどの系譜に属するものが住み着くことができたのだろうか？それとも彼らは人間ではないのではないのか？さらにこれに加えて、ルネサンス以来、メソポタミア諸民族やエジプト人に関する古代人の歴史書が「再生」をみた。それらによると、計算上、彼らの起源がいずれも聖書の記す天地創造よりも古いことになる。

ペレールの新しい聖書解釈は、まさにこうした諸問題と深く絡み合っていたのである。彼の議論は、聖書の示す年号をアダムの創造およびその子孫であるユダヤ人の歴史のみにかかわるものと限定し、他方、それ以前に「プレアダム人」が創造されており、インディオや聖書の年号より古い起源を持つと思われる諸民族を、その子孫たちと説明するものであった。単なる聖書解釈の問題ではなく、この説明によって諸問題が聖書と矛盾なく解決できるであろうというのがペレールの考えだったのである。ペレール自身はユグノーの一員であり、聖書中心主義を奉じていた。彼は、主観的には、プレアダム人の主張によってこのような矛盾を解消することで、聖書の記述の真実性を守ろうとしたのであった。ただしその場合、伝統的世界史像は根本から覆されることになる。それが、弾圧された理由でもあった。しかし、問題は強制改宗などでは片づかなかった。その後、さらに大きな問題が発生したからである。新たな震源地となったのは中国、具体的にはマルティニの『中国古代史』(1658)である。本書はペレールの著作公刊の直後に発表されているが、これが記している中国の歴史の古さが問題をさらに拡大させ、

また深刻にしたのである。こうして次々と伝統的世界観・歴史観を脅かす問題が発生するなかで、ペレールについてもまた、18世紀一杯まで議論され続けていくのである。

このペレールの議論は、分類学とのかかわり合いから言えば、二種類の人間を認めたことが重要である。同じく神によって創造された人間とはいえ、「プレアダム人」を祖先とする人間とアダムを祖先とするユダヤ人は、時期を隔てて創造された。当時のヨーロッパ人の思考を根本で規定していた聖書を基礎にしながらか提起されたこの考え方は、ヨーロッパ人の思考の深部で大きな変化が起ころつつあったことを示している。まして、大航海時代のなかで、人間ともサルともつかぬ動物に関する報告が相次いでいた時代である。こうしたなかでは、この主張は、さらにヒトの「種」の複数性という考え方にも通ずる可能性を持つものであったといえよう。

もっとも、それが直ちにリンネの穴居人に結びつくわけではない。リンネが自叙伝に記し、よく引用されるものに「もしも聖書が許すならばだが、地球は中国人が求めてきた以上に古いものであると、次第に信ずるようになってきた」という言葉がある<sup>(32)</sup>。リンネ自身も、上述の中国史の古さをめぐる18世紀の議論と接触していたことがわかる。それだけでなく、自身の地質学や化石に関する研究とも結びついて、聖書年代学自体にも疑問を深めるに至ったことが表明されている。とはいえ他方で彼は「聖書が許すならば」という条件を付しており、聖書への伝統的解釈から離脱するところまでは、彼は踏み切ることはなかった。『自然の体系』第10版における註の一文でもリンネはプレアダム人と穴居人の関係を否定して正統派内にとどまることを表明しているのだが、しかし他方で、何らかの形で、彼がプレアダム人の創造と穴居人のそれとの関係を検討したことを示している。そして、両者の関係は否定したものの、だがそのことを通じてかえって、リンネがヒト属のうちに二つの種を設定するに際してその発想の根本のところ、ペレールの切り開いた道が一つの先駆的な役割を果たしていたといえるのではないであろうか。彼にとって「種」は神が創造したものであり、アメリカ人や中国人などを含むリンネのホモ・サピエンスは「創造者の最後の被造物」であった。とすれば、穴居人はアダムより先に創造されたことになる。そしてペレールのプレアダム人とアダムがともにヒトであったように、リンネの穴居人もアダムも「ヒト属」に所属している。このように、プレアダム人とアダムとの関係は、穴居人とアダムとの関係と平行関係にあるのである。

**「自然人」との関係** リンネの穴居人は、今日からすれば、確かに全くの一大驚異ではあった。だが他方、18世紀という時代の中で問題を考えた場合、これに類する存在を設定することは、リンネという個性を抜きにしてはあり得ないことだったのであるだろうか。ここで再び想起されるのは、ルソーである。ルソーは、ゲーテと並んで、リンネを高く評価した著名人としてよく紹介される。彼は、1771年、リンネにあてて、「あなたと自然だけを相手に、私は田舎を散歩しながら幸福な時間を過ごしました。そしてあなたの『植物哲学』から、私は他の道徳に関する全ての書物よりも多くの真の益を得ました。…私はあなたの諸著作を読み、研究し、またそれらについて思索をめぐらしています。私は心からあなたをあがめ、愛しております」<sup>(33)</sup>と、熱烈な手紙を書いている。

リンネに即してはルソーとの直接的関係は必ずしも明らかではないが、しかしここで重視し

たいのは、リンネとルソーが、同時代人として同じ情報の中で考察を展開していたということである。というのは、ルソーは、『人間不平等起源論』で長大な「註」を設け、当時の類人猿に関する情報を彼なりに整理しながら、自然人について議論しているからである。

ルソーはそこで、まず人類の多様性を見て彼が抱いた疑問として、「旅行家によって獣と思われている、人間に似た様々な動物は、実はほんとうの未開人ではなかろうか。そしてむかし森の中に散らばったその人種は、彼らの潜在的能力をどれひとつ発展させる機会がなく、どの程度の完成にも達しないで、今なお自然状態に止まっているのではなかろうか」(160)と述べている。この疑問を解くため、彼は引き続いて当時の旅行家の記述からその例を挙げていく。「コンゴ王国には、東インドでオランウータンと呼ばれている人類と<sup>ひび</sup>狒とのいわば中間を占める、あの大きな動物たちがたくさん見出される。ロアング王国のマヨムバの森には、二種類の怪物が見出され、その大きい方はポンゴ、小さい方はエンジョコと呼ばれる、とバツテルは述べている」(160)。あるいはダッベルのコンゴ王国にいる「オランウータン」の記事については、「それは古代人のいうサテュルスのように思われる節がおおいにある」(163)と言う。そしてメロラの旅行記のマンドリルその他の例なども挙げたうえで総括している。「われわれの旅行家たちは、古代人たちがサテュルス(牧羊神)とかシルヴァヌス(森の神)とかの名の下に神としたその同じ名を、ポンゴ、マンドリル、オランウータンの名の下に無造作にけだものとしている。多分、もう少し正確な研究をしたら、人間であることが見出されるであろう」(165)。ルソーもまた、リンネ同様の当時の錯綜した情報に接しながら、そこに現代人=文明人とは異なる、「自然状態に止まっている」人間を見ていたのである。

先にリンネの「野生人」のところで見たとように、ルソーにはリンネの「野生人」に対応する「四足の人間」に関する記述も見られた。このことが示しているのは、当時、リンネだけが新種の人間を考えていたのではないということである。そしてさらには、ルソーの挙げた種々の人間たちもまた、一つの連鎖の形につながっていると解釈することも可能なのではないだろうか。つまり、彼においては「人間」は単独の存在として映じているのではなく、現代人=文明人から自然人を経て四足人へという、一つの連鎖の形態で映じていると考えてよいのではないか。そしてもしこのような解釈が許されるなら、ルソーの人間の理解には、リンネのそれと共通点が認められることになる。リンネのホモ・サピエンスは、そのうちに6種類の色合い(亜種)を持つグラデーションとして示されていた。さらに種のレベルではホモ・サピエンスからホモ・トログロデューテスを経て、サル属のサチュルス(*Simia satyrus*)へと連鎖的に配置されているからである。自然法の問題から自然状態における人間の考察に進んだルソーと分類学者リンネとでは発想の経路が大きく異なっているし、また、二人の直接的関係をリンネに関しては示すことができない。だが、このように見れば、両者には18世紀という時代における共通の思考の土台が認められると思われる。

### 表」的思考空間と「存在の連鎖」の観念

フーコーの『言葉と物』(1966)<sup>(34)</sup>の一つのテーマは、まさに上の「共通の思考の土台」、彼のいわゆる「エピステーメー」の分析であった。彼は17世紀中葉から19世紀初頭までを「古

典主義時代」と呼び、この時代を代表する学問の一つとして博物学を挙げている。フーコーによれば、16世紀半ばまでは、記号＝言語とその指示物とが「相似関係」を通じてしっかり絡み合っていた。しかし、古典主義を代表する哲学者デカルトは、精神世界と物質世界の関係を切断した。ここにあらわれているように、「古典主義時代」にはいと、両者を結ぶ紐帯であった相似関係が消失してその結合が切断される。そこで新たな思考は、ここで発生してきた「表象の空間」が持つ固有の秩序や尺度を明らかにする方向に向かい、その結果、エピステーメーとして、「表」の形をした思考の空間が成立し、その分析・分節化が課題となる。フーコーがこの課題に対応して形成された学問として挙げるのが、言語の理論（一般文法）、貨幣の理論（富の分析）と並んで、分類の理論としての博物学である。博物学が受け持つのは確かに自然ではあるが、しかし生命体にみちた自然そのものではない。これに立ち向かうのは19世紀になって成立してくる生物学その他の諸「科学」である。18世紀にはむしろそれは、「自然の連続性と錯綜状態を秩序正しく分節化するするための諸特徴（記号）についての学問」<sup>(35)</sup>という性格を持つ。フーコーは、端的に言えば「博物学とは、まさに可視的なものに名を与える作業なのだ」（155）と述べている。

このような特性を有する博物学のなかで、リンネはどのような位地を占めるのであろうか。フーコーによれば、自然を分類の表（＝同一性と差異性の総体を示す記号の表）として示す技法が、二種類存在した。一つは「方法」、他は「体系」と当時呼ばれた技法である。「方法」とはビュフォンやジュシューが採用したもので、あらゆる「構造」を反復することなく次々に記述していく技法である。これは自然分類法にあたるといえる。これに対し「体系」の技法はいわゆる「特権的な構造」（163）によって記述する技法、人為分類法である。そしてこの技法を駆使した代表者の位置を与えられているのが、「性体系」という特定の「構造」によって全植物を分類しようとしたリンネであった。

ただしこのように技法は対照的であるが、しかし両者には「表」の完成という課題における共通性に加えて、もう一つ、思考の基盤における共通性が存在するとフーコーは指摘している。それは、「十八世紀における博物学のいずれの流派にとっても、自然の連続性は不可欠の要件である」（170）ということである<sup>(36)</sup>。さらにフーコーはこの「自然の連続性」について、18世紀においてはそれがあくまで空間的な意味での連続性であって、決して時間的な意味での連続性を意味しないと注意している。

この「自然の連続性」の問題に至ってようやく、先にリンネが穴居人という種を設定した理由についてブローベリの挙げた第二の理由に到達したことになる。そしてフーコーの「表」的思考空間が17世紀半ばから18世紀一杯までという時代限定を有するエピステーメーであるとするれば、彼が博物学に関する議論のなかで最後に指摘した「自然の連続性」は、もっと長期的な、古代から19世紀に至る西欧的思考の土台となったエピステーメーといえるであろう。

この長期にわたり西欧的思考の土台となっていた思考様式について体系的記述を与えたのが、ラヴジョイの『存在の大いなる連鎖』である。ラヴジョイはプラトンの『テアイテトス』に認められる「充足の原理」（55）がその出発点だとし、これを基礎としてアリストテレスが『動物誌』で「存在の連鎖」の観念を明確化したと述べている。さらに、「その結果は、中世

を通じ十八世紀後半に至るまで多くの哲学者、殆どの科学者、そして実に殆どの教育ある人々が疑わずに受け入れることになった宇宙観、すなわち、巨大なまたは…無限の数に、階層的秩序に配列され、下はほとんど非存在すれすれの極めて乏しい存在から『あらゆる段階』を通過して完全を極めたもの…にまで至る鎖の環からなり立っていて、その環の各々が直ぐ上のものと直ぐ下のものと『可能な限り小さい』程度の相違によってへだてられているような、『存在の大いなる連鎖』という宇宙観であった」(61)と述べている。また、ここで挙げられている「多くの哲学者」の一人には、ルソーも挙げられている<sup>(37)</sup>。

このラヴジョイの議論で注目すべきことは、「存在の連鎖としての宇宙の概念とこの概念の基礎となる原理—— 充満、連続、階層性—— が最も拡がり受け入れられたのは十八世紀であった」(190)としていること、さらに、この観念が18世紀において本稿のテーマとの関係で極めて大きな役割を果たしたことが指摘されていることである。「この原理の故に、博物学者は、連鎖のなかで『欠けている環』<sup>ミッシング・リンク</sup>と思われるものを充たす種類を探し求めた。…このようにして形而上学的な仮説が科学研究に計画を提供した」(245)。すなわちラヴジョイによれば、この原理は、18世紀における博物学の牽引車の役割を果たしたものだだったのである。そしてそこで「欠けている環」とされたものの一つこそ、人間と猿とをつなぐ環だったのである。こうして「連鎖の中で今まで観察されていない環を発見する計画は、人類学の初期において特に大きな役割を演じた。…人間と猿との間の接近をすくなくとも増大することが科学の任務となった」(247)。もちろん、このような動きの代表的な一例としてラヴジョイが挙げるのがリンネであり、リンネの穴居人である。

こうしたラヴジョイの議論を前提として議論しているのがグールドであるが、彼の説明が、これまでになされた穴居人と存在の連鎖との関係に関する最も適切な説明だとされる。グールドはリンネの穴居人について、「人間と間違えられた類人猿、あるいはおとしめられた土着の人々についての不完全な観察にもとづく、旅行者の大げさな報告の寄せ集めから生まれた種である」<sup>(38)</sup>とする。そしてリンネがこのような種を生み出した理由について、「一つの基本的な答えは、リンネウスがそのような動物を予期する理論にもとづいて分類・記載を行ったということであろう。—— ある動物がどんなかたちであれ存在しているはずであるなら、不完全な証拠でも受け入れられるということだ」<sup>(38)</sup>と述べ、「存在の連鎖という一つの間違った理論が、リンネウスにサルと人間との中間型の存在を予期させた」<sup>(38)</sup>と説明している。グールドは、別の場所で、彼の科学史研究に対する基本姿勢にも触れながら述べている。「私は、科学とは真理に導かれる客観的な機械的なのではなく、熱意や願望や、文化に縛られた偏見などに影響される、人間的活動の典型的なのだという見かたを主張している。文化に縛られた思考上の伝統は、科学の理論にも濃厚に影をおとすもので、とりわけ…想像や先入見を制約するようなデータがほとんど存在しないときに、憶測の方向を決定することがしばしばある」<sup>(39)</sup>。すなわち、「存在の連鎖」の観念自体は時代に制約された「偏見」であり間違っているにしても、しかしこの偏見に基づいて提起された課題が、人間と猿との間の「失われた環」(＝フーコーの「表」における空白部分)の探求に人々を向かわせ、そしてリンネをして、錯綜した情報のなかから「予期」された存在を読みとらせたのである。

**体系家リンネ** しかし、グールドの議論には、二つの問題点があると筆者は考える。

まず第一に、彼の議論では、存在の連鎖という原理と穴居人という結果を媒介しているのは「旅行者の大ききな報告」のみである。だが、これでは不十分だというのが筆者の考えである。というのは、リンネが穴居人に関する説明で挙げている、プリニウスの役割が無視されているからである。しかもリンネが採用した「穴居人」は、大航海時代にヨーロッパ人が初めて耳にした名称ではなかった。それはヘロドトスやクテシアスなどのギリシア人が伝え、プリニウスによって詳しく記述され、さらに中世を通じ古代人の示したイメージとともに伝承されてきた名称であった。しかも「自然の物体の分類と名称付与」を博物学の任務とするリンネに即して考えるなら、名称自体はあくまで原理的には記号に過ぎないにしても、その名称の由来や意味を重視するのが当然であろう。従ってグールドの言う「予期」がリンネにおいて具体像へ展開されるにあたって、伝統的な「化け物世界誌」の一部として伝えられてきた、この「穴居人」が果たした役割の大きさも、決して見落としてはならないであろう。

第二に、グールドが穴居人のみを問題とし、リンネの「サチュルス」を考察の対象から外しているのも片手落ちだと思われる。この点ではブローベリも同断である。特にブローベリの場合、穴居人や有尾人、ホモ・ラルなどの問題を検討するなかでこれらをリンネの「迷妄」(176)と呼び、当時の情報の混乱について触れて「リンネにはこのような情報を秩序立てたり、名称を振り分け諸文献への参照を数え上げていくことは、荷が勝ることであった」とし、「リンネの科学は、こうしたたぐいの訳の分からぬ変種で一杯なのである」(182)と述べている。確かにリンネには情報に対し批判的態度が薄いという一面があった。例えば、公式の書物に掲載はしなかったものの、「水中人 (*Homo marinus*)」の存在を信じていたということも有名な事実である。しかしリンネは他方で、混沌とした情報のなかから、上でも見たように一方でヒト属に穴居人を、他方でサル属にサチュルスという種を設定した。情報から穴居人一種のみを取り出したのではなく、彼は二つの種を取り出したのである。サチュルスの記述の基礎となったトゥルプは、それをオランウータンとも呼んでいた。穴居人の別称としても、オランウータンが挙げられている。リンネは、このように同一の名称で呼ばれてもいた存在を、二種に区分したのである。このこともまた、無視してはならないであろう。そしてこの点においてみるべきは、軽信や迷妄に踊らされたリンネではなく、むしろ情報が混乱しているが故にこそ、それに秩序を与えるべく、「科学の原理に従うことを強制されている」との「覚悟」をもって、立ち向かったリンネなのではないであろうか。

筆者には、リンネの穴居人とサチュルスの設定は、「生まれながらの体系家」<sup>(40)</sup>としてのリンネが、その任務の自覚と覚悟のもとで行ったと思われる。この場合、彼の体系を基礎で支えていたのは、19世紀前半における時間的な意味を含まない、空間的な意味での、また固定的な、「存在の連鎖」の観念であった。そしてこの観念が「予測」させたのが、一方でヒト属のなかでサルに近い存在、他方ではサル属のなかでヒトに近い存在だったのではあるまいか。また彼の穴居人という名称選択について言えば、それが示しているのは、穴居人の「予期」の大きな部分が、伝統的な「化け物世界誌」における「穴居人」を基礎に形成されたということだと考える。そしてその「予期」が「旅行者の大ききな報告」と交錯したところで、リンネの

「穴居人」が具体的な像を結んだと言えよう。

### 第3章、『自然の体系』第12版（1766-68）における人間の位置

リンネは、自然の体系第10版出版の後、さらに第11版（1760）、第12版を刊行していった。そこでは、ホモ・サピエンスに関しては、基本的には変化していないと言えよう。第10版後の期間で見てもおかなければならないのは、穴居人とサチュルスに関する動きである。ここではリンネの弟子ホッピウスの論文である「ヒト形類」<sup>(1)</sup>にかかわる問題と、リンネ自身の手になる最後の版、『自然の体系』第12版とに分けて見ていきたい。

#### 1. ホッピウス「ヒト形類」（1760）

ホッピウスの論文「ヒト形類」は、リンネが編集・出版していた論文集『学术研究のよろこび』第6巻（1763）<sup>(2)</sup>に収録されている。その表題によると「ヒト形類。リンネ博士の指導により、ペテルブルクの人クリスティアヌス・エマヌエル・ホッピウスが報告、ウプサラ、1760年9月6日」とある。つまり形式上、リンネの指導によってその弟子ホッピウスが書き、ウプサラのアカデミーで発表した論文とされている。これに対し、この論文の著者はリンネだとし、リンネの作品として扱う研究者も存在する。これにも、それなりの理由がある。というのは、ブローベリによれば、リンネにはスウェーデン語で書かれたほぼ同内容の「人間の従兄弟」と題された論文が存在するからである<sup>(3)</sup>。また今日では信じられないことだが、弟子の学位論文を指導教官が執筆することが「慣習」であり、上記の『学术研究のよろこび』はそうした論文を編集したものであるという<sup>(4)</sup>。こうしたことから、リンネである可能性は高いとも思われる。

しかし他方、「ヒト形類」という用語は『自然の体系』初版で使用されたが第10版では放棄されたものであるし、また、『自然の体系』第10版および第12版の記述とこの論文は、これから検討するように、重要な点で一致しないところがある。実際、分類学ではこの論文は長くホッピウスのものとして扱われてきた。近年（1988年）でも、リンネとホッピウスの相違を強調し、ホッピウスをボルネオ・オランウータン（*Pongo pygmaeus*）の種小名命名者として扱うべきだとする研究者も存在する<sup>(5)</sup>。このようなことから、ここでは形式のほうを重んじて、ホッピウスをいわば形式主語として述べることにしたい。またこの論文に附された図はリンネ周辺の人々が持っていた「ヒト形類」のイメージをよく示すものでもあるので、これを見ながら簡単にその内容をまとめていくことにしたい（図-3）。

ホッピウスは、「ヒト形類」として4種を設定している。穴居人（*Troglodyta Bontii*）及び、有尾人（*Lucifer Ardrowandii*）、サチュルス（*Satyryus Tulpii*）、ピグマイウス（*Pigmaeus Edwardi*）である。第二の有尾人までがヒト属、他の2種はサル属である。穴居人から順にヒトから遠ざかり、ピグマイオスが最も遠縁の存在だとされている。各々の種の記述を行った人々とされているのは穴居人ではボント（図-1）、有尾人ではアルドロヴァンディ（図-4）、サチュルスの場合はトゥルプ（図-5）、ピグマイウスについてははエドワーズ（図-6）である。

まず穴居人については第 10 版におけるリンネもボントをその根拠の筆頭にあげており、この点、リンネとの間に相違はない。ただしイラストは、毛深いところは同じでもボントの原図とは向きが違ふし、髪の毛や顔つきなどもだいぶ変えられている。外見上ほとんどヒトと変わらないとも見えるが、身長が 1メートルに満たないし、夜行性その他、第 10 版で説明されたようなヒトとの相違が指摘されている。次の有尾人については、リンネもイタリアの博物学者アルドロヴァンディ（1522-1605）を情報源の一人としてあげていた。またリンネは第 10 版でこれを「毛深有尾人（*Homo caudatus hirsutus*）」と呼んでいたのだが、ここでは、ダンテも地獄の主として述べている魔王ルシファーの名が与えられている。しかもリンネはヒト、サルの違いに帰属させるかを「決定しない」としていたが、ホッピウスは「ヒト」としているのである。

サチュルスは、リンネもサル属として記載していた。またその根拠とされていたのも、トゥルプであった。イラストはトゥルプのものではなくスコーティンのものが採用されている。「チンパンジー」という名称がヨーロッパに初めて伝えられたのは、1738 年、ロンドンで見せ物として「マダム・チンパンジー」が大きな話題となって以後で、それをスコーティンが描いたものが、この図の原図となったのである。原図では左手に杯を持っているのだが、この図ではそれが削除されている。最後のピグマイウスは、イギリスの博物学者エドワーズの原図（1758）を転写したものである。それはオランウータン、チンパンジーなどの特徴をない交ぜにしたものであった。しかしともかくこのようにして、「ピグマイウス」はモンキー（オナガザル）に最も近い「ヒト形類」として、そしてリンネが第 10 版では記載しなかった新種として、ホッピウスによって記載されたのであった。

## 2. 『自然の体系』第 1 2 版（1766-68）

リンネが自ら執筆した最後の『自然の体系』となったのが、第 12 版であった。第 10 版が総計 1384 頁、第 12 版が 2355 頁とほぼ 10 年間で 2 倍近くに膨れあがったことになる。この間にヨーロッパ世界で植物の種数がいかに急増したかの現れであろう。他方でまた、リンネが倦まず続けた記載の仕事が、どれだけ彼の精力を消耗させたかもうかがわせる。事実、彼は本書出版後急速に心身が衰えていくのである。

第 10 版から第 12 版の出版までの間に、二件、リンネの人間論にかかわって重要な出来事が起こっている。その第一は、上のホッピウス「ヒト形類」（1760）であるが、第二は、1759 年に、リンネが類人猿をやっと実見する機会を持ったということである。これまでリンネはオナガザルに属するサルを何種類か飼育してはいたが、この年、一つは上のホッピウスも根拠にしていたイギリスの博物学者エドワーズから、リンネは「素晴らしい状態のチンパンジーの皮」を寄贈された<sup>(6)</sup>。もっとも、その色がタイソンの標本とかなり異なっていたので同定が困難なものであったというし、現在は残っていないので、リンネのいうとおり「チンパンジー」の皮だったかどうかはわからない。また、「私はオランウータンを是非とも見たいと熱望していました」というリンネのお礼の手紙が残っており、同じ 1759 年に彼の弟子の一人がイギリスから生きた「若いオランウータン」をもたらした<sup>(7)</sup>。ここでいわれている「オランウータン」



が現在のオランウータンか、それともチンパンジーのものであるかもはっきりしない。このように現在からはいずれとも決めかねる不明確な情報ではあるが、しかしここからは、リンネが熱心に類人猿の標本を求め続けていた様子うかがえる。またそうした彼に対し、様々な協力が行われたこともわかる。そして第 10 版以後のこうした状況は、あとで述べる第 12 版での類人猿の記述の変化につながったと考えられる。

このようなことを経て出版されたのが第 12 版であった。第 10 版と第 12 版とを比較すると、基本的には第 10 版が踏襲されているといえる。そのなかで最も大きな変更といえるのは第 10 版で記述したサチュルスについて、今回は二種類の亜種を記載したということである。他は、多くは字句の改訂である (表-3)。

まずホモ・サピエンスに関する項目から見ていこう。全体の枠組み、すなわちこれを野生人、アメリカ人、ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人、奇形人という 6 亜種からなるものとする枠組みは、まったく変わっていない。そのなかで、野生人については 3 例が追加されて、9 例となっている。追加された例は、「カメラリウスの伝えるバンベルクのウシ少年」、「トランシスラーナの少女たち、1717 年」、「シャンパーニュの少女たち、1731 年」の 3 例である。他の亜種に関しては、すべて簡単な字句の置き換え、追加のみである。

穴居人に関しては、本文において、若干の追加が行われている。まず、タイプ標本の位置に、上でも述べたリンネ編の論文集『学術研究のよろこび』の第 6 巻が置かれている。つまりホッピウスの「ヒト形類」の記述が筆頭におかれ、第 10 版では筆頭におかれていたボント以下は、その次の位置にずらされている。棲息地については、第 10 巻の記述に続けて、「マラッカのオフィル山」が追加された。記述部分では語句や文章の追加が 5 箇所ある。「直立すると手の指が膝に届く」とやや長い追加が最後に加えられている以外は、語句の修正程度の改訂である。最後の文章は「ホットtentのエプロン」が穴居人にも存在することを述べた文章である。もともと、第 10 版の「註」の「トログロデュッテスとヒト属との関係」で、このことは述べていた。今回これを本文にも追加し、註も第 10 版のものを無修正で採用しているから、説明をより明確にするための記述の追加であって、穴居人についての考え方が変わったわけではない。むしろ特徴の記述を追加しながら読者を説得しようとしており、リンネが最後までヒト属の一員としての穴居人について、その存在を確信していることがわかる。

次に穴居人への註においては、穴居人を「暗闇の娘」と表現するなど若干の変更・追加のほか「有尾人」についての改変が行われている。第 10 版で「毛深有尾人 (*Homo caudatus hirsutus*)」とあった部分が「ルシファー、ホモ・カウダトゥス (*Lucifer, Homo caudatus*)」と改訂されて、さらにタイプ標本の位置に『学術研究のよろこび』のホッピウスの論文が挙げられている。また、それに続いてモーペルチュイなど第 10 版同様の記述例が挙げられるが、今回はこれにゲスナーも追加されている。ただし、記述部分はまったく変更がなく、「ヒト属、あるいはサル属のいずれに帰属するかを決定しない」という第 10 版の言葉が繰り返されている。つまりここでは、リンネは一方でホッピウスの命名は受け入れながらも、しかし他方でシノニムとして *Homo caudatus* をなお記述し、しかもホッピウスがヒト属の一つの種として扱っているのに対して、リンネ自身はなお慎重に「決定しない」として、ホッピウスとは異なった態度を示して

いるのである。

次に、サチュルスに関する記述では大きな変化が見られる。サル属を三亜属に分け、亜属のシミアに位置づけることは変わらないが、今回はサチュルスについて二種類の亜種が記述されている。最初に「錆色の無尾猿、豊かな逆立った毛髪、覆われた尻」とあり、記述の根拠としては上述のホッピウスの論文とエドワーズの「森のヒト (*Homo sylvestris*)」が挙げられている。次いで「 $\beta$ . インド・サチュルス (*Satyrus indicus*)」と名称のみが挙げられ、続いてその根拠として第 10 版同様にトゥルプが記入されている。ただし今回は根拠として新たな追加があり、「スコートンによる 1738 年のロンドンのチンパンジーの図」と記されている。つまり、「 $\alpha$ 」にあたるのはホッピウスの「ピグマイウス」で、これについては今回リンネが初めて「錆色の無尾猿」として記載した。これに対し「 $\beta$ 」にあたるのは、ホッピウスでいえば「サチュルス」、それにリンネが第 10 版で記述した「背中に黒い毛」を持った「インド・サチュルス」ということになる。さらに「 $\beta$ 」についてつけ加えれば、ホッピウスもリンネもともにトゥルプの記述とスコートンの描いた「チンパンジー」によって記述していることになる。

ホッピウスとリンネの違いを種小名－亜種名で表記して整理すれば、下記のようになる。

(ホッピウス)	⇔	(リンネ)	→	(今日)
<i>pygmaeus</i>	⇔	<i>satyrus satyrus</i> ; 錆色	→	オランウータン
<i>satyrus</i>	⇔	<i>satyrus indicus</i> ; 黒	→	チンパンジー

リンネの分類とホッピウスの「ヒト形類」の記述との関係についていえば、ホッピウスが両者とともに「種」として記述したのに対し、リンネは亜種としての区別しか認めなかったということである。このことについてレーラー＝エルトルは、「リンネはホッピウスの種は拒否したけれども、しかしながら、1766 および 1767 年出版の分類においてエドワーズとホッピウスによるオランウータンを明確な実在とする認識のほうには結局同意し、その結果、彼の *Simia satyrus* を二種類に区分したのである」(11) と述べている。レーラー＝エルトルは、当然「ヒト形類」はホッピウス自身の論文とする立場から、エドワーズとホッピウスのリンネへの影響をこのように論ずるわけである。当時の不分明な情報のなかで、ホッピウスと違い、慎重なリンネは、新種の設定にまでは踏み切らなかったのである。この意味で「リンネの記述は状況の中で期待され得る限度一杯まで明確にしたものであった」(11) というレーラー＝エルトルの評価は、至当であると考えられる。しかし、サル属のサチュルスを「錆色」と「黒」の二亜種に区分したリンネは、こうして、当時許される「限度一杯まで」両者の相違を明確化したことにより、次世代の人々がオランウータンとチンパンジーをそれぞれ独立した種として確立していく出発点になったといえることができるであろう。

リンネが『自然の体系』第 12 版で行った、ホモ・サピエンスおよびサチュルスに関する議論を一渡り見てきた。この最後の『自然の体系』第 12 版において、リンネはサル属のサチュ

ルス (*Simia satyrus*) については第 10 版の記述を変更した。しかし、ヒト属に関しては、第 10 版の記述を多少手直しした程度で、それを基本的には踏襲した。ホモ・サピエンスと並ぶ種として穴居人を記述し、またホモ・サピエンス内の亜種としてアメリカ人、ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人のほかに野生人、奇形人が記載されている。註でも同様に、ヒト属の第 3 の種の候補としてルシファー (*Homo caudatus*) が留保されている。リンネにおいては、最後まで、人類 (ヒト属) は決して今日のようなホモ・サピエンス一属一種という形で認識されていたわけではなかったのである。人類が一属一種とされるのはリンネが記載した穴居人や野生人、奇形人などの諸要素が批判的に排除され、他方でまた、類人猿の分類が確立された結果なのである。しかし、そこに至るためには、後の人々による修正を待たねばならなかったのである。

#### 第 4 章、ブルーメンバッハとグメリンによるリンネの人間論の修正

ヨーロッパにはリンネを厳しく批判したビュフォンはじめ、多くの批判者が存在した。リンネのホモ・サピエンスとホモ・トログロデュッテス、類人猿像の「修正」に関して、そうした人々の議論を追求することは、しかし、ここではできない。以下では、リンネの立場を継承するところから出発し、やがて一歩進めてリンネを「修正」するに至った二名の研究者を、すなわちブルーメンバッハとグメリンを対象として、その過程をたどることにしたい。

##### 1. ブルーメンバッハ、『人間の自然的亜種について』(1775、1781、1795)

ブルーメンバッハは、今日、人類学 (自然人類学) の祖の一人とされている。とりわけ著名なのは、彼が人類の「亜種 (変異)」としてコーカサス人、モンゴル人、エチオピア人、アメリカ人、マレー人を設定したことである。だがもう一点重要なことは、彼が他方で、人類は一属一種であると常に強調し続けたことである。彼の五亜種への区分は、人類をホモ・サピエンス一属一種と確定する作業と、分かちがたく結びついていたのである<sup>(1)</sup>。

ブルーメンバッハの人間研究は、リンネから出発した。彼はゲッティンゲン大学で博物学者ビュットナーの指導を受けたが、そのビュットナーの講義は『自然の体系』第 12 版をテキストに行われている。ブルーメンバッハの自伝的ノートによると、この講義は、人間から始めて 6 ヶ月たってもまだ哺乳類の項にとどまったままで、この間、当時の旅行記なども広く話題に取り上げられ、「このようにして私は博士論文に『人間の自然的亜種について』を執筆するようにと導かれた」(5) と記されている。論文は 1775 年に提出・出版されたが、この後次々と改訂されながら出版され続け、彼の代表的著作となった。1775 年はリンネが没する 1778 年の 3 年前ではあるが、当時リンネはすでに引退し活動停止状態にあったから、彼はリンネの直接的な弟子というわけではない。しかし、彼が「リンネの人為分類をほとんど変わらずに追随したとしてあちこちで批判され」(13) たということが示しているように、彼の人間研究は出発点だけでなくその後においても、基本的にリンネの体系の枠内に止まった形で進められた。

以下では『人間の自然的亜種について』の初版以後の各版、および『自然史論』(1806、1811) によりながら、リンネの人間論との関係を中心に見ていくことにしたい。具体的には類人猿 (リ

ンネのサチュルス)の再編、穴居人、有尾人、それに野生人と奇形人に関する議論を、そして最後にブルーメンバッハのホモ・サピエンスの五亜種論を検討していくことにしたい。

**リンネのサチュルスの再編** ブルーメンバッハは、『人間の自然的亜種について』初版(1775)でリンネの「サチュルス」を再編し、チンパンジーとオランウータンが別種であることを明確にした。彼はここでまず、トゥルプ以降の人々が伝えたものはいずれも形も大きさも異なり、しかも「大変若い」(95) 個体ばかりで成獣の形態が不明であると、従来の情報の問題点を挙げている。実際、ヒトと類人猿は幼児期には似ており、このことは、今日、人類の誕生に関するネオテニー(幼形成熟)説の根拠になっているほどである。また、ブルーメンバッハは、オランウータンについては、イエナで生きた雄を見たと述べている。こうしたことから、類人猿の成獣が人間からは大きく異なった姿へと変貌していくことについて、リンネよりは詳しい情報に接していたことが推測される。ブルーメンバッハは、また、リンネがあまり利用しなかった解剖学に通じていたし、病理学にも早くから深い関心を払っていた。

ブルーメンバッハのこの研究では、リンネと異なる彼の関心から、特に足をはじめとする解剖学的特徴が詳しく点検されている。そしてそれに棲息地についての情報も勘案し、その結果、これを「少なくとも二つの種」(96)に区分することができることを主張している。しかもその際、「いたずらに名称を増やすことを避けるためにリンネに見られる名称を与える」(96, 傍点は筆者)として、以下のように二つの種に区分してサル属(*Sima*)に配置したのである(96)。

1. シミア・トログロデュッテス(*Simia troglodytes*)、またはチンパンジー

トゥルプとスコートンによって記載されたもの。

長頭で筋骨逞しく、背中のみ毛深くて前面は肩をのぞいて無毛。

2. サチュルス(*satyrus*)またはオランウータン

タイソン、エドワーズ、ル・カおよびビュフォンによって記載されたもの。

やや細身で小頭。長い毛で覆われており、前腕と腕の毛が反対向きに生えている。

この分類も、今日、その根拠となっている標本からいえば、完全に正確ではない。だが、それは、もういちいち指摘しなくてよいであろう。ここで大切なことは、二つの種であるとした以上、ブルーメンバッハが、リンネの原則に従って少なくともどちらかに種小名を与えなければならなかったということである。リンネは上でも見たように『自然の体系』第12版で両者にサチュルスの種小名を与え、亜種の段階でしか区別していなかったからである。そこで、まず、リンネが第12版で最初に記載したオランウータンのほうにはリンネの「サチュルス」を残し、そのまま種小名として存続させたと考えられる。そして、リンネが第二の亜種の根拠を「スコートンによる1738年のロンドンのチンパンジーの図」と述べていたことから、それと同じものを、彼もチンパンジーと呼んだ。しかし、学名に関しては、「リンネに見られる名称を与える」という彼なりの原則から、これにリンネの穴居人から流用した「トログロデュッテス」という種小名を与えたのである。

チンパンジーとオランウータンの学名について話がややこしくなったことには、ブルーメンバッハがこのように「リンネに見られる名称を与える」との原則を採用し、「トログロデュッテス」と「サチュルス」を流用したことが大きな原因となった。というのは、ここで既に、さきに述べておいたホッピウスの命名と、種小名が交錯した関係になっているのである。つまり、ホッピウスが「サチュルス」と呼んだ種（チンパンジー）を、ブルーメンバッハは「トログロデュッテス」と呼び、ホッピウスが「ピグマイオス」と呼んだ種（オランウータン）をブルーメンバッハのほうは「サチュルス」と呼んでいるのである<sup>(2)</sup>。

彼の穴居人に関する再検討は基本的にはこの初版で完結しており、後に様々な著作でオランウータンやチンパンジーについて行う言及は、ここでの議論の繰り返しに過ぎない。

**リンネの穴居人の否定** さて、上のように「トログロデュッテス」の名を流用するに当たっては、少なくともリンネの「穴居人（ホモ・トログロデュッテス）」という名称のほうが実体を失い、流用を許す状況になっていなければならない。この穴居人の検討は、同じ『人間の自然的亜種について』初版の後半、人間の病的な諸変異に関する考察の中で行われている。結論から言えば、リンネの穴居人は人間のアルビノについての情報に尾ひれがついて形成されたものと断じ、その存在を否定したのである。

ブルーメンバッハは、もともと病理学への関心から、当時ヨーロッパで広く関心を呼んでいたアルビノについて、早くから資料や文献による情報を収集し、研究していた。その成果が論文に盛り込まれ、古代のアリストテレスやプリニウスなどから同時代の多くの旅行家たち、ボルテールとモーペルチュイの報告、ビュッフオンなども引用しながら、アルビノがウサギやネズミ、鳥その他の動物だけでなく、地球上のあらゆる場所で人間にも出現する病変であることを論証している。従来アルビノについての記述におとぎ話がからみつけられてきたことを指摘し、それに「だまされて躊躇なくそれらから人間の特殊な種を創り出した人々を許してもよいだろう」（132）とも言う。もちろんここで考えられているのは、リンネである。「リンネの大きな誤り」（132）について指摘し、「穴居人」には身体が白いこと、目が赤いことなどのアルビノの特徴に加えてエイプの特徴も混入していること、さらにそれ以外のリンネの具体的記述、つまり瞬膜の存在、夜目、あるいは歯擦音で話すとか、支配者の地位の再興を信じているなどという説明は、「おとぎ話の領域」（133）に属すると断じている。ただしこの断言は、ほとんどをアルビノに関する議論に集中したうえでのものである。プリニウスに関する議論が一言もないなど、リンネが問題にしていた他の要素についてはほとんど議論されていない。しかしいづれにしろこのように穴居人の存在を否定したことこそ、ブルーメンバッハが、その名称（トログロデュッテス）をチンパンジーの種小名に横滑りさせることを可能としたものであった。

リンネの穴居人については、以後の他の諸版においても、また他の著書においても、常にアルビノに関する項目のなかで議論され、繰り返し否定されている。議論の内容自体はほぼ同様なので、ここで繰り返す必要はないであろう。ただ、リンネの穴居人からエイプや「おとぎ話」に属する要素を排除すると最終的にはアルビノが残るとすれば、このアルビノ自身をいかに位置づけるかという問題は残るであろう。この点に関して結論を与えているのが、『自然史論第

1部』(1806)の言葉である。「実際のところ、穴居人の検討は、博物学の領域にはまったく属さないものである。というのも、それは病理学に属するものだからである」(313)。すなわちリンネの穴居人は、ブルーメンバッハを通じて、一方で種小名はチンパンジーにゆずり、他方リンネが論じていた実体に関しては、最終的には博物学の対象ではなく病理学の対象に移されるという結末を迎えたのである。

さて、ブローベリによると、リンネが穴居人の記述で依拠していたダーリンは、上でブルーメンバッハも挙げていたボルテールの報告を、ボルテールの名前は明示しないで、自由に利用していたという。ボルテールには、実際、1745年にパリの見せ物となっていた黒人のアルビノの子供に関する報告を執筆していた。自身直接少年に会見して観察し、20歳まで生きないとか、赤い目などの身体的特徴などは病気ではないとしつつ、われわれの知らないタイプの人間がいるかもしれないと述べていた<sup>(3)</sup>。したがって、リンネはそうとは知らずにボルテールを利用したことになる。またそこから、リンネの穴居人の記述については、ブルーメンバッハの指摘どおりに、アルビノがソースの一つであったことを事実として認めることができるであろう。

アルビノの問題については、実は、リンネも気づいていないわけではなかった。リンネもアルビノに関する情報には接していたのである。それは、『自然の体系』第10版以後の、「穴居人」につけられた「アフリカ人との関係」という「註」が示している。ここでは、人間以外の例も調べながら、穴居人がアフリカ人のアルビノであるかどうかを彼が検討していたことが記されている。また、東インドに派遣されていた医師で博物学者のG.ケーニヒに、リンネはかねてから穴居人の標本入手を依頼していた。その医師から、1772年になってだが、リンネの記述したような子供が生まれることがあるがその両親は黒い肌をしており、何らかの病変にすぎないだろうという返事を受け取っていた<sup>(4)</sup>。リンネには、彼がボルテールは直接知らなかったとしても、アルビノについての情報は、届いていたのである。「註」の言葉、「白いモーロ人が、黒いモーロ人からでたと判断しなかった」は、このような状況のなかでの、彼の判断だったのである。結局リンネは、アルビノについては一定の知識は持っていたにしても、しかしなおかつ穴居人の存在を信じ続けた。それには、リンネの穴居人の根拠になっていたのがダーリンだけではなかったことが関係していよう。つまり、前章で考察したように、古代以来の情報や存在の連鎖という思考の枠組み等々、リンネには穴居人の存在を信ずる様々な根拠が存在していたからだと考えられる。これに対しブルーメンバッハは、その個人的関心から広く情報を収集していたことに加え、「存在の連鎖」の観念を否定していた<sup>(5)</sup>。彼がプリニウスや旅行者たちの記述を「おとぎ話の領域」の事柄として切って捨てることができたのは、こうしたことが関与していると思われる。

**リンネの有尾人の否定** リンネではヒト属第三の種に昇格する可能性があった「有尾人」も、同論文で否定されている。彼はここではプリニウス、プトレマイウス、パウサニアスの伝えるサチュルス島、マルコポーロなどを挙げながら、「それら作家たちの記述を比較して最も確かと思われるのは、サチュルスの住む島々は現在のボルネオ、セレベス島などであり、尾の

あるエイブが人間と取り違えられてきたということである」(141)と言う。また最近報告されたトルキスタンや台湾その他で発見されたという例も、「すべての話はフィクションにすぎない」(141)。ここまではただ断言しているだけだが、ホッピウスの示した図(彼は「ヒト形類」をリンネ自身が叙述したものと考えている)については、文献探索に基づいて否定している。つまり図ではアルドロヴァンディを典拠と示しているが、実はアルドロヴァンディ自身はゲスナーに基づいており、しかもそのゲスナーはスイスの博物学者ベルンハルディ・フォン・ブライデンバッハの聖地への旅行記から引用していると指摘する。そしてその真の原図を示しながら(図-7)、そこに描かれた6種類の動物に関する「これらの動物たちは聖地でわれわれが見たものをそのとおりに描いたものである」というブライデンバッハの文章、および当該の動物については「名称不詳の動物」と書かれていることも紹介している。さらにその足がエイブの特徴を示しているという自身の分析も加味して、「それは何らかの尾のあるエイブ、…例えばリンネのシンオザル(*silenus*)」(142)であろうと結論している。そして時代を経るにつれてこの原図から離れてイメージが次第に自然に反するものとなり、人間に近くなって問題の図像に至った経過を示し、その存在を否定したのである。あわせて彼は、この有尾人同様な過程を経たものとして、「自然の状態からの他の特異な逸脱」(140)をすべて否定している。

このようにして、リンネにおいて穴居人に続きヒト属の一員に昇格する可能性のあった有尾人も、否定された。ヒト属には、ホモ・サピエンスのみが属することになる。残されているのは、そのホモ・サピエンス種が包含している亜種に関する、ブルーメンバッハの検討である。

**リンネの野生人の否定** ブルーメンバッハは、『人間の自然的亜種について』の初版では、野生人について議論していない。しかし、第3版(1795)に至って、人間の基本的特徴である「直立」に関する議論のなかで考察している。「野生人ピーター」をはじめ、リンネの「野生人」たちに関する報告を検討し、最後まで四足歩行が改まらなかった「ヒベルニアの少年」については「ほとんど信用がおけない」(165)としたうえで、他のすべてが後に直立歩行を行うようになったことから、「リンネの野生人には『四足』という言葉も、『毛深い』という言葉同様に、定義として掲げられる必要はもはやない」(165)と結論づけている。ただここではまだ定義の一部を修正しただけで、「野生人」そのものの根本的批判や否定は行われていない。

彼が「野生人」の問題に正面から取り組んだのは、『自然史論、第2部』(1811)においてである。ここではリンネが『自然の体系』第12版で記載した9例について、「ピレネーの少女」のみはまだ不明だとしながら、他のすべての事例を詳しく再検討している。とりわけ「野生児ピーター」については、1724年に発見された場所がブルーメンバッハの奉職していたゲッティンゲン大学のあるハノーバーであり、ピーターがその後の生活を送った(1726-1785)のがイギリスで、両国が当時同君連合の関係にあったということも好条件となって、政府高官まで動員して極めて綿密な調査を行い、大変に詳細で興味深い報告を行っている。ここでは残念ながら結論だけしか紹介できないが、それは、「後の詭弁家たちが野生人ピーターと持ち上げたこの純粋な人間性の典型と思われた男は、全くのところ、唾者で低脳の白痴以外の何者でもなかったのである」(334)というものであった。さらに他の諸例についても、例えば「ヒベルニ

アのヒツジ少年」に対しては啞者で精神薄弱者にすぎなかったと述べ、「わが同胞のシュレーツァーとヘルダーによってこれに向けられたような注目にはまったく価値しない」(337)と批判している。このようにして個別的事例を検証してそれらの「野生人」としての存在を否定し、総括して次のように言う。「ここで私が他の者たちについて記したことは、哲学的な人間の博物誌においてこれら偽りの自然人たちについて語られてきた不思議で様々な物語に対して、まっとうな評価を与えたものと思う」(339)。彼らは決して「自然人」ではなく、「すべて不自然にゆがめられた人間」(339)に他ならなかったのである。彼自身は、人間の本性を「生まれながらの家畜」(340)としていた。したがってこの立場から個々の事例の否定だけでなく、自然人そのものの存在を原理的に否定したのである。

ブルーメンバッハは、ここではリンネのみを検討の対象にしている。そのために事例としては出てこないが、彼の脳裏には、当然「アヴェロン野生児」も浮かんでいたに相違ない。この不幸な少年が発見されたのは1799年であった。その後イタールの彼に関する詳細な記録が行われ(1801-07)、その後は、このような問題はもはや自然人などの問題ではなく、人間の精神的能力の発達に関する諸学問、心理学、教育学などの領域の問題へと移っていくことになる。ブルーメンバッハが行ったリンネの野生人に関する再検討も、これと同一の線上に位置づけられるものであといえる。

**リンネの奇形人について** リンネの「奇形人」については、これまで見てきた穴居人その他に関する議論の場合のような、その範疇自体に関する議論は見あたらない。しかも『人間の自然的亜種について』の初版には、「野生人」について、「むしろリンネの奇形人のなかに含ませたいと考えたりするほどである」(129)と述べているところがある。奇形人という範疇は認めているかのような記述である。しかし他方、散在するリンネの奇形人に関するブルーメンバッハの言及を集めると、やはり、奇形人も否定していたと考えざるを得ない。

リンネの奇形人は、まず「土地」を原因とするものとして「アルプスのこびと」と「パタゴニアの巨人」が、次いで人間の志向＝人為的原因によるものとして、単睾丸人(ホッテントット)、ヨーロッパの灯心草人(腰細人 *Junceae*)、中国の大頭人、カナダの平頭人が挙げられていた。これらの奇形人に関するブルーメンバッハの議論を拾い集めてみると、次のようになる。

まず『人間の自然的亜種について』の初版で、それらを簡単に見てみよう。パタゴニア人は今日では情報の誤りだと分かったので、もはや彼らは巨人ではないと指摘している(104)。ただしヨーロッパ人は古い骨と比較して明らかに背丈が低くなったとも論じていて、古来ヨーロッパで伝えられてきた巨人伝説を原理的に否定する議論までは行われていない。また、中国人は「頭蓋骨をゆがめたり圧縮したりするための、極めて多くの人為的手段を行使している」(119)と述べている。アメリカ人についても、人為的変形の例の一つとして、シャルルボワの情報をもとに、「カナダ人は、一つの部族を除いて他は頭が平たい」(121)と言う。そしてこの二例を含む世界各地で見られる多様な頭骨の変形について述べた後、ブルーメンバッハは、「ヒポクラテスの人為が時間の推移のなかで第二の自然となるという言葉喜んで認めるにやぶさかではないものの、しかしそれらは生活様式と人為とに帰せられるべきである」(121)と



述べている。この記述では、リンネの大頭人、平頭人については直接明示されていない。しかしこの言葉は両者にも向けられていることは明らかであり、両者を「生活様式と人為」による変形の一つに数えていると考えてよいであろう。つまり中国人のなかの大頭人、カナダの平頭人は、人為がまだ「第二の自然」となっていない変形として、亜種からは排除されているのである。

さらにリンネの「単睾丸人」(ホッテントット)については、旅行者の記述に依りながら、彼らは生まれながらにそうなのではなく、8歳あるいは18歳のときに、そのほうが早く走れるようになるとの考えから人為的に単睾丸にされるのだと言う(127)。また、灯心草人(腰細人)については、「女性を特殊なダイエットによって細身にする習慣は極めて古く、またほとんどの民族に見られるものである。したがって、礼儀と敬意からして彼女たちをリンネのように奇形人に編入することははばかれる」(128)と、これは明示的にリンネを否定している。ついでながら、インディオには髭がないという旅行者たちの報告も実は髭を抜くという彼らの習慣によるのだとして、「アメリカ人」に関するリンネの記述を否定している(127)。

最後に、こびと(ピグミー)と巨人について詳しく論じているのは、『人間の自然的亜種について』の第3版(1795)である。そこでは、まず巨人の骨とされてきたものは実は象の骨にすぎないといったことを指摘した後、パタゴニア人が巨人だとするスペイン人たちの報告についても、実際はイギリスの尺度で「六フィート半」(254)くらいだとする。だとすれば背が高いとは言えるが、巨人ではない。あるいは巨人の情報は、スペイン人がその地に他国人を入れないための謀略なのかもしれないとまで述べている。またピグミーとして伝えられた例は、クレチン病の女性であるとも述べる。結論は明らかである。「従って、我々は巨人やピグミーといった民族は決して存在しないということを認めなければならない」(256)。

ブルーメンバッハは他方でヒポクラテスの長頭人に関する説明を受け入れ、身体の人為的変形が「第二の自然」となって遺伝することがあると認めていた。したがって、もしもリンネがヒポクラテスの長頭人を挙げていたらブルーメンバッハはどのように扱ったろうかという問題は残ることになる。あるいはそのことが、リンネの奇形人という亜種を原理的には否定しないという彼の態度に関係していたかもしれない。しかし実際にはリンネは長頭人を記載しなかったし、リンネの挙げた個別的事例すべてについて、ブルーメンバッハは亜種(亜種)としての「奇形人」であることを否定した。リンネを否定したのは、それらの事例がいずれも後天的な変形であったり病気や情報の誤りによるものであって、従ってまさに、「自然的亜種」ではなかったからであった。このように多少の問題は残るにしても、ともかく、リンネの奇形人もまたブルーメンバッハによってホモ・サピエンスの一亜種としての地位を剥奪され、分類学の対象から追放されたのであった。

**五亜種論** ブルーメンバッハは、以上のようにホモ・サピエンスからリンネの野生人と奇形人を追放した。結局ブルーメンバッハが『人間の自然的亜種について』の初版で「自然的亜種」として認めたのは、アメリカ人、ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人の四亜種のみであった。ただし、この初版の段階については二点、つまり、彼の基本的主張が「人間は種としては一つ

であり、亜種が多様なだけである」(98)ということ、第二に「私は亜種を、その数においてはリンネに従ってきたが、しかし、異なった境界線によって定義してきた」(99)としていることを紹介するにとどめてよいであろう。彼は初版ではまだ、独自の五亜種論に到達していなかった。頭骨の研究はじめ新たな方法を採用しているにしても、リンネの四亜種論については地理的分布について多少修正したのみで、そこからほとんど踏み出していなかったのである。

ブルーメンバッハがホモ・サピエンスを五亜種に区分するようになるのは、1781年の第2版からである。そこで「最も数が大きいと同時にまた古いヨーロッパ的亜種」(99)、「アジア的亜種」(100)、「アフリカに住む人々」(100)、ヨーロッパ人が居住する地域を除いて、「アメリカの他の地域に住む人々」(100)が列挙され、そして「最後に、新たな南方世界が第五の亜種を構成する」(100)とされている。ブルーメンバッハにこの第五の「亜種」の設定を促したのは、キャプテン・クックの第1回航海(1768-71)がもたらした、南太平洋の島々に関する新情報であった。ただ、見られるように、ここでは五亜種を設定してはいるが、まだそれを地域名で呼んでおり、その呼称は確定していない。

ブルーメンバッハは、1795年、体裁を一新して『人間の自然的亜種について』第3版を刊行した。そして本書が、彼のホモ・サピエンスの亜種に関する最終的到達点を示すものとなった。彼は一方であくまで人間はホモ・サピエンス一種であるとし、「どの亜種との間にも、その亜種内部でも無数の例外」(265)が存すると繰り返し指摘する。しかし、他方でこれを前提に皮膚の色、髪、顔つき、頭、顔の各部(額、鼻、歯)あるいは骨格、とりわけ頭骨について詳細な比較を行い、その結果、先に区別していた五亜種を確認して新たに命名を行い、さらにその亜種間の関係を規定した。

「その五亜種は次のように命名して相互に 区別できるであろう、すなわち、コーカサス人、モンゴル人、エチオピア人、アメリカ人、そしてマレー人がそれである。わたしがコーカサス人に最初の位置を与えるのは、以下の諸点から、それが原型だと私には考えられたからである。これが二つの方向に分かれて、その両端に極めて異なった二つの型が位置する。つまり、一方ではエチオピア人、他方ではモンゴル人となる。あとの二つは、原型と両端の中間の位地を占める。コーカサス人とモンゴル人の中間がアメリカ人、コーカサス人とエチオピア人の中間がマレー人である」(264以下)。

ブルーメンバッハが「コーカサス人」を「原型」だと考えた理由は2点あった；

「私がこの亜種の名称をコーカサス山脈から採ったのには二つの理由がある。一つはその近隣、とりわけその南斜面が人間で最も美しい人種、つまりグルジア人を提供するからである。第二には、…この地域のどこかに、最も高い蓋然性をもって人類の祖をおくべきだと思われるからなのである。というのは、まず、その系統が、すでに見てきたようにその頭蓋骨の最も美しい形態を示し、その頭蓋骨から、…他の諸形態、一方にモンゴル人、他方にエチオピア人のそれが分岐するのであり、さらに、それは我々が人間の原初の色と考えている白

い皮膚を持っているのである」(269)。

こうした亜種が生ずる原因として、彼は気候、食料、生活形態を「退化の三大原因」(200)と呼び、なかでも気候は動物に対して「ほとんど無限」(196)の影響力を持つと考えている。

「よく知られているように皮膚の民族的色調はエチオピア人自身にとっても生まれつきのもなのではなくて、誕生後に外部の空気と接することで、つまり胎児が育てられる母親との関係が絶たれたあとで、獲得されるのである」(211)。

このように、皮膚の色を決定するのも、また気候であった。

ここで示した五亜種論こそ、19世紀ヨーロッパにおける人種論の基礎となり、また、様々な変容を含みながらも、今日にもなお一部が引き継がれているものである。だがリンネを中心とする本稿では人種論との関係ではなく、上の引用でも出てきた、彼の「退化」という考え方、およびこれと結びついた「時間」の観念について検討しておきたい。

リンネの四亜種論は、聖書におけるアダムの子孫ノア、そのノアの子孫の地上における拡散の物語が背後にあった。この意味では、聖書的な時間を含んでいるとも言える。しかし、彼の区分を根本で規定していたのはむしろ空間的な意味での「存在の連鎖」であり、その亜種は変化を否定し、地域的相違に基づく固定的な亜種として設定されていた。

これに対しブルーメンバッハの場合は、五種の亜種は時間的・系譜的に位置づけられ、関連づけられている。まず白い肌と「美しい」頭蓋骨を持つ現生人類の祖がアララット山の存するアルメニア近くにあられた(=ノアとその息子たち)。その後、それがゆっくりと二つの方向に「退化」し、中間的な亜種を含む四亜種が生じてきたのであった。

しかもこの人間の変化は、より大きな地球の時間的変化のなかでとらえられている。『自然史論、第1部』(1806)において、彼は化石などが示していることとして、大地の三つの地層を指摘し、その変化をもたらした何回もの「天変地異(Catastrophes)」(318)について述べている。第一は現在と同じ形態の化石を産出する地層で、最近のもの、第二は、古くて現在のものとは異なるものの、何らかの類似も有する化石を産出する地層、第三は、極めて古く未知な化石を含む地層である。その年代は不明であるとしながらも、この最後に挙げた最も古い時代にはアンモナイトその他の現在は絶滅した化石が含まれており、「一つや二つの種ではなく、プレアダム時代の創造でつくられたもの全てが、我々の地球の表面から消えてしまった」(285)と述べている。そしてこの巨大な天変地異の後に新たな創造により現在も生存する動植物が生まれたが、第二の地層の特徴は、ヨーロッパ各地から現在は熱帯に棲息している象やサイ、カバなどの化石が見出されている時代である。これはかつてヨーロッパが暑かったことを示している。またこのような地球史から見れば、「ノアの大洪水が全般的であったということについて、いかなる満足できる考えも形成することができない」(286)として、ノアの大洪水を否定している。そしてこの第二の時代開始以後、「動植物のその祖先種から亜種への退化」(290)によって、現在の亜種に満ちた世界となってきたのである。そしてこの亜種の発生については、

人間のみでなく生物一般についても、「気候、食物、生活様式（生態）」（291）が主要な原因となったと述べている。

「退化」によって生物の多様性を説明しようとしたのは、ビュフォンであった。地層を三分した最初はアルドゥイノであった（1760年）。したがって、このようなブルーメンバッハの地質学的考察や退化の議論は、彼の独創とは言えない。しかし他方、アルドゥイノの三分は、今日「第三紀」という用語が残っていることでもわかるように、近代地質学の一つの出発点であった。ビュフォンも、『地球の諸時期』（1778）で、地球の歴史を75000年として当時の通念、天地創造後約6000年という聖書的時間に挑戦していた。ブルーメンバッハ（1752-1840）は、キュヴィエ（1769-1832）、ラマルク（1744-1829）と同時代、ハーバーのいわゆる「時間革命」<sup>(6)</sup>の開始期を生きた一人でもあった。そのなかで、ブルーメンバッハは「存在の連鎖」を否定し、「プレアダム時代」を含む長大な地球史を視野に入れながら、五亜種の記述を行ったのである。彼の記述は、フーコーの表現を借用すれば、リンネの「表」を時間的な「系列」に置き換えたものに他ならない。こうしてブルーメンバッハもまた、キュヴィエやラマルク同様に、リンネなどの意味における「記述」から19世紀的な「歴史」への転換を担った一人であったとすることができよう。ブルーメンバッハはリンネから出発し、やがて多くの点でリンネを修正した。そして五亜種論に関していえば、その「五」という数値ばかりがリンネの修正として目立つが、また、それは確かに伝統的な重みを持つリンネの「四」に対して「おおいなる革新」<sup>(7)</sup>ではあるけれども、しかし、その背景にあるこの時間的な「系列」化的思考もまた、リンネの「表」的思考に対する根本的修正として、見落としてはならないと考える。

## 2. リンネ著、グメリン編、『自然の体系』第13版（1788-93）

リンネが『自然の体系』第12版を出版したのは1766-67年であった。その当時に既に病気がちであったリンネは、1774年には最初の脳卒中に見舞われた。特に1776年の第2回目の発作以後は急速に衰え、1778年には死を迎えている。リンネはこうしたなかでも第13版への改訂の努力を続けていたが、結局果たせなかった。そこでリンネ亡き後、『自然の体系』第13版の出版を託されたのが、ゲッティンゲン大学のヨハン・フリードリヒ・グメリンであった。グメリンは代々多数の学者を輩出したチュービンゲンのグメリン一族の一人で、ブルーメンバッハよりは4歳年長に当たるが、またブルーメンバッハ同様、若くして早くも優れた博物学者として頭角を現した学者であった。21歳で医学博士となり、1773年、25歳でチュービンゲン大学からゲッティンゲン大学に哲学教授として招聘された。さらに1778年には化学・植物学・鉱物学の教授となっており、まさに西村氏の言うように、「動・植・鉱の三界にわたる情報をまとめ上げるのには、リンネに次いで最適の、そしておそらく最後の博物学者」<sup>(8)</sup>であった。また、彼の活動はブルーメンバッハと同時期であり、活動拠点も同じゲッティンゲン大学であった。しかしグメリンの活動期間は1804年までで、これに対しブルーメンバッハはなお36年間も活動を続けていく。上で見たブルーメンバッハの到達点は、部分的には『自然の体系』第13版の出版後に達成されたものである。

第13版のうち、哺乳類を含む第1巻が出版されたのは1788年であった。表題には過去の『自

然の体系』同様に冒頭に著者名としてリンネの名が掲げられているが、その最後に、「グメリ  
ン編集 (cura Jo. Frid. Gmelin)」という句が添えられている。このように著者をあくまでリンネ  
としていることは、リンネの一部の遺稿をふまえているからというよりは、『自然の体系』が  
「リンネ学派のバイブル」<sup>(8)</sup>の位地を占めており、リンネの名を抜きにしては、それは存在  
し得なかったという理由があろう。だがそれには、本書において行われている第 12 版の改訂  
内容の位置づけにかかわって、もう一つの意味が込められているように思われる。それは、た  
とえ実際にはグメリンが改訂したにしても、著者をリンネとした以上は、形式上、リンネが改  
訂したという意味を持たされるということである。編集者という地位に自ら甘んじることによ  
りグメリンが示したかったこと、それは、グメリンが行った改訂がリンネの名において公示さ  
れるという形式を通じて、いわば「リンネ学派」全体の到達点を示す公式見解として受け取ら  
れるべきだということである。すくなくともこのように受け取られることをグメリンが望んで  
いたという前提のもとに、本書の内容を検討することが必要であろう。

グメリンの改訂は、人間論に関わるものとしては、次の 3 点であり、他は一言一句、第 12  
版のままの記載が行われている。

1. ホモ・サピエンスに関して；

「奇形人」の記述のなかでリンネの「灯心草人」を削除し、代わりに「髭なし人、多くのア  
メリカ人」を挿入した。

2. 穴居人 (ホモ・トログロデュッテス) の記載を全面的に削除した。これに伴って穴居人に  
付されていた「註」も削除されたから、ルシファー (有尾人) もまた削除された。

3. サル属の亜属としての *Simia* の項目を以下のように改訂した。

\* 無尾、古来の *Simiae*

**Troglodytes 種**：無尾、頭が大きく肉付きのよい猿で、背中と肩は毛深く、他の部分は無毛。  
ブルーメンバッハの以下の著述による； *Compend. histor. natur.* 及び、*De generis humani varietate  
nativa.*

インド・サチュルス；トゥルプ (*obserbat. medic. p.284. Tab.XVIII*)、

スコーティンの 1738 年にロンドンで見せ物となったチンパンジーの図。

アンゴラに棲息。・・・

**Satyrus 種**：無尾で、錆色の猿。腕は逆毛が生え、尻は毛で覆われている。

『学術研究の喜び』第 6 巻 (p.68.t.76.f.4.) による。

「森のヒト」；エドワーズ (*av.5.p.6.t.213*)、… (他にビュフォンのポンゴ、カンペルの  
オランウータン、ボントの森のヒト、オランウータン、タイソンの森のヒト、オラン  
ウータン、ビュフォンのジョッコなど)。

ボルネオ島に棲息。

まず第 3 点のほうから見ていくと、第 13 版では第 12 版に比べて大きな改訂が行われている。

第 12 版で「サチュルス」の二つの亜種とされていたチンパンジーとオランウータンがそれぞれ独立した種とされ、チンパンジーにはトログロデュッテス (*trogloodytes*)、オランウータンにはサチュルス (*satyrus*) という種小名が与えられている。この改訂の原因となったのは、上で見たブルーメンバッハであった。「トログロデュッテス」について、ブルーメンバッハの二著、『博物学教程』と『人間の自然的亜種について』がタイプ標本の位置に置かれていることが、その証左である。

改訂の第 2 点も同様である。グメリンが行った最も大きな変化はリンネが最後までその存在を確信していた穴居人（および有尾人）を削除したことであるが、これについても、またその穴居人の種小名をチンパンジーに移していることでも、いずれもブルーメンバッハの主張を採用したものとなっているからである。

しかし、ブルーメンバッハの議論はホモ・サピエンスの諸亜種にも及んでいた。何故、グメリンはブルーメンバッハのその議論を採用しなかったのであろうか。

この問題については、第 13 版の出版時期が関係しているように思われる。第 13 版が出版された 1788 年という年は、ブルーメンバッハについていえば、『人間の自然的亜種について』第 2 版 (1781) までは出版されていたが、その第 3 版 (1795) はまだ出版されていない時期にあたる。彼はその初版では「野生人」について検討しておらず、第 3 版に至ってもまだリンネの定義の一部、「四足」と「毛深い」を否定しただけであった。彼が「野生人」の存在を原理的に明確に否定したのは、上でも見たように、グメリン死後の『自然史論、第 2 部』(1811) になってからであった。また「奇形人」については既にその初版で個別的事例に関してそれを亜種として記載することを否定してはいた。しかし、なお詳しく論じていなかったピグミーや、パタゴニア人を含む巨人一般についてこれを否定したのは、『人間の自然的亜種について』の第 3 版 (1795) においてであった。しかも彼は上でも見たようにヒポクラテスの長頭人は認めていたのであり、「奇形人」の原理的否定という点では、必ずしも明確ではなかった。さらに、最後に、ブルーメンバッハの五亜種論については、第 5 の亜種の存在について第 2 版で既に表明されていたとはいえ、まだ地域が指定されただけで名称が定まっていなかった。これに「マレー人」と命名されるのは、第 3 版になってからである。このように、野生人と奇形人、さらに五亜種論についても、グメリンが第 13 版を出版した当时には、まだブルーメンバッハも明確な結論に達していなかったのである。もちろんグメリン自身の考え方もあろうが、グメリンが第 13 版でなおリンネの野生人と奇形人を削除することなく記載を続け、さらにリンネの第 12 版におけるホモ・サピエンスの記述を穴居人と「髭なしアメリカ人」以外はまったく変えることをしなかったことについては、このようなブルーメンバッハの状況に、その原因の一端を求めることができるであろう。

改訂の第 1 点については、ブルーメンバッハが既に初版でアメリカ人は髭なしなのではなく、髭を抜くという生活習慣を誤解したのだと指摘していた。それなのになぜグメリンは敢えてリンネの「灯心草人」に変えて、わざわざ「髭なし人、多くのアメリカ人」という事例を新たに記載したのであろうか。これについては不明とするしかないが、ただし、次のような発言を思い出ししておくことも、ここでは有益かもしれない。それは、「人間の場合も木と同じで、ナシ

やモミやコナラやアンズが同一の木に由来するものでないように、ひげを生やした白人や、縮れ毛の黒人や、こわばった髪の色人種や、ひげのない人間は、同一の人間に由来するのではない<sup>(9)</sup>という、ボルテールの言葉である。このような言葉や人類多元説の思想を思い起こすなら、「髭なし人」をわざわざホモ・サピエンスの一亜種である野生人のなかに記載したことには、ボルテールに代表されるような人類多元説を否定し、人類が一元的起源を持つ存在であることを明示するという意味があったといえるであろう。そしてこの意味では、ブルーメンバッハの基本的主張、ホモ・サピエンスに亜種は五種類あるとしても、その起源は一つであり、現生の人類はあくまで一属一種であるという主張を、側面から補強する意味も有していたとすることができよう。

リンネの『自然の体系』の初版は、大フォリオ版とはいえたった 11 頁であった。それに対し、グメリンの「編集」したリンネの『自然の体系』第 13 版は、第 1 巻が動物で 7 冊 4120 頁、第 2 巻が植物で 2 冊 1661 頁、第 3 巻が鉱物、1 冊で 476 頁、総頁数 6257 頁という膨大なものとなった。リンネ自身は、『自然の体系』に取り組むに当たって、このように膨大なものになるとは考えてはいなかった。彼が育ったスウェーデンは何度も氷河に覆われて、動植物相が単純であった。このことは、リンネが、動物植物がともに 1 万種を越えることはないと考え、さらにリンネが「性体系」で全世界の植物を分類できると考えた一つの原因としてあげられている。もし、当時ヨーロッパに伝えはじめられていた熱帯植物の多様さを彼が知っていたら、このような単純な体系を着想できなかったかもしれないし、彼が全世界の動植物の記載を一人で完遂できると考えることもなかったかもしれないのである<sup>(10)</sup>。実際、リンネの頑健な身体とたゆまぬ努力をもってしても、増え続ける動植物の種への対応を完結することはついになかなかできなかった。グメリンについてはなおさらである。もはや個人としてこれ以上対応することは不可能であった。『自然の体系』が、この第 13 版をもって終止符を打つことになったのは、けだし当然であった。総頁数から見てもはや独立の書物としては限界をむかえていただけでなく、なお急速に増え続ける動植物の種を、「もはや単独の著作ではとても覆いつくせない」<sup>(8)</sup>状況になっていたからである。グメリン以後、ヨーロッパ世界は学問の専門化、細分化の時代である 19 世紀を迎える。そこでは、「自然の三界をひとりでカバーして研究するようなタイプの学者はすっかり跡を絶ってしまう」<sup>(8)</sup>。『自然の体系』は、こうして、フーコーのいう「古典主義時代」の終焉と符節を合わせて、その終焉を迎えることになった。

## おわりに；穴居人（ホモ・トログロデュッテス）の後裔たち

『自然の体系』第 10 版（1758）で提出されたリンネの人間論は、グメリンとブルーメンバッハの修正を経て、18 世紀末に一つの完結を迎えたといえる。リンネのヒト属に含まれていた第二の種の穴居人（ホモ・トログロデュッテス）は存在そのものが否定され、その名称はチンパンジーの種小名に移行した。またホモ・サピエンスの亜種として記載された野生人、奇形人も亜種であることを否定され、分類学の対象から病理学、あるいは教育学その他の新たな学

問領域に移された。そして人類はホモ・サピエンス一属一種であり、それが示す多様性は5種の「亜種（変異）」として位置づけられた。すなわちホモ・サピエンスの原型となったのがコーカサス人で、そこから二方向の亜種が時間とともに形成される。一方のアメリカ人とモンゴル人、他方のマレー人とエチオピア人である。そして19世紀のヨーロッパではこうした内容を持つ「ホモ・サピエンス」が継承され、「人種論」として展開されていくことになるであろう。

他方、穴居人は分類学の対象ではもはやなくなったが、消滅したわけではなかった。既に見たようにその名称の一部はチンパンジーの種小名として残ったが、それだけでなく、それはイメージの世界で生きのびていくのである。最後にこの点を簡単に見ておくことにしたい。

**チンパンジー** リンネが提案した「階層分類」では、その階層として、界(kingdom)－綱(class)－目(order)－属(genus)－種(species)の五段階しか設定されていなかった。現実にはこの属や種自体が多様性を持っており、そこで既にリンネ自身が亜属や亜種を設定していた。しかしその後の種の増加と研究の発展によって、属よりも上の段階でも、一定のグループにまとめることが必要と認められるようになってきた。その結果、19世紀になると「界」と「綱」の間に「門(植物では division、動物では phylum)」、目と属の間に「科(family)」が新たな階層として認められるようになった。しかしこれで問題が片付いたわけではない。増え続ける種や属、科などを整理するために、科や属などの各階層でも新たな上科、亜科等々といったグループ分けが次々と提案されてくる。しかも今日から見れば同一の種である動植物に対し、何人もの人々によって新たな「発見」として新種名が付けられて発表されることもしばしばあった。また、その際に、リンネの二語式命名法が顧慮されなかったり、命名にナショナリズムまで関係してきて、ますます混乱も増大した。

その混乱の有様にはいる前に、チンパンジーの分類についてだけ、グローヴズによりながら見ておくことにしよう(表-4)<sup>(1)</sup>。

属名 ; *Pan* Oken, 1816

2種からなる ; *Pan troglodytes* Blumenbach, 1775.

*Pan paniscus* Schwartz, 1929.

*Pan troglodytes* には4亜種が認められている ;

*Pan troglodytes troglodytes* Blumenbach, 1775.

*Pan troglodytes verus* Schwartz, 1934.

*Pan troglodytes vellerrosus* Gray, 1862.

*Pan troglodytes schweinfuthii* Giglioli, 1872.

属名の「パン」はドイツの博物学者オーケンによるが、彼はチンパンジーをパン・アフリカヌス(*Pan africanus*, 1816)と命名した。この属名は、ギリシア神話に出てくる牧羊神パンからとったものである。また、長らく一種と考えられてきたチンパンジーに、1929年、第二の種と



してボノボ（ピグミー・チンパンジー）が存在することが認められた。

しかし、ここまでするにはほぼ二世紀間を要した。グローヴズによると、この「パン」以外の属名を記載した例としてリンネとブルーメンバッハの「シミア (*Simia*)」や、ジョフロワ、レッスンなどの *Troglodytes*、他に *Satyrus*、*Anthropopithecus* とする例、さらに、今日ではオランウータンの属名となっている「ポンゴ (*Pongo*)」をチンパンジーの属名としているヘッケル等々、11種の事例があった。チンパンジーは長い間一属一種と考えられていたが、今まで挙げてきたリンネの *Simia satyrus* やブルーメンバッハの *Simia troglodytes*、オーケンの *Pan africanus* のほか、ジョフロワによる *Troglodytes niger* その他 25 もの例が挙げられている。属名でも種小名でも、全く新たな呼称による命名もあれば、リンネの「サチュルス」のようにチンパンジーだけでなくオランウータンにも用いられたものもある。さらに「サチュルス」と「トログロデュッテス」はチンパンジーの種小名に当てられたり、属名に使用されたりしている。それだけではおわらない。「トログロデュッテス」は、さらにゴリラの属名に使われたことすらあった。ゴリラがヨーロッパ世界に紹介されたのは 19 世紀に入ってからであるが、その頭骨をもたらししたサベージの名を取って、イギリスの博物学者オーエンが、1848 年、これに *Troglodytes savagei* という学名を与えている。これと同様なことが、また、オランウータンの場合でも起こっていたのである。

他方、19 世紀は動物・植物すべての分野で新種の発見が激増した時代であり、このような問題は、あらゆる分野で生じていた。こうした事態に対応するため、植物では 1867 年にパリで第一回国際植物学会が開催されて最初の国際命名規約が制定されている。動物に関しても、少し遅れて 1901 年、ベルリンで開催された第五回国際動物会議で最初の国際動物命名規約が制定された。その後規約が何度か改定されて整理が行われ、現在は属名や種名が国際的に定められるようになっている。また、1930 年までのもの、1960 年までのもの、それ以後のもので手続きが異なるものの、学名に問題が生じた場合、国際動物命名法審議会に申し立てを行い、主張が認められれば新たな学名となったり、その学名が廃止されることになっている。チンパンジーとオランウータンの場合は既にリンネ以前から研究が始まっているので、こうしたこともしばしば起こった。しかもその長い研究史を反映して複雑さも半端ではなかったから、混乱も錯綜した状態にあり、收拾にも多くの議論を要したのである。

そこで、その混乱の收拾過程についてだが、まず、オランウータンの学名については結論だけを見ておこう。オランウータンの属名のポンゴ (*Pongo*) は、すぐに見るように 1929 年の国際動物命名法審議会で、シミア (*Simia*) にかえて使用することとなった。ポンゴはビュフォンも使用していた名称であるが、属名としては、フランスの博物学者ラセペードが、1799 年に最初に使用していた。現在はさらに二種が区別されている。グローヴズによるとボルネオ・オランウータンは *Pongo pygmaeus* Linnaeus, 1760、スマトラ・オランウータンは、*Pongo abelii* Lesson, 1827 と記されている。グローヴズ自身はかつては「ヒト形類」をホップウスの論文として扱っていて、種名を *Pongo pygmaeus* Hoppius, 1763 としていた<sup>(2)</sup>。2001 年の著書でこのように種小名 *pygmaeus* をリンネの命名としているのは、ホップウスではなくリンネのものだと判断を変えたことを示している。

チンパンジーの学名の歴史でも、オランウータンの場合同様、1929年の国際動物命名法審議会の決定が、大きな転機になっている。というのはここで、「命名規約のもとで以下の学名を使用し続けては、統一よりむしろより重大な混乱が生起するとの理由から、命名規約一時停止のもと、シミア、シミア・サチュルス、ピテクスという学名は、以後禁止される」と決定されたのである（Opinion 114）<sup>(3)</sup>。規約に基づいたものとはいえ、いわば強権の発動によって、リンネの「シミア・サチュルス」はじめ三種の学名が使用禁止になったのである。

ここに至る議論の発端は、スタイルズとオルレマンによれば<sup>(4)</sup>、1913年にアメリカの動物学者エリオットが行った画期的な整理と方向付けであった<sup>(5)</sup>。彼はチンパンジーの属名にはリンネのシミアではなくオーケンのパン（*Pan*）に、また種小名のほうはオーケンのアフリカヌス（*africanus*,1816）とリンネのサチュルス（1758）に優先権を認め、他に10のシノニムを認めた。そしてオランウータンの属名のほうはラセペードのポンゴ（*Pongo*,1799）を採り、種小名についてはホップイウスのピグマイオスを挙げたが、なお二種からなるかどうかは検討の余地ありとしたのである。しかしこの整理では、彼は膨大な文献にあたりはしたものの、なお重要な研究が見落とされていた。そこで、多くのヨーロッパの動物学者たちから、批判の声があがった。それだけでなく、批判者たちは、1925年、国際動物命名法審議会に命名規約を一時停止のうえシミアその他の学名を認定するよう求めたのである。この要求に対して審議会はアントロピテクスとシミアという二つの学名については禁止を定め、他の学名については、なお議論を続行することになった。

ここまでは、いわばコップの中の嵐、動物学者たちの間での議論だったといえよう。だがそこに突然思わぬ方角からの声が起こり、議論の嵐を取り鎮める役割を果たした。この、いわばエウリピデスの悲劇の「デウス・エクス・マキーナ機械仕掛けの神」の役割を果たしたのが、スタイルズであった。

スタイルズは寄生虫（特に拘虫）研究で著名な動物学者で国際動物命名法審議会の委員も務めていたが、同時にワシントン D.C.の衛生研究所の要職にあり、彼の発言は、この衛生学からの発言であった。まず彼は、1926年、科学雑誌『サイエンス』に「シミア、シミア・サチュルス、ピテクスという名称について」<sup>(6)</sup>という、半頁の簡単な記事を掲載する。それは、まもなく衛生研究所の紀要に掲載される論文と、彼の提案が国際動物命名法審議会に提出されることの予告記事である。彼の主張は、これら三つの名称を「命名規約のもとで以下の学名を使用し続け、それらに命名規約を適用しては、統一よりむしろより重大な混乱が生起するとの理由」から廃絶すべきだということである。それも、急がなければならない。それというのも、名称の混乱の問題はもはや動物学者の領域を遙かに超えて、細菌学、血清学、公衆衛生事業など、人類の生と死に関わる様々な研究において、重大な支障を生じさせているからだという。霊長類の様々な病気が人間に伝染することが知られてきており、そうした動物の研究や、その病気の研究に使用される実験動物などについて、関係する動物自体の名称が混乱している状態を放置しては、今後、人類にとって極めて重大な事態が発生するだろうというのである。これは動物学の世界内で考察や論議を行っていた人々にとっては、まさに青天の霹靂のようにも響いたことであろう。

ここで予告された論文が、先にも言及したスタイルズとオルレマン連名の論文「ヒト、チン

パンジー、オランウータン、バーバリ・エイプの命名について」<sup>(4)</sup> (1927) であった。論文の要旨は上で述べたとおりであるが<sup>(7)</sup>、しかしこの論文の大部分を占めているのはゲスナーの『四足動物』(1551)以後、リンネ、ビュフォン、ブルーメンバッハ、キュヴィエらを経て1925年に至るまで、77名の研究者に関する研究である。年次を追いながらその命名を詳細にリストアップし、さらに彼らによる多様な学名が示す動物がチンパンジーか人間か、あるいはどの種のサルであるかなどの同定を行いながら、命名規約にある優先権の有無を検討している。結果を概観すると、「シミア」は三つの異なる「属」に使用され、「ピテクス」の場合は五つの「属」にわたって、多様に使用されていた。リンネの「シミア・サチュルス」については、まず、『自然の体系』第12版で「シミア」をサル全体の属名としながら、亜属名にもシミアを使用してサチュルス種とシルヴァヌス種(今日のバーバリ・エイプでマカカ属)をこれに含ませ、さらにサチュルス種の亜種としてチンパンジーとオランウータンを記載したことを指摘する。そして、このことにより、「長年にわたった、そして極度の命名の不正確さをもたらすに至った、命名上の混乱が起こった」(14)と述べて、リンネ自身が混乱の一因をつくったとしている。そして混迷状態の現況に鑑み、その最も大きな原因となっているこれら三つの学名の廃棄を、国際動物命名法審議会に提案したのである。

先の国際動物命名法審議会の決定(Opinion 114)に戻ると、そこには委員名としてスタイルズの名が記されている。また、『サイエンス』の文章と一部全く同一の表現が使用されており、さらに説明文中にはこの決定の「前提になった」ものとしてスタイルズとオルレマンによる研究と提言が挙げられていて、この問題で果たした彼の重要な役割が浮き彫りになっている。

さて、しかし、これで問題がすべて決着したわけではなかった。この決定は、上記三つの学名の使用を禁止しただけだったからである。しかもスタイルズらは、オーケンによるチンパンジーの属名「パン」には国際命名規約に照らして優先権が認められないとし、「国際委員会が認めないかぎり」(29)、それを承認することはできないとしていた。また、ブルーメンバッハについても、彼の「シミア・トログロデュッテス(1779年)は(リンネの)シミア・サチュルスの実質的シノニムであると同時に、また(リンネの)1758年のトログロデュッテスの、最初の死産のホノニムである」(20)と述べ、その命名が「1779年から1926年に至る諸文献における混迷の出発点となった」(60)と、厳しく批判していた<sup>(8)</sup>。実際、1956年、国際動物命名法審議会が「パン」の使用を禁止している。この時点では「パン」と「トログロデュッテス」はまだその地位を確立していなかったし、場合によっては消え去る可能性もあったのである。

しかし他方、グローヴズによれば、この決定に抗して「パン及びその命名者と年号の、ほとんど一般的とも言える使用」<sup>(9)</sup>状況が生じていた。またそうした状況を背景に、審議会に「パン」を認めるよう申請も行われた。そこで、こうした問題に最終決着がはかられたのが、1985年であった。この年の国際動物命名法審議会ですれまで議論のあった四つの学名について決定が行われ、ついに、「パン」と「トログロデュッテス」が公認されるに至ったのである(Poinion 1368)<sup>(10)</sup>。ただしこの決定は、1988年に一部修正されている。それは、1985年の決定ではブルーメンバッハのトログロデュッテス記載の年号が1779年となっていたのだが、これを訂正し、本稿で取り上げた『人間の自然的亜種について』(1775)にまで遡らせるという処置がと

られたのである<sup>(11)</sup>。

このようにしてようやくチンパンジーの学名が定まった。それは実質的には 1985 年に確立し、そして現在の名称 (*Pan troglodytes* Blumenbach, 1775) については、『自然の体系』第 10 版からは 230 年、第 12 版からちょうど 200 年後の、1988 年になって確定したということになる。このことがあってから、まだ、20 年しかたっていない。

**イメージの世界における穴居人たち** ギリシアやローマの古典、とりわけプリニウスが伝える穴居人は穴に住み、蛇を食し、またシュウシュウという言葉でしか喋らないにしても、他方ではアフリカの照りつける太陽の下で敏速に走り、象狩りにも巧みで、また宝石や香料などを商品として、交易にも参加している人々であった。リンネの穴居人はこの古代人の伝える穴居人に一つの源を持っているとはいえ、リンネによって新たな性格が付与されている。しかもその新たな性格は、決して明るなものではない。リンネの穴居人は別称を「夜行性人」ともいい、「昼行性人」であるホモ・サピエンスとは対極的な性格が与えられているからである。夜になると食料をさがすが、それは眠っている「昼行性人」の目をかすめて行われる、犯罪行為でもある。しかも彼らは、やがて「昼行性人」から地上の支配権を奪還しようと目論んでもいる、危険な存在である。「夜行性人」は、「昼行性人」を「陽」とすれば「陰」、あるいは「昼行性人」の否定的側面を集約した、いわば陰画的存在として描かれているといえる。

19 世紀のヨーロッパは、このような明らかに古代人とは異なるイメージに、つまりホモ・サピエンスの陰画的存在としての穴居人のイメージに、一定の存在理由を与えていた時代であったといえるだろう。とりわけ「世紀末」に近づき、「文明」の否定的側面が強く意識されるようになるにつれて、リンネの穴居人の姿がしばしば見られるようになったのも不思議ではないと思われる。ここでは丹治愛氏の興味ある記述に依りながら、幾つかの事例を示しておくことにしたい<sup>(12)</sup>。

まず、19 世紀末のヨーロッパで一時大きな影響力を誇ったロンブローゾの犯罪学で、リンネの穴居人のイメージは犯罪者を象徴する言葉としての役割を与えられた。ロンブローゾは、1870 年、ある強盗の頭蓋骨に隔世遺伝の異常を発見したことを契機に、「遺伝学」に基づいた犯罪学を打ち立てた。彼によれば、犯罪者の多くは隔世遺伝によって犯罪者となる運命を背負っており、頭蓋骨や容貌、精神に特徴的欠陥を持って生まれてきたものたちであった。こうした遺伝的欠陥の研究を推進したロンブローゾの犯罪学が 1890 年代までヨーロッパを席卷したが、そこでロンブローゾが犯罪者を規定した言葉、それは、「人間と獣との恐るべき雑種」、あるいは「穴居人、つまり誤って文明の世界にまぎれこんできた生きた化石」というものであった。このような犯罪者と穴居人の組み合わせは、唐突に思われるかもしれない。しかし、上に見たリンネの穴居人のイメージの側から見れば、決して唐突とはいえないであろう。ロンブローゾとリンネとは確かに意外な組み合わせには相違ないが、二人を結びつけていたのはリンネの穴居人のイメージであって、プリニウスの穴居人ではないことは、あきらかであろう。

リンネの穴居人イメージが多様な形で展開されたのは、やはり文学である。そのうち、ロンブローゾ的、または犯罪者としてのイメージを利用しているのは、スティーブソンであった。

彼は『ジーキル博士とハイド氏』において、犯罪者ハイド氏を見た一人物に、「あの男はどうも人間とは思えない！穴居人みたいだといったらいいだろうか」と語らせているのである。

丹治氏はウェルズの『タイム・マシン』<sup>(13)</sup>を世紀末におけるユートピアの解体を示す典型的作品と位置づけておられる。この位置づけにも、また氏の「神を殺した男」ダーヴィン以後のヨーロッパ思想の分析にも、筆者は何もつけ加えることはない。つけ加えるとしたらただ一点、リンネの穴居人イメージを最も効果的に利用したのがウェルズだと考えられるということである。もちろんここでは、「時間旅行家」の第1回目の旅行で登場してくるモーロックを指している。ウェルズ自身は、モーロックについてリンネの穴居人を明示的に引用しているわけではない。「のどから絞り出すようなクークーという声 (cooing sound) をあげていた」(97)とあって、言葉は穴居人の「シュウシュウ音」とは違っている。だが、彼らについては「小さな猿に似た奇妙な動物だった。…全身は濁った白色で、目はグレイを帯びた赤い色だった」(64)と描写されている。さらに、「白い不潔な夜行性の人間」(65)、「白いきつねぎるのような地下人」(71)などとも言われている。モーロックたちは「紀元八十万二千七〇一年」(42)のロンドンで、昼行性人のエロイたちとは別に、地下で生きる「夜行性人」であった。このモーロックたちはいまや生活力を失ったエロイに食料を提供し養っているが、恐るべきことに、それはエロイたちを食料にするためであったとされている。また、エロイは19世紀の支配者である資本家たちの末裔であり、モーロックは被支配者、労働者の子孫たちであるとされている。モーロックとエロイはいずれも現代の人間が退化して形成された「ヒト」ではあるが、しかし、別の種に属する人間たちなのである。そしてこの未来における状況について、彼は「モーロックたちは地上に戻りつつある。すっかり変わって！」(78)と述べている。すなわち19世紀の現実とは逆に、その状況は、いまやモーロックたちが支配権を奪還しつつあるということを示していたのである。リンネの穴居人も、「大地はかれらのために作られたと、またいつか再びかれらがかれの支配者になるだろうと考え、信じて」いた。それが現実になりつつあるのが、紀元80万2701年という時点だったのである。リンネはホモ・サピエンスとホモ・トログロデュッテスをヒト属を構成する二つの種とし、当時の世界に現存しているものとして記述した。ウェルズはこれを、長大な時間の彼方で、19世紀末のホモ・サピエンスが退化した結果実現するものとして、記述したのである。

あと一例を加えたい。それはトールキンの『ホビットの冒険』に登場し、『指輪物語』でも独特の役割を果たしているゴラムである。ゴラムはカワウソに近い姿を与えられているが、もとはトールキンの創造になる「ホビット」族の一人であった。ホビットは身長二フィートくらいと背丈は低い、尖った耳と毛に覆われた特大の足以外は、人間と同じ姿をしているとされている。ゴラムは友人を殺害して姿を隠す魔法の指輪を奪い、このことがもとで洞穴に隠れた生活に入った。そして指輪の魔力で長生きするものの、その長い洞窟生活のなかで、カワウソのような姿に変わってしまったのである。トールキンのゴラムは残念ながら「真っ黒」とされ、この点ではリンネの穴居人とは異なっている。だが、映画では、白い皮膚を持つものとして登場している。そして、彼の特徴の一つは、その話し方である。

とはいえここでいっているのは、自分に対して「愛しいしとよ」と呼びかけて自分自身との

対話の形で独白する、あのしゃべり方ではない。例えば『ホビットの冒険』第5章にはじめてゴラムが登場する場面、主人公フロドがゴラムの住む穴に落ち込んだときに、ゴラムが発する言葉の発音のほうである。その部分を原文で引用すると以下のようなになる。

Suddenly up came Gollum and wispered and hissed :

' Bless us and splash us, my precousss!

I guess it's a choice feast ; at liast a tasty morsel it' d make us, gollum! '

これを瀬田貞二氏は、次のように訳しておられる<sup>(14)</sup>：

そこへいきなりゴクリがきてシューシューという声でむこうからささやきました。

『しゃー！してきだこと！いとしいしとよ。

よりぬきのごちそうかよ。それとも、おいしい一口料理かよ、ゴクリ！』

上の「precousss」の綴りは、間違いなくこの通りに書かれている。この翻訳の日本語の雰囲気でも分かるように、原文では「シューシュー」という音を、意識的に使用しているのである。つまり、この場面で使用された言葉や話しぶりを通して、ゴラム（ゴクリ）がリンネの穴居人同様、典型的な歯擦音（hiss）による話し方をしていることを示しているのである。このようにしてトールキン、とりわけその映画におけるゴラムには、濃厚にリンネの穴居人のイメージが生かされているように思われる。

リンネは、西村氏が言うように「ホモ・サピエンス」という、「人類の文明が存続する限り不滅」<sup>(15)</sup>の学名の発明者となった。チンパンジーの種小名「トログロデュッテス」もまた、同様に人類史が続く限りその命脈を保っていくことであろう。しかしそれだけでなく、リンネが提出した穴居人のイメージもまた、ここでかいま見たように、少なくとも西欧の世界では今後も変わらず人々のイメージを刺激し続け、多様な姿で形象化されていくに相違ないと、筆者には思われるのである<sup>(16)</sup>。

## 註

以下、註記した諸文献からの引用頁数は、紛れのない場合は本文に記載する。

### はじめに、註

- 1) 竹沢泰子「人種概念の包括的理解に向けて」（竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う』人文書院 2005、60頁以下）。
- 2) 多賀谷昭「生物学的概念としての人種」（竹沢泰子編、上掲書、502頁）。
- 3) まず、リンネの著作の日本語訳は下記の四点があるが、人間論に関わるものはない。
  - ・田中芳夫訳『林娜氏植物綱目表』文部省博物館、1872。

- ・島崎三郎訳『自然の体系』（鳥類編）山階鳥類研究所、1982。
- ・遠藤泰彦、高橋直樹、駒井智之訳『自然の体系（初版）』（千葉県立中央博物館編『リンネと博物学』1994）；初版は分類表と表に付した「所見」からなっている。このうち「所見」および両生類に付した注、動物界の表中に記入した「疑問群(Paradoxa)」が訳されているが、分類表そのものは訳されていない。
- ・W. レペニース、L. グスタフソン編、小川さくえ訳『神罰』法政大学出版局、1995。
- ・なお、翻訳ではないが、西村三郎『文明の中の博物学』（紀伊國屋書店、1999）では『自然の体系』の初版、第10版について、リンネの分類の全体像および自然界におけるヒトの位置が手際よく表にまとめられ、説明されている（14-29頁）。

次に、リンネの人間論に関する日本語の論文は、

- ・山中浩司「人間の科学－人類学の誕生－」（大林信治、森田敏照編『科学思想の系譜学』ミネルヴァ書房1994）しか見つからなかった。

他に、翻訳書でリンネの人間論にある程度まとまって触れているものに、以下の二点がある。

- ・ロンダ・シービンガー、小川真理子＋財部香枝訳『女性を弄ぶ博物学』工作舎、1996。
- ・S. J. グールド、「類人猿を披露する」；新妻昭夫訳『フラミンゴの微笑（下）』ハヤカワ文庫、2002、所収）。

このように、リンネの「ホモ・サピエンス」については、意外にもきわめて情報が少ない。そうしたこと一因であろうか、リンネに関する混乱した記述も間々見られる。例えば、馬場優子「人種主義と人種的偏見」には、「リンネは1735年に出版された『自然の体系』において、全ての人間をホモ・サピエンスに含め、皮膚の色を基準にして5大亜種に分類した」（『人類学講座（7）』雄山閣、昭和52、253頁）とあるが、ホモ・サピエンスが記述されるのは第10版（1758）だし、皮膚の色を基準にして区分したのは4亜種である。また、「註1」で参照した竹沢泰子「人種概念の包括的理解に向けて」では、リンネが「初版（一七三五年）では、人類を四種に分類し、…白色ヨーロッパ人は、皮膚が白く、活気にあふれ…云々」（53頁）と記述したとある。しかし「白色ヨーロッパ人」は確かに初版の用語だが、あとでみるように、「皮膚が白く、活気にあふれ云々」などと記述するのは、第10版においてである。

またチンパンジーについても、平嶋義宏『生物学命名法辞典』（平凡社、第3版、1996）では、種小名が「穴居生活者の意」というところまではよいのだが、「1779年にBlumenbachによって命名されたが、当時は、チンパンジーは穴居の原始人と思われたらしい」（157頁）とあって、やはり不正確な記述となっている。

今回大いに参照させてもらった馬場優子、竹沢泰子両氏の優れた論文や辞典にも見られるこうした初版と第10版との混同や不正確さも、日本語での情報の少なさが一つの原因となっていると思われる。

#### 4) リンネに関しては、以下のものを使用した

Carl von Linné, *Systema naturae, sive regna tria naturae systematice proposita per classes, ordines,*

*genera, et species.*

• Editio I. Th. Haak, Leyden 1735.

; Facsimilie of the First Edition with an Introcuention and a First English Translation of the

"Observations" by Dr M. S. Engel- Ledeboer and Dr H. Engel, 1964. 本文には本書の頁数を記載した。

• Editio X. Vol. I-II. Salvius, Stockholm 1758-59.

• Editio XII. Vol I-III. Salvius, Stockholm 1766-68.

• Editio XIII. Curante J. F. Gmelin. Vol. I-III. G. E. Beer, Leipzig 1788-93.

5) グメリンに関しては上の Editio XIII、ブルーメンバッハについては、以下を使用した。

Johann Friedrich Blumenbach, *On the Natural Varieties of Mankinds*, translated and edited from the Latin, German, and French originals, by Thomas Bendyshe, 1969.

本書には *De genesis humani varietate nativa* の初版 (1775)

および第 2 版 (1781)、第 3 版 (1795)、*Beitrag zur Naturgeschichte*, 1. Theil 1806, 2.Theil 1811.

のほか、マルクスのブルーメンバッハ追悼公演が収録されている。本文で記す引用頁数はこの、英語版のものである。

## 第 1 章、註

1) 西村三郎、上掲書、29 頁。

2) ちなみに、四足綱は下記の目一属に分類されている。

1. ヒト形目 (Anthropomorpha) → 3 属 ; ヒト、サル、ナマケモノ

2. 猛獣目 (Ferae) → 1 5 属 ; オオカミ、ライオン、トラ、ネコ、イタチ、有袋動物、カワウソ、セイウチ、アザラシ、ハイエナ、イヌ、ジャコウネコ、モグラ、ハリネズミ、コウモリ

3. ヤマネ目 (Glires) → 6 属 ; ヤマアラシ、リス、ビーバー、ネズミ、ウサギ、地ネズミ

4. 大獣目 (Jumenta) → 4 属 ; ウマ、カバ、ゾウ、イノシシ

5. 畜獣目 (Pecorae) → 5 属 ; ラクダ、シカ、ノロシカ、ヒツジ、ウシ

3) Gunner Broberg, "Homo sapiens : Linnaeus's Classification of Man." In *Linnaeus, The Man and His Work*, Ed. Tore Frängsmyr, Science History Publications / USA, 1994. p.164. グローベリの論文が収められているフレンジスミュール編集になる本書は、現代スウェーデンの科学史研究者の論考を集めた、大変有益なものである。

4) Roy Porter, *The Enlightenment*, 2001. 見市雅俊訳『啓蒙主義』岩波書店、2001、104 頁。

5) Edward Tyson, *Anatomy of a Pygmie*, 1699. タイソンは本書で「ピグミー」と呼んだ今日のチンパンジーを解剖してこれをサルと人間の間置き、より人間に近い特徴を 48 点、よりサルに近い特徴を 34 点リストアップした。

6) Broberg, *op.cit*, p.163.

7) John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, 1690.

大槻春彦訳『人間知性論 (三)』岩波文庫、1976、159-160 頁。



- 8) Arthur O Lovejoy, *The Great Chain of Being*, 1936. 内藤健二訳『存在の大いなる連鎖』晶文社、1975、199頁。
- 9) 西村三郎、上掲書、11頁。
- 10) Stein Linroth, "The two Faces of Linnaeus." In *Linnaeus, The Man and His Work*, Ed. Tore Frängsmyr, Science History Publications / USA, 1994. p.51.
- 11) エーリス・マルメストレム「神罰に関する覚え書きの成立と出典および特質」（上掲『神罰』所収）、34頁。なお48頁も参照。
- 12) ラルス・グスタフソン「哲学的観点から見たカール・フォン・リンネと『神罰』」（『神罰』所収）、314頁。
- 13) 岩井淳『千年王国を夢見た革命』講談社選書メチエ、1995。
- 14) Margaret C. Jacob, *The Newtonians and the English Revolution 1689-1720*, 1976. マーガレット・ジェイコブ、中島秀人訳『ニュートン主義者とイギリス革命』学術書房、1990。
- 15) Tore Frängsmyr (ed.), *Linnaeus, The Man and His Work*, Science History Publications / USA, 1994. p. xi.

## 第2章、註

- 1) Broberg, *op. cit.* p.171ff.
- 2) シービンガー、上掲書、56頁。
- 3) Broberg, *op. cit.* p.172f.
- 4) *ibid.* p. 176.
- 5) Stephan Jay Gould, *Ever since Darwin*, 1977. 浦本昌紀・寺田鴻訳『ダーウィン以来』ハヤカワ文庫、1995、377頁。なおグールドは、*Hen's Teeth and Horse's Toes*, 1983. 渡辺正隆/三中信宏訳『ニワトリの歯（下）』（ハヤカワ文庫、1997）の第18章「本来のヒトの位置」でも、同様な議論を行っている。
- 6) 「少なくとも十八世紀の後半に至るまでそれはオランウータンや未開人と並んで、『自然人』をめぐる一連の議論、人間と動物、知識の生得性と後天性、自然と文明に関する激しい論争の渦中にあった」（山中浩司、上掲論文、114頁以下）。
- 7) John C. Greene, *The Death of Adam*, Iowa State University Press / Ames, 1996 (1.st ed. 1959) . p. 202.
- 8) J-J. Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondementes de l'inégalité parmi les hommes*, 1755. 本田喜代治・平岡昇訳『人間不平等起源論』岩波文庫、1997、136頁。
- 9) August Ludwig Schlözer, *WeltGeschichte*, Göttingen, 1785. S. 59.
- 10) Broberg, *op. cit.* p.177.
- 11) 寺田和夫、「人種の分類と分布」（『人類学講座（7）』雄山閣、昭和52）、147頁。なお、神は緑と白で示される。
- 12) 馬場優子、上掲論文、248頁。
- 13) ヒポクラテス、小川政泰訳『古い医術について』岩波文庫、昭和38。
- 14) アリストテレス、島崎三郎訳『動物発生論』（『アリストテレス全集9』岩波書店、1969）。
- 15) アリストテレス、島崎三郎訳『動物部分論』（『アリストテレス全集8』岩波書店、1969）。

- 16) アリストテレス、山本光雄訳『政治学』（『アリストテレス全集 15』岩波書店、1969）。
- 17) プリニウス、中野定雄・中野里美・中野美代訳『プリニウスの博物誌 I、II、III』雄山閣、2001（初版は1986）。
- 18) アウグスティヌス、服部英次郎・藤本雄三訳『神の国（四）』岩波文庫、1986。
- 19) 荒俣宏『凶鑑の博物誌』リプロポート、1984、84頁。
- 20) 竹沢泰子、上掲論文、53頁。
- 21) ライプニッツはエチオピア人とラップランド人を南北両極に置き、その中間の東にモンゴル人、西にヨーロッパ人を置いた。  
ビュフォンはラップ人、タルタル人、南アジア人、ヨーロッパ人、エチオピア人、アメリカ人に区別した（Blumenbach, *op. cit.* p.267）。
- 22) シービンガー、上掲書、138頁。
- 23) 表-2で、「エプロン」と訳した部分の原語は *sinus pudoris* で、「下帯」、「恥帳」、「隠しひだ」等々様々に訳された、ホッテントットの間で見られた長く引き延ばされた小陰唇を指す言葉である。  
また穴居人への註にある「ホッテントットのエプロン」の原語は *Nymphae Caffrae*（カフィール＝バンツ人の子陰唇、カフラリアは現南アフリカ共和国東部地域の地名）であるが、これも同一の意味を持つ。最終的には「ホッテントットのエプロン」として定着したので、この訳語を当てることにした（シービンガー、上掲書、184頁参照）。  
また、情報源は不明だが、シービンガーによれば「ホッテントットの女性たちは、…穴居人そっくりのホッテントットの男性たちと淫らに雑居しているといわれていた」（同、181）とあり、ホッテントットが他の面でも穴居人と類似の存在とする情報があったようである。
- 24) Mychel E. de Montaigne, *Les Essais de Michel de Montaigne*, 3 vol.1588.  
原二郎訳『エッセー』岩波文庫、昭和41、五-237頁。
- 25) ヘロドトス、松平千秋訳『歴史（中）』岩波文庫、昭和50年、IV-183（104頁）。なお、この文章に付された註には、「おそらく現在もいるティブー族の祖先を指すのであろうという。彼らはいまでもなお一部は穴居しており俊足で、その言語はシュシュといった音が多いという」とある（同、308頁）。
- 26) 中野定雄他による上掲訳書では「キイキイ」とあるが原語の *stridor* には「シュッシュという音」、「きしる音」などの意味があり、リンネはこの前者の意味を採用しているのである。
- 27) Robert M. Yerkes, Ada W. Yerkes, *The Great Apes*, New Haven, Yale University Press, 1953 (1st, 1929), p. 12.
- 28) Olav Röhrer-Ertl, “*Resarch History, Nomenclature, and Taxonomy of the Orang-Utan.*”  
In *Orang-Utang*, Ed. Jeffrey H. Schwarz, Oxford University Press, 1988. p.8.
- 29) Broberg, *op. cit.* p.184f.
- 30) Yerkes, *op. cit.* p.11による。なお、プリニウスは下記のように記述している。「インドの東部（カタルクディ地区と呼ばれている）の山の中には、サチュルスがいるが、それは非常

に敏捷な動物であってときには四つ足で歩き、ときには人類同様まっすぐに突立って走る。その速度が速いので、つかまるのは老いたものか、病気のものだけである。」(I-300)

- 31) ペレールに関して、詳しくは、拙著『キリスト教的世界史から科学的世界史へ』(勁草書房、2000)、52-54頁を参照されたい。
- 32) Tore Frängsmyr, “*Linnaeus as a Geologist.*” In *Linnaeus, The Man and His Work*, Ed. Tore Frängsmyr, Science History Publications / USA, 1994. p. 151.
- 33) Wilfrid Blunt, *Linnaeus : The Compleat Naturalist*, Frances Lincoln, 2001.p.221. ちなみに、ゲーテのほうは『植物哲学』が出版された1751年はまだ2歳だったが、イタリア旅行にこれを携えていった。そのブレンナー宛の手紙で、「私はリンネを携えてきている。そして彼の命名法は私の心に強固に刻印を印している」と述べている。また、1816年11月7日のツェルター宛の手紙で、「私が彼に学んだことは植物学だけではない。無限に多くのことだ。シェイクスピアとスピノザを除けば、故人で、私にこんなに影響を及ぼした人は他にいない」と書いている。
- 34) Michel Foucault, *Les mots et les choses*, 1966. 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物』新潮社1974。
- 35) 内田隆三『ミシェル・フーコー』講談社現代新書、1990、87頁。
- 36) 「体系と方法とは同一の認識論的台座のうえに立っている。それを一言で定義するには、古典主義時代の知において、経験的個体の認識は、可能なかぎりのあらゆる相違性を通覧させる、連続的で整然たる普遍的な表のうえでしか獲得されなかったといえよクプローい」(167)。
- 37) ラヴジョイ、上掲書、212、248頁。
- 38) 上掲、『フラミンゴの微笑(下)』、39-40頁。
- 39) Stephan Jey Gould, *The Panda's Thumb*, 1980. 櫻町翠軒訳『パンダの親指(下)』ハヤカワ文庫、1996、79頁。
- 40) Gunnar Eriksson, “*Linnaeus the Botanist.*” In *Linnaeus, The Man and His Work*, Ed. Tore Frängsmyr, Science History Publications / USA, 1994. p. 151.

### 第3章、註

- 1) Christianus Emmanuel Hoppius, *Anthropomorpha*, 1760.
- 2) Linnaeus (ed.) *Ameonitatis academicae, seu dissertationes variae physicae, medicae, botanicae, antehac seorsim editae nunc collectae et auctae cum tabulis aeneis*. Vol. VI. 1763.
- 3) リンネの手紙によると、現在は失われている「穴居人」と題した別のヴァージョンもあったという (Broberg, op. cit. p. 179、註62)。
- 4) Heinz Goerke, *Carl von Linné*, 1989. ハイイツ・ゲールケ、梶田昭訳『リンネ』博品社、1994、145頁。

なお、『学術研究のよろこび』に関する次の説明文参照；「リンネはウプサラ大学の教授に在籍中、186名の弟子たちに学位を与えたといわれます。これらの学位論文はその当時の慣習に従って、リンネ自身が執筆したものであるといわれています」(千葉県立中央

博物館編『リンネと博物学』1994、165頁)。

- 5) Olav Röhrer-Ertl, *op. cit.* p.11.
- 6) リンネの手紙から (Broberg, *op. cit.* p.182.)。
- 7) Blunt, *op. cit.* p.153.

#### 第4章、註

- 1) 以下、本文に記す引用頁数は、「はじめに」の註5に記載のものから。
- 2) リンネ、ホッピウス、ブルーメンバッハの命名の関係を示すと、下のようになる。

	Linnaeus	Hoppius	Blumenbach
穴居人 ;	<i>Homo troglodytes</i>	<i>Homo troglodyta</i>	×
Orang-utan ;	<i>Simia satyrus satyrus</i>	<i>Sima pygmaeus</i>	<i>Simia satyrus</i>
Chimpanzee ;	<i>Simia satyrus indicus</i>	<i>Simia satyrus</i>	<i>Sima troglodytes</i>

- 3) Broberg, *op. cit.* p.188.による。ボルテールとモーペルチュイの以下の論文は、筆者未見である。  
Voltaire, *Reration touchant un naure blanc*, 1745.  
Mauvertuis, *Venus Physique*, 1746.
- 4) Broberg, *op. cit.* p.186.
- 5) ブルーメンバッハは、『自然史試論第1部』で、「漸移性を体系的類似に基づく、階段や鎖のイメージ」でとらえることをこの概念の「誤用」であり「自然そのものにいかなる現実的基礎を持たない」と批判している (Blumenbach, *op. cit.* p.317)。
- 6) Francis C. Haber, *The Age of the World, Moses to Darwin*, Baltimore, 1959. p.9.
- 7) シービンガー、上掲書、138頁。
- 8) 西村三郎『リンネとその使徒たち』人文書院 1989、297-298頁。
- 9) Voltaire, *Traité de métaphysique*, 1734. ビュフォン、菅谷暁訳『自然の諸時期』法政大学出版局、1994、における菅谷氏の註記による (307頁)。
- 10) 松永俊男『博物学の欲望』講談社現代新書 1992、30-32頁。

#### おわりに、註

- 1) Colin Groves, *Primate Taxonomy*, Smisionian Institution Press • Washington and London 2001, pp.289-309.

表-4は現代における一例として本書から作成した。ただしこのうち、ナミ・チンパンジーに関する「Blumenbach,1775」の部分のみは、その記述が「Blumenbach,1799」となっていたものを誤記と判断し、訂正してある。「誤記」と判断したのは、後に見る、ブルーメンバッハについて行われた国際的な議論にはオーストラリアからグローヴズ自身も参加しており、彼が知らないはずはないと考えたからである。

- 2) Colin P. Groves, “*Pongo pygmaeus*.” In *Mammalian Species*, published by the American Society of Mammalogists, 1969. p. 1.

なお、表記されている年号 1763 年はホップウスの論文が公刊された年号であるが、現在では、その前にアカデミーで発表されていることが指摘されて、1760 年と修正されている。

- 3) *Opinions rendered by the International Commission on Zoological nomenclature* : Opinions 105 to 114. --the Inst., 1929. -- (Smithsonian miscellaneous Collection : Vol.73. No.6).
- 4) Ch. Wardell Stiles and Mabelle B. Orleman, “*The Nomenclature of Man, the Chimpanzee, the Orang-utan, and the Barbary Ape.*” In *Hygienic Laboratory Bulletin*, No.145 (1927) : pp.1-66.
- 5) D.G.Elliot, *A Review of the Primates*, Amer. Mus. Nat. Hist., New York 3vols, 1913.
- 6) C.W. Stiles, “*The Names Simia, S.Satyurus and Pithecus.*” In *Science*, August 6, 1926 (Vol. LXIV, No.1649)
- 7) スタイルズが『サイエンス』で行ったこの論文の要約は、以下のとおりである。

「1.一定の属の動物への命名が、伝染病の研究との関連における霊長類の重要さ故に、一般の動物学者や専門の哺乳類学者にとっての重要性などといった段階をはるかに超えた、重大な状況にあること、

2.人類の生と死の問題に関わる研究で利用される実験動物に対し国際的に明確な学名が使用されることは、極めて重要なことであること、

3. *Simia*, *Simia satyurus*, *Pithecus* という名称は動物学の諸文献においてあまりにも混乱しており、動物学、細菌学、血清学、公衆衛生事業においてその使用の合理的一致への希望をもてないこと、最も安全な解決策は、これらの名称をすべて禁止することであること、

4.国際動物命名委員会が明確で適切な代案を選定すべきこと」(p.138)。

- 8) 引用文で “Blumenbach 1779” とあるのは、スタイルズらがブルーメンバッハの著作、『博物学教程 (*Handbuch der Naturgeschichte*)』(1779) を検討の対象としていたからである。彼らは本稿で検討したブルーメンバッハの『人間の自然的亜種について』(1775) を検討していない。

なお、スタイルズらは、「ヒト形類」についてはホップウスの著作として扱っている。

- 9) Groves, 2001, p.303.

- 10) *The Bulletin of Zoological Nomenclature*, Vol.42 Part4, 1985.

ここで認定されたのは以下の学名であった；

*Pan* Oken, 1816, *Lehrbuch der Naturgeschichte*, vol.3 (Zoologie), p.1230.

*Panthera* Oken, 1816, *Lehrbuch der Naturgeschichte*, vol.3 (Zoologie), p.1052.

*pardus*, *Felis*, Linnaeus, 1758, *Systema Naturae*, ed. 10, p.41-42.

*troglydytes*, *Simia*, Blumenbach, 1779, *Handbuch der Naturgeschichte*, p.65.

- 10) *The Bulletin of Zoological Nomenclature*, Vol.45, Part 4, 1988, p.304.

- 12) 丹治愛『神を殺した男』講談社メチエ、1994、

とりわけ第2章全体、及び133-138頁を参照。

- 13) H.G.Wells, *The Time Machine*, 1895. 橋本楨矩訳『タイム・マシン』岩波文庫1991。
- 14) J.R.R. Tolkien, *The Hobbit or There and Back Again*, 1937.  
瀬田貞二訳『ホビットの冒険』岩波少年文庫、1979、上巻146頁。
- 15) 西村三郎(1999)、16頁。
- 16) 本稿の執筆に当たり、国立科学博物館動物研究部の川田伸一郎氏には初歩的な質問への懇切な回答や文献の紹介など、大変お世話になった。氏のご援助がなかったら、本稿はいつまでも未完のままであったろう。また、リンネの『自然の体系』諸版の翻訳に当たっては、畏友井上靖夫共立大学教授に種々教えていただいた。もちろん誤訳などについては筆者に全面的責任があることは言うまでもない。ここに記して、両氏に感謝の意を表しておきたい。

付記 本論文は『埼玉大学紀要 教養学部 第41巻(第2号)』(2006年)に発表したものである。本文、註とも、内容については2007年7月現在で気がついた誤植を訂正したが、他は一切手を加えていない。しかし体裁については二段組を変更し、表・図版の位置も変えざるを得なかった。従って、頁数も、紀要のそれとは異なっている。

表-1. リンネ『自然の体系』(1735)における「ヒト形目(Anthropomorpha)」の分類

第一綱 - 四足綱 ; 毛深い身体、四足、雌は胎生で乳房を持つ			
目 (ordo)	属 (genus)	定義	種 (species)
ヒト形目 (Anthropomorpha) 左右に四本づつの門歯 または 門歯を欠く	ヒト (Homo)	汝自身を知れ (nosce te ipsum)	白色ヨーロッパ人 (H. Europaeus albese) 赤色アメリカ人 (H. Amerikanus rubese) 暗色アジア人 (H. Asiaticus fuscus) 黒色アフリカ人 (H. Africanus nigr)
	サル (Simia)	前足 後足 指 5。 5。 後足が前足に類似	エイプ(無尾猿)、 サチュルス ヒヒ、オナガザル、 黄色ヒヒ
		ナマケモノ (Bradypus)	指 3または2。 3。

表一 2 リンネ『自然の体系』第10版(1758)におけるホモ・サピエンスの位置

一、動物を六つの綱に分類

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1. 哺乳綱 (Mammalia) | 4. 魚綱 (Pisces)   |
| 2. 鳥綱 (Aves)      | 5. 昆虫綱 (Insecta) |
| 3. 両生綱 (Amphibia) | 6. 蠕虫綱 (Vermes)  |

二、哺乳綱を八つの目に分類

- |                     |                         |
|---------------------|-------------------------|
| 1. 霊長目 (Primates) ; | 1. ヒト属 (Homo)           |
|                     | 2. サル属 (Simia)          |
|                     | 3. キツネザル属 (Lemur)       |
|                     | 4. コウモリ属 (Vespertilio)  |
| 2. 鈍重目 (Bruta)      | 5. ズウ属 (Elephas)        |
|                     | 6. マナティ属 (Trichechus)   |
|                     | 7. ナマケモノ属 (Bradypus)    |
|                     | 8. アリクイ属 (Myrmecophaga) |
|                     | .....                   |
| 3. 猛獣目 (Ferae)      |                         |
| 4. 吻獣目 (Bestiae)    |                         |
| 5. ヤマネ目 (Glires)    |                         |
| 6. 畜獣目 (Pecora)     |                         |
| 7. 蹄獣目 (Belluae)    |                         |
| 8. クジラ目 (Cete) ;    | .....                   |
|                     | 39. イルカ属 (Delphinus)    |

三、霊長目の分類

I. 霊長目 (Primates) ; 類似の門歯が上顎に四本。乳首が胸に二。

1. ヒト属 (Homo) ; 汝自身を知れ

サピエンス (Sapiens) 種 1. 昼行性人 (*Homo diurnus*) ; 文化的、地域的に多様。

野生人 (*Ferus*) ; 四つ足、口がきけず、毛深い。

- ・リトアニアの熊少年、1661年。
- ・ヘッセンのオオカミ少年、1344年。
- ・ヒベルニアのヒツジ少年。
- ・ハノーバーの少年。
- ・ピレネーの子供たち、1719年。
- ・レオディケアのヨハネス。

アメリカ人 (Americanus) α. 赤色、胆汁質 (cholericus 怒りっぽい) で、筋肉は真っ直ぐ。髪；黒く、真っ直ぐで、太い。小鼻；広がっている。容貌；そばかすだらけ。顎；まったく髭なし。忍耐強く、快活、自由。自身を巧みな赤い腺で装う。慣習によって支配される。

ヨーロッパ人 (Europaeus) β. 白色、多血質 (sanguineus 楽観的) で、肉付きがよい。髪；金髪で長い。眼；青。軽快で、才知があり、創造的。ぴったりとした服装で装う。典礼によって支配される。

アジア人 (Asiaticus) γ. うす黄色、黒胆汁質 (melancholicus 陰鬱) で、しゃちこぼっている。髪；黒毛。眼；黒。厳格、高慢で、食欲。緩やかな服装で装う。意見によって支配される。

アフリカ人 (Afer) δ. 黒色、粘液質 (phlegmaticus 遅鈍) で、筋肉はしまりがない。髪；黒く、よじれている。皮膚；絹のように滑らか。鼻；低い。両唇；膨れている。女性には「エプロン」があり、乳房からは豊富な乳が出る。狡猾、鈍く、無頓着。身体に油を塗って装う。移り気によって支配される。

奇形人 (Monstrosus) ε. 土地 (a)、人為 (b,c) による。  
 a. アルプス人。小さく、敏捷で、臆病。  
 パタゴニア人。巨大で、鈍重。  
 b. 単睾丸人。より少産になるために；ホッテントット。  
 灯心草人。娘たちの腰が細くされる；ヨーロッパ人。

- c. 大頭人。円錐形の頭；中国人。  
平頭人。前部を圧縮された頭；カナダ人。

身体；直立、無毛、・・・(以下、髪、頭から足に至る、人間の分類学的特徴の記述；省略)・・・・・・

## 穴居人 (Troglodytes) 種 2. 夜行性人 (*Homo nocturnus*) (註)

「森のヒト (*Homo sylvestris*) またはオランウータン」；ポント (iav.84.t.84)。  
「カクルラッコ (Kakurlacko)」；ヒューピング (itin.c.86)、ダリン (orat.5.)。  
居住地；エチオピアの隣接地域 (プリニウス)、およびジャワ、アンボイナ、  
テルナーテの穴に居住する。

身体は白色で、直立して歩き、背丈は我々の半分より低い。髪は白く、よじれている。両眼は円く、虹彩と瞳は金色である。上まぶたが瞬膜と一緒に動いてまばたく。視覚は斜視で、夜行性。寿命は 25 年である。昼は目が見えず隠れており、夜になると見えるようになって出かけ、荒らし回る。歯擦音(シューシュー音)で話す。旅行者の伝えるところを信ずるなら、彼らは、大地は彼らのために作られたと、またいつか再び彼らとその支配者になるだろうと考え、信じている。

(註)

トログロデュッテスとヒト属との関係；トログロデュッテス属をヒト属から切り離して設定することは、他の属の場合とは一貫性を有しない恣意的な特徴の取り上げ方をしない限りは、いかにあらゆる注意を注いでもできなかった。犬歯も他の歯から殆ど離れていない。サル属にはないホッテントットのエプロンがあることも、これをサル属に引き戻すことを許さない。それでも人々は、「サル族のなかにも様々なサルたちがいなければならない」(アポロドーロス) という理由から、自然的な尺度でヒト属から穴居人を切り離してサル属に帰属させる何らかの特徴が存在するかどうか、解剖学に答えを求めている。

ホモ・サピエンス種との相違；ホモ・サピエンスから極めて異なっている穴居人種が我々の家門や血族でもないことは、たとえ身長があまりかわらないとしても疑いがなく、ホモ・サピエンスの変異だとも信じてはならない。なぜなら、瞬膜の存在だけでも、そのことを絶対的に否定しているのだから。

アフリカ人との関係；アフリカ人でよじれた、しかも驚いたことに白い髪を持つものがいたとしても、それでも、植物や、家禽の雛における変異の事例も集めて比較してみて、わたしは、白いモーロ人の誰かが、黒いモーロ人からでたとは判断しなかった。

プレアダム人との関係；ホモ・サピエンスは創造者の最後の被造物ではあるが、私は、プレアダム人をプリニウスの穴居人であるとは言わなかった。

毛深い有尾人 (*Homo caudatus hirsutus*) について；モーペルチュイ (epiB.7.)、ヒューピング (it.79.)、ポント (jav.85.)、アルドロヴァンディ (digit.249?) の記載による。南極地域の住民で、我々には実見されていない。そのため、ヒト属、あるいはサル属のいずれに帰属するかを決定しない。旅行家たちの証言では生のものでむさぼり食らうとはいえ、驚くべきことにそれは火を起し、肉を焼く。

## 2. サル属 (*Simia*)；近似する門歯が四本。犬歯は独立し、長く、離れている。臼歯は鈍頭。

### \*無尾；古来の *Simiae*

Satyrus 1. 無尾猿。下腹部は無毛。

『自然の体系』第 6 版 (p.3) およびトゥルプの「インド・サチュルス (*Satyrus indicus*)」(obs. III.c.56)。

棲息地；アフリカとアジア。

6 歳の子供の背丈。背中に黒い毛。下半身前部全面無毛。

Sylvanus 2；・・・(今日の *Macaca sylvanus* = Barbary ape)。

### \*\*短尾；*Papiones*

Sphinx 3；*Papio*, *Baboon*

*Apedia* 4

### \*\*\*長尾；*Cercopithecii*

・・・・・・

*Syrichta* 21

## 3. キツネザル属 (*Lemur*)

## 4. コウモリ属 (*Vespertilio*)



表一 3 リンネ『自然の体系』第 1 2 版 (1766) におけるホモ・サピエンスの位置  
 ※ 第 1 0 版からの改訂部分を斜体太字で示した

I. 霊長目 (Primates); 類似の **鋭い** 門歯が上顎に四本。乳首が胸に二。

1. ヒト属 (Homo); **汝自身を知れ**

サピエンス (Sapiens) 種 1. 昼行性人 (Homo diurnus); 文化的、地域的に多様。

野生人 (Ferus); 四つ足、口がきけず、毛深い。

- ・リトアニアの熊少年、1661 年。
- ・ヘッセンのオオカミ少年、1344 年。
- ・ヒベルニアのヒツジ少年。
- ・**カメラリウスの伝える、バンベルクの牛少年。**
- ・ハノーバーの少年。
- ・ピレネーの子供たち、1719 年。
- ・**トランシスラーナの少女たち、1717 年。**
- ・**ジャンパーニュの少女たち、1731 年。**
- ・レオディケアのヨハネス。

アメリカ人 (Americanus) α. 赤色、胆汁質 (cholericus 怒りっぽい) で、筋肉は真っ直ぐ。髪; 黒く、真っ直ぐで、太い。小鼻; 広がっている。容貌; そばかすだらけ。顎; まったく髭なし。

忍耐強く、**満足し**、自由。自身を巧みな赤い腺で装う。慣習によって支配される。

ヨーロッパ人 (Europaeus) β. 白色、多血質 (sanguineus 楽観的) で、肉付きがよい。髪; 金髪で長い。眼; 青。軽快で、**機知に富み**、創造的。ぴったりとした服装で装う。典礼によって支配される。

アジア人 (Asiaticus) γ. うす黄色、黒胆汁質 (melancholicus 陰鬱) で、しゃちこぼっている。髪; 黒毛。眼; 黒。厳格、高慢で、食欲。緩やかな服装で装う。意見によって支配される。

アフリカ人 (Afer) δ. 黒色、粘液質 (phlegmaticus 遅鈍) で、筋肉はしまりがない。髪; 黒く、よじれている。皮膚; 絹のように滑らか。鼻; 低い。両唇; 膨れている。女性には「エプロン」があり、乳房からは豊富な乳が出る。狡猾、鈍く、無頓着。身体に油を塗って装う。移り気によって支配される。

奇形人 (Monstrosus) ε. 土地 (a)、人為 (b,c) により、**変異**。

- a. アルプス人。小さく、敏捷で、臆病。パタゴニア人。巨大で、鈍重。
- b. 単睾丸人。より少産になるために; ホッテントット。灯心草人。娘たちの腰が細くされる; ヨーロッパ人。
- c. 大頭人。円錐形の頭; 中国人。平頭人。前部を圧縮された頭; カナダ人。

身体; 直立、無毛、・・・(以下、髪、頭から足に至る、人間の分類学的特徴の記述; 省略) ・・・

穴居人 (Troglydtes) 種 2. *Homo nocturnus* (夜行性人) (註)

『**学術研究のよろこび**』第 6 巻 (p72,76. f. 1.)。

「森のヒト (*Homo sylvestris*) またはオランウータン; ボント (jav.84.T.84)。「カクルラッコ (*Kakurlacko*)»; ヒューピング (itin.c.86)、ダリン (orat.5.)。居住地; エチオピアの隣接地域 (プリニウス)、およびジャワ、アンボイナ、テルナーテの穴、**マラッカのオフィル山** に居住する。

身体は白色で、直立して歩き、背丈は我々の半分より低い。髪は白く、よじれている。両眼は円く、虹彩と瞳は金色である。上まぶたが瞬膜と一緒に動いてまばたく。視覚は斜視で、夜行性。**直立すると手の指が膝に届く**。寿命は 25 年である。昼は目が見えず隠れており、夜になると見えるようになって

出かけ、荒らし回る。歯擦音(シューシュー音)で話す。もしも多くの旅行者の伝えるところを信ずるなら、彼らは、大地は彼らのために作られたと、またいつか再び彼らとその支配者になるだろうと考え、**推測し**、信じている。**より詳細に解剖学的に観察すると雌のクリトリスと小陰唇が覆われているが、これはヒト属をサル属から区別する特徴である。**

(註)

**トログロデュッテスとヒト属との関係**；トログロデュッテス属をヒト属から切り離して設定することは、他の属の場合とは一貫性を有しない恣意的な特徴の取り上げ方をしない限りは、いかにあらゆる注意を注いでもできなかった。犬歯も他の歯から殆ど離れていない。サル属にはないホッテントットのエブロンがこれにあることも、これをサル属に引き戻すことを許さない。それでも人々は、「サル族のなかにも様々なサルたちがいなければならない」(アポロドーロス)という理由から、自然的な尺度でヒト属から穴居人を切り離してサル属に帰属させる何らかの特徴が存在するかどうか、解剖学に答えを求めている。

**ホモ・サピエンス種との相違**；ホモ・サピエンスから極めて異なっている穴居人種が我々の家門や血族でもないことは、たとえ身長があまりかわらないとしても疑いがなく、ホモ・サピエンスの変異だとも信じてはならない。なぜなら、瞬膜の存在と**手の長さ**だけでも、そのことを絶対的に否定しているのだから。

**アフリカ人との関係**；アフリカ人によじれた、しかも驚いたことに白い髪を持つものがいたとしても、それでも、植物や、**系統の不確かな動物**における変異の事例も集めて比較してみても、わたしは、白いモーロ人の誰かが、黒いモーロ人からでたと判断しなかった。

**プレアダム人との関係**；ホモ・サピエンスは創造者の最後の被造物ではあるが、私は、プレアダム人を**暗闇の娘**であるとは言わなかった。

**ルシファー、ホモ・カウダトゥス (Lucifer, Homo caudatus) について**；

『**学術研究のよろこび**』第6巻 (p.70.t.76.f.2.)、モーペルチュイ (epiβ.7.)、ヒューピング (it.79.)、ボント (jav.85.)、アルドロヴァンディ (digit.249?)、**グスナー (quadr.859)**の記載による。南極地域の住民で、我々には実見されていない。そのため、ヒト属、あるいはサル属のいずれに帰属するかを決定しない。旅行家たちの証言では生のものでむさぼり食らうとはいえ、驚くべきことにそれは火を起こし、肉を焼く。

2. **サル属 (Simia)**；近似する門歯が**上・下顎**に各4本。犬歯は独立し、長く、離れている。臼歯は鈍頭。

\*無尾；古来の Simiae

サチュルス 1 (Satyrus)；

(α) **錆色の無尾猿、豊かな逆立った毛髪、覆われた尻。**

『**学術研究の喜び**』第6巻 (p.68,76. f. 4.) およびエドワーズの「森のヒト」(Homo sylvestris, av.5.p.6.t.213)。

β **インド・サチュルス (Satyrus indicus)**

トウルプ (obs.3.c.56.)の記述、およびスコートンによる1738年のロンドンのチンパンジーの図・・・。

Sylvanus 2 ..... (今日の Macaca sylvanus = Barbary ape)。

Innus 3

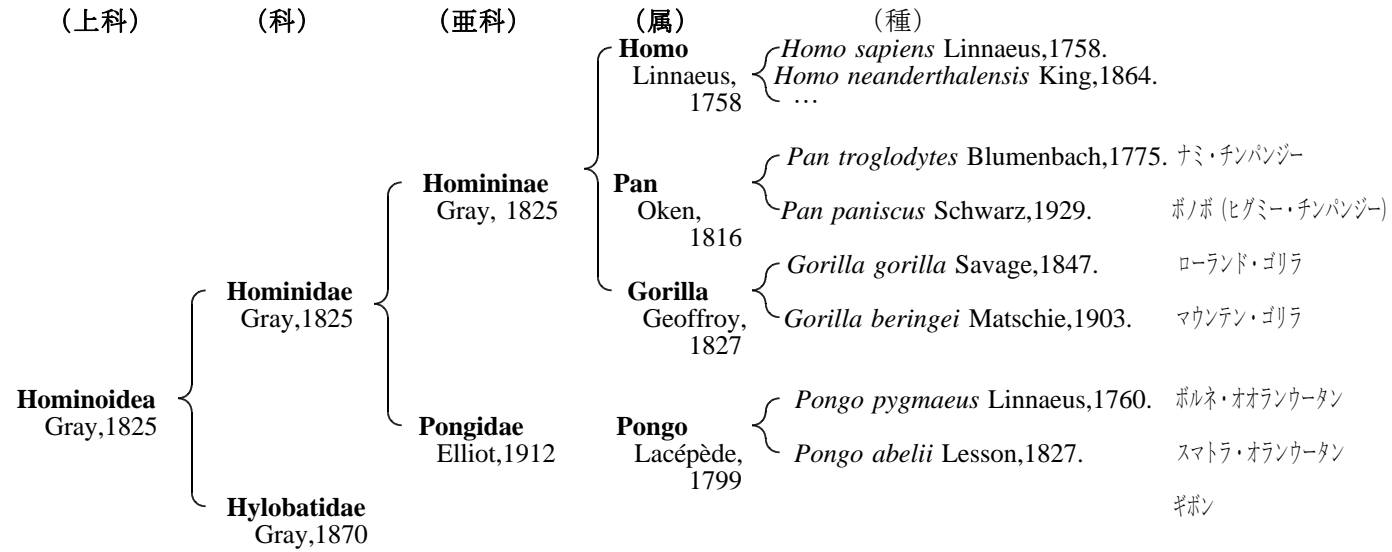
\*\*短尾；Papiones

\*\*\*長尾；Cercopithecii

3. **キツネザル属 (Lemur)** .

4. **コウモリ属 (Vespertilio)** .

表-4. 霊長類・ヒト上科の分類 (Colin Groves, *Primate Taxonomy*, Smithsonian Institution Press・Washington and London 2001, pp298-309 より一部修正して作成。)



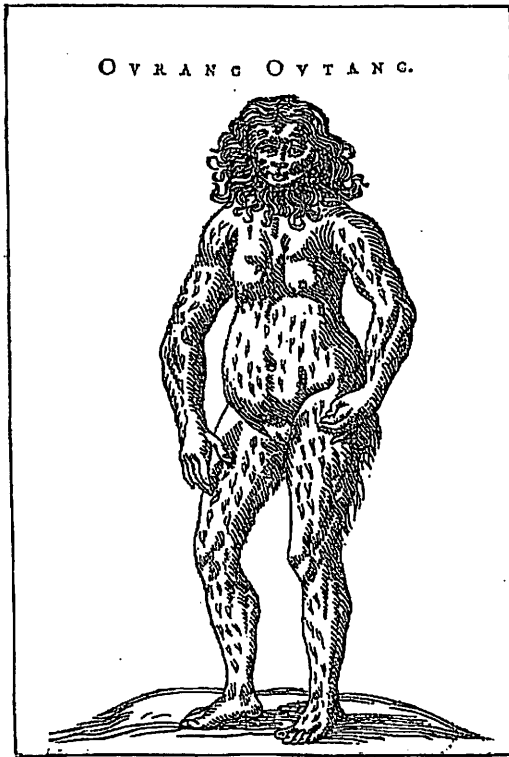


図-1、ヤコブ・ポント：雌の「オランウータン」  
ヤコブ・ポント『東インドの自然と医学の歴史』  
(アムステルダム、1658年)。



図-2、ニコラス・トゥルブ：「オランウータン」  
ニコラス・トゥルブ『医学的注解 第三巻』  
(アムステルダム、1641年)。



図-4、ゲスナーの類人猿；コンラート・ゲスナー  
『動物誌 第一巻』(ティグリ、1551年)。  
アルドロヴァンディを通じ、ホッピウスの「ルシ  
ファー」(リンネの有尾人)の原型となった。



図-5、ジェラルド・スコートン：「マダム・  
チンパンジー」；1738年にロンドンで見せ物になっ  
たチンパンジーを描いたもの。

図-3、ホップウス「ヒト形類」(1760)

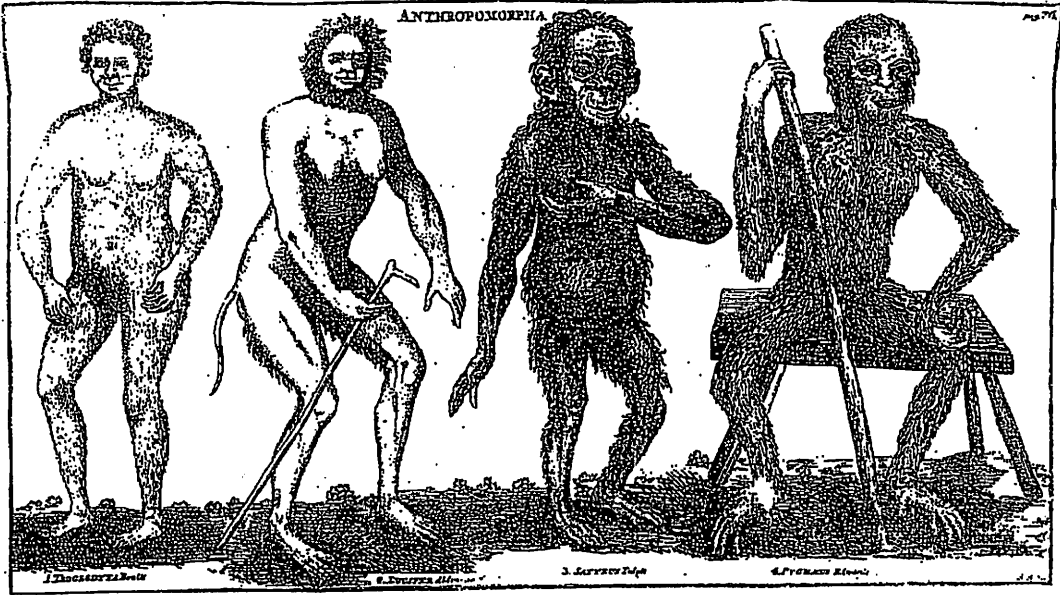


図-6、G. エドワーズ:「サチュルス、野性人、ピグミー、オランウータン、チンパンジー」(1757)。絵のタイトル通り、様々な動物の特徴を融合させて描いている。

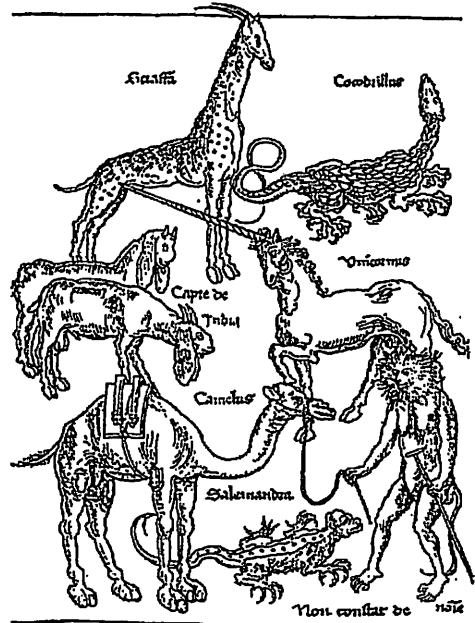


図-7、ブライデンバッハ、『聖地旅行記』(1483)。ホップウスの「ルシファー」の真の情報源となった挿絵(右下の「名称不詳」とされている動物)。